東宝

幻夢戦記 レダ

STORY ALBUM

FANTASTIC
ADVENTURE
OF
YOHKO

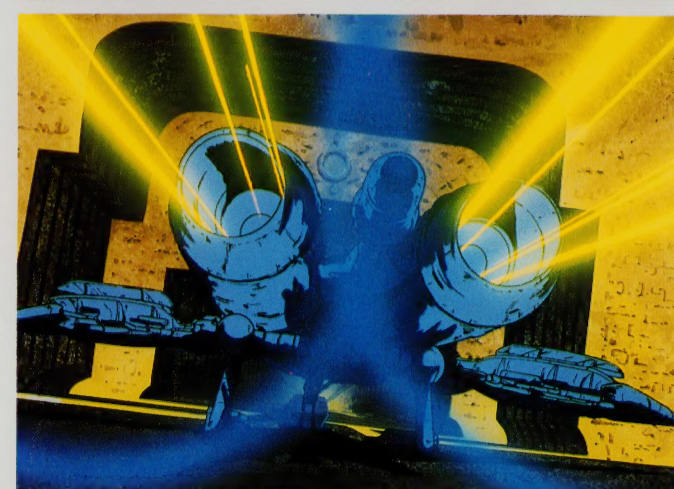
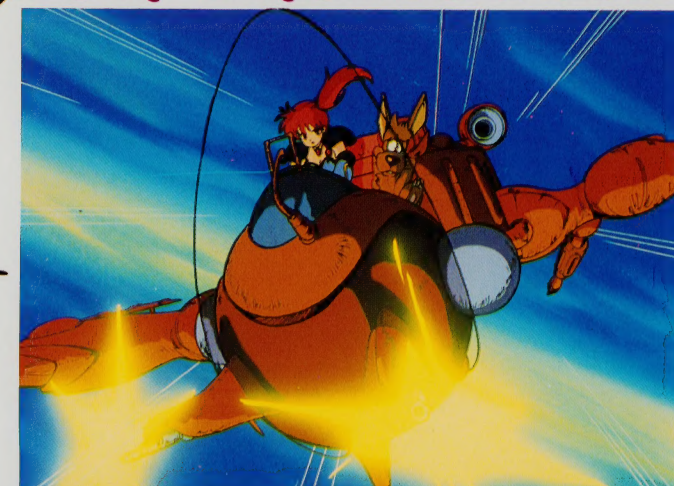
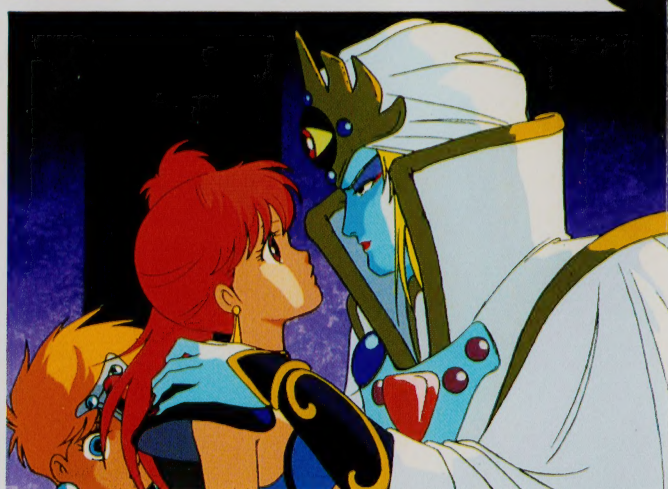
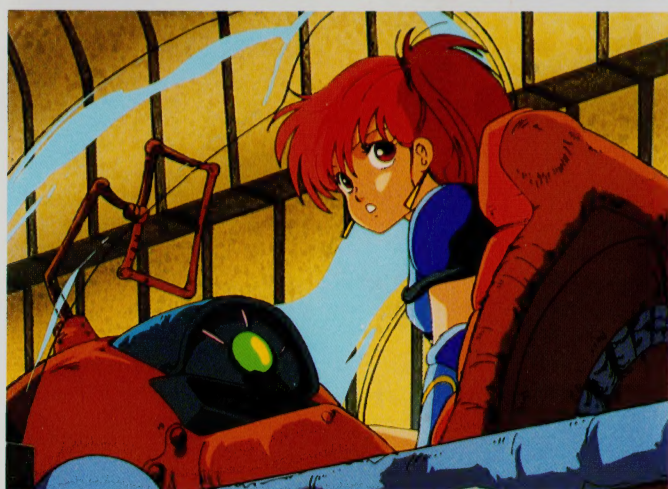
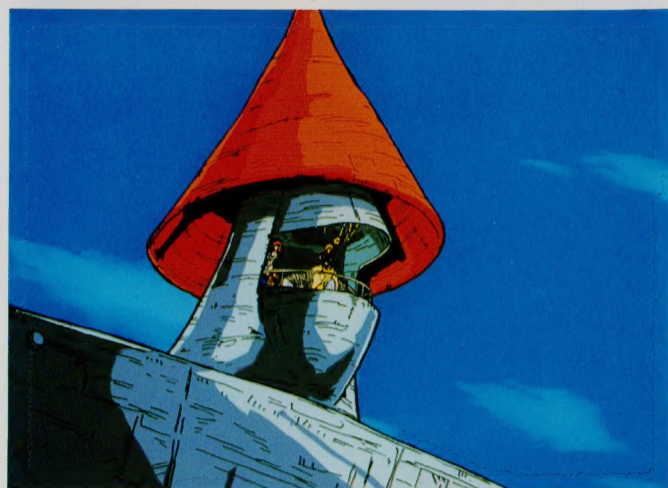
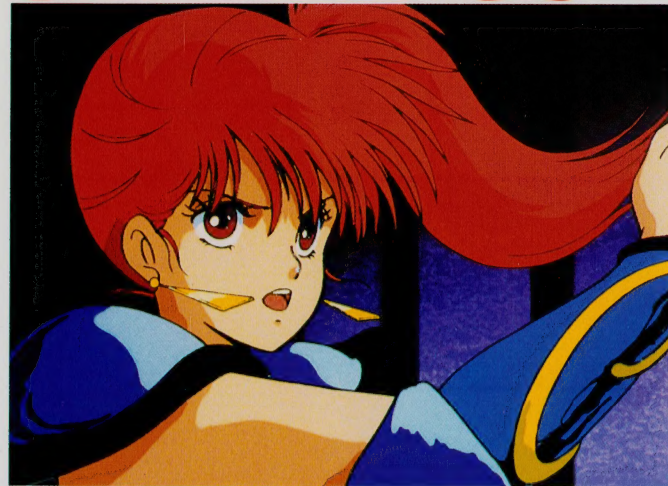
フィルム・ストーリー
〈決定版〉

陽子クローズ・アップ

いのまたむつみ
大インタビュー&描き下ろしイラスト

contents

LEDA

Leda ENGLISH VERSION FOR PROMOTION

I don't know if the days of year an and half are
too long or too short to admire a person.
But I composed this melody with all my love for him.
When I completed this melody, I made up my mind.
I must confessed to him my love.

Me, A Warrior of Leda ?
I flew over the land of Ashanty, to reach to my stolen melody.
Let me return to my own world.
Ringhum, Yoni, Please help me !
I shall never let it take the heart of Leda !

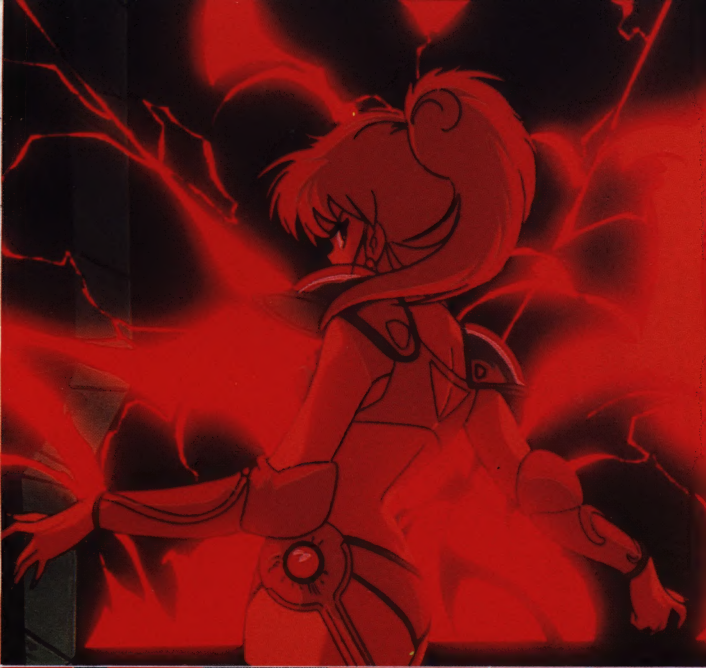
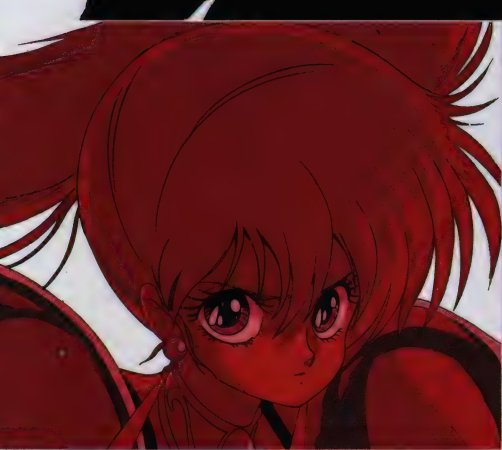
〈日本語版〉
１年５カ月という時が
人を想うのに長すぎるのか、
短すぎるのか、わかりません。
でも、その想いをこめ、
この曲を作りました。
この曲ができた時、
わたしは決心しました。
彼に告白しようって。

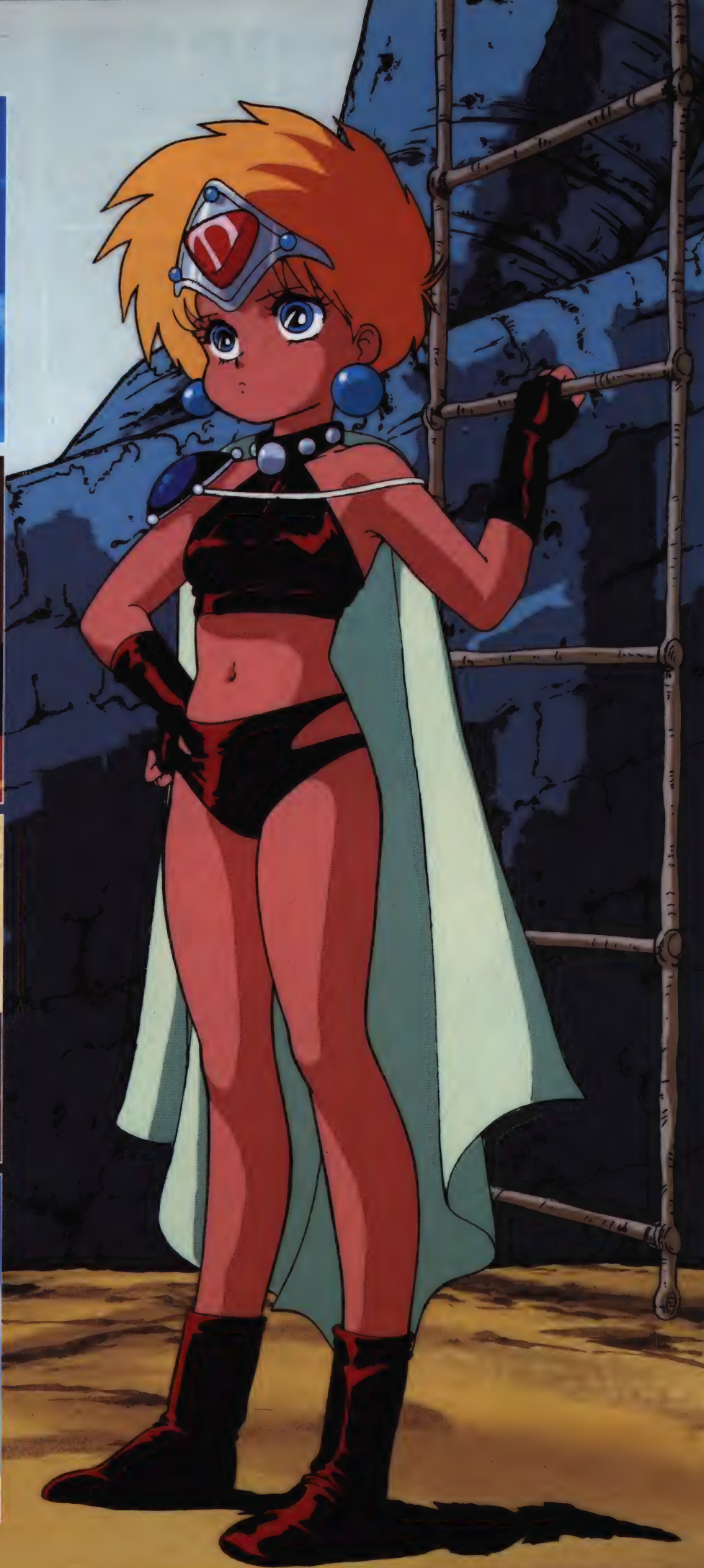
わたしがレダの戦士？
奪われたメロディーを求め、
アシャンティの空に
わたしは飛ぶ。
帰して、わたしの世界に。
リンガム、ヨニ、わたしを助けて！
レダのハートは、渡さない。

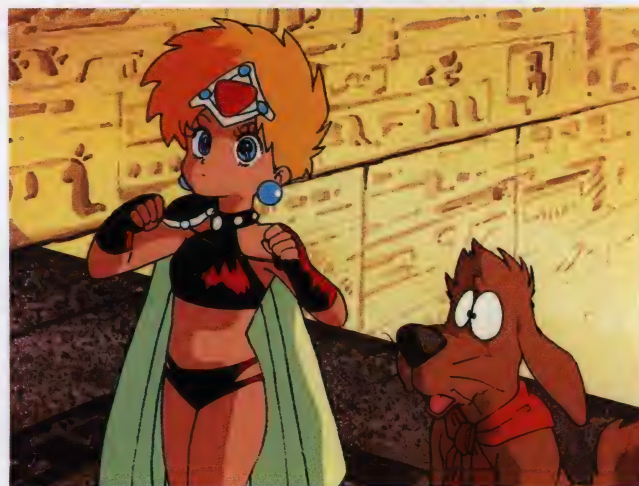
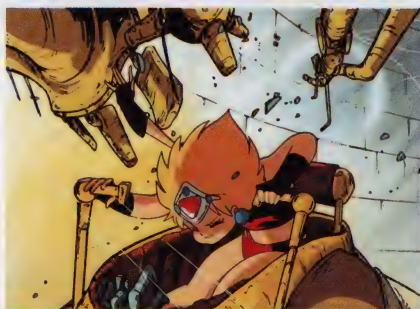
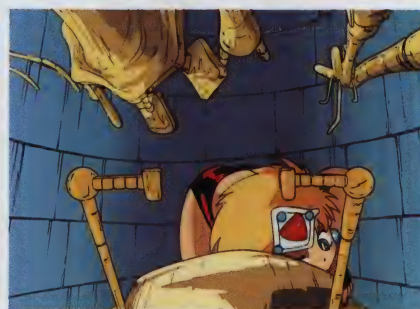
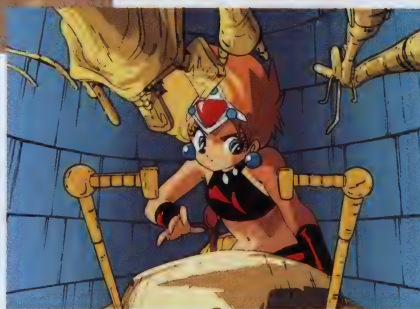
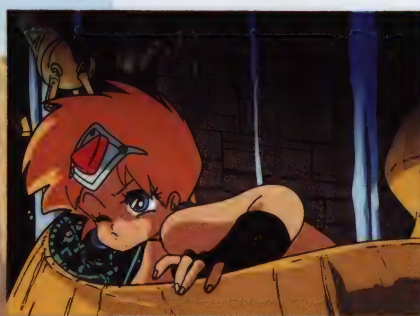
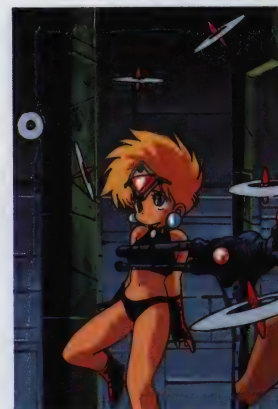
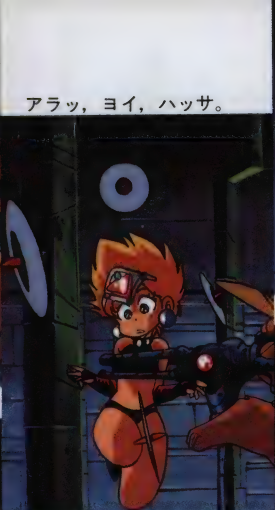
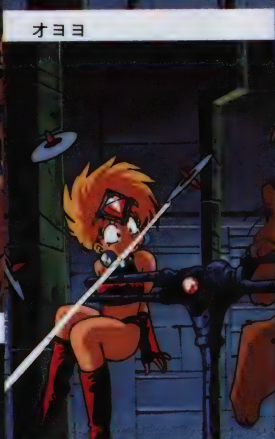
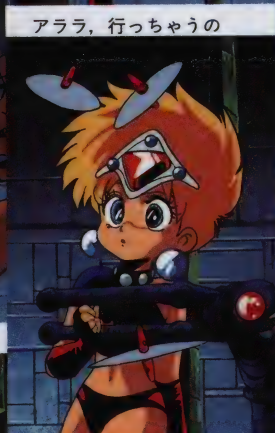
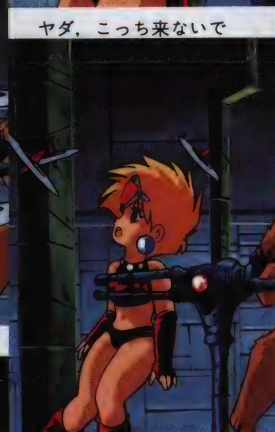
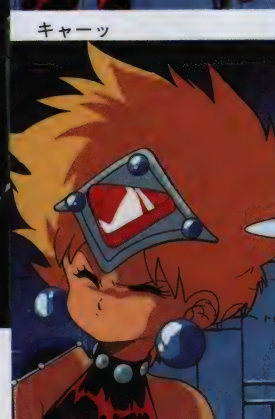
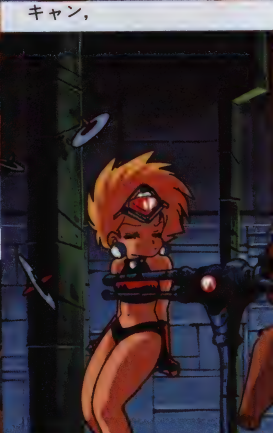
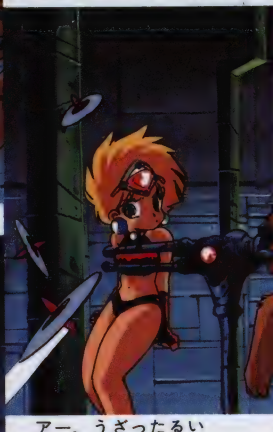
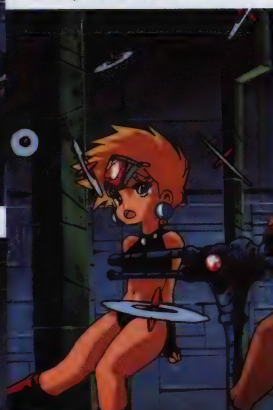
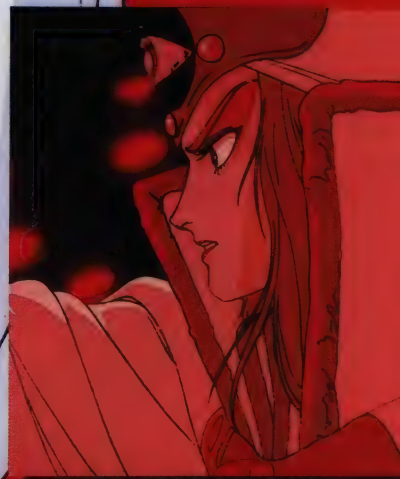
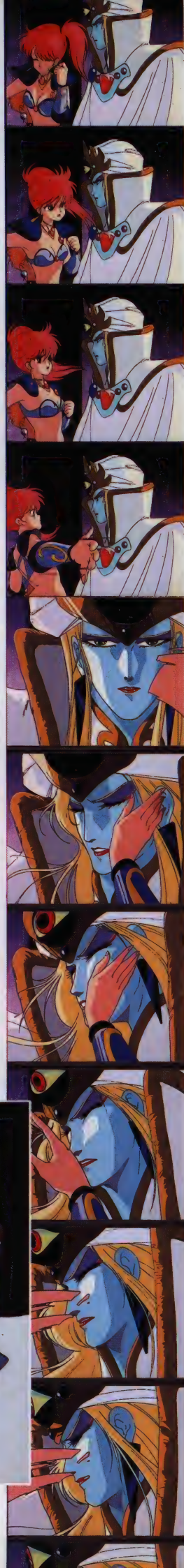
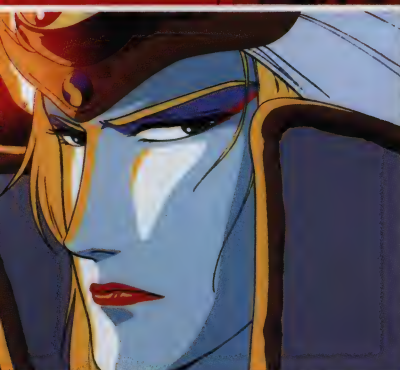
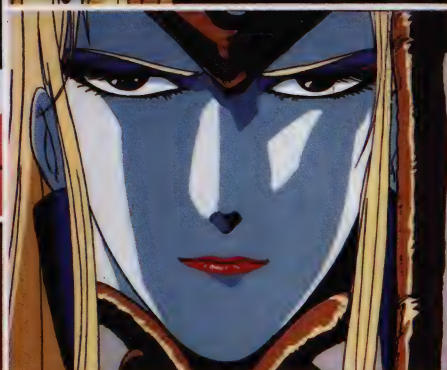
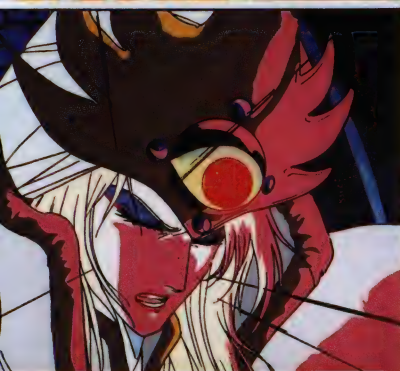
CLOSEUP
Yohko
〝あたし、朝霧陽子――
ふつうの女子高校生…
のはずなんだけどー!?〟

〝帰りたい…帰ってもう一度…〞

一人の少年への想いをこめたメロディー…。それが陽子を冒険の世界へ誘い込んだ。見知らぬ世界で、伝説の戦士に転生した陽子は、戸惑いながら、自分の世界へ帰るため、強大な敵に、敢然と戦いを挑んでいく！陽子を助けるリンガムとヨニ！しかし、陽子の本当の敵は…誰？

Fall in
Love
Fall in
Dream

陽子――それはいくつもの鏡に映った、少女のゆらめき。せつない想い、やさしくこぼれる笑み、不安、ときめき、そして……決意。陽子の中にいる何百人もの少女たち。一人の少女の中にある何百もの心。その一つ一つが、陽子の表情を、細かく彩る。そして――ふつうの女の子は、誰も、レダの戦士を宿している………。

The Warrior? A Girl? or…

Yoni “あたしはレダの巫女でヨニってんだ！”

ヨニは、いちずな女の子だ。仲間をゼルに皆殺しにされた、たった一人のレダ教徒の生き残り。レダの神殿の廃墟に隠れ棲み、巨人ロボットを操って、果敢に、ゼルと戦っている。
レダの伝説を心から信じ、その実現を誰よりも、心待ちにしているヨニ。陽子が、伝説のレダの戦士としてヨニの前に現われた時、全身で歓びにふるえた、あどけない少女——ヨニ。しかし、小さな体の中には、あふれんばかりのエネルギーが満ちている。
一見、元気なはじけっ娘。でも時々見せる目つきは、色っぽかったりして……。いったいヨニはいくつなんだろう？

ヨニはなんといっても、クルクルよく動くところが、魅力の中心。時には、ふっとさびしげな表情も見せるけれど、すぐふっきって、はじけたように動き出す。上は、ゼルの罠にかかって空気の壁に閉じこめられたシーン。負けん気でつっかかっていく顔がかわいい。右は巨人ロボットの発進と戦闘シーン。左はゼルに捕われた時、体は縛られていても、その分、表情がよく動く。どうです、この顔の動き！

"私のこの手で
伝説を
書き換えてやる！"
横顔はわりと少年っぽかったりする。
浮遊城ガルバの城主、総統ゼルは、荒廃したアシャンティに見切りをつけ、ノアへの侵攻を企てていた……。そのためにレダのエネルギーの鍵を握る陽子を引き寄せたのだが……。久々にアニメに登場した美形キャラ、ゼル！めいっぱい美形していて、妖しい美しさをまきちらす。こうまで美しいと、やっぱり、悲劇の人になるしかない。
Zell

ゼルはあまり表情は変えないのだけれど、悶えたり、怒ったりして少し崩れると、また凄い魅力が出たりする。右は陽子にびんたをくらうシーン。動揺を押えているけど、目がコワイ！

ゼルの後正面。うん，あまり見せない訳がわかる。

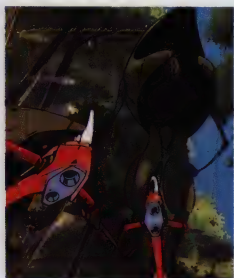
"わしの名はリンガム。
すべてを見、すべてを聞き、
すべてを知るために旅をしておる。"

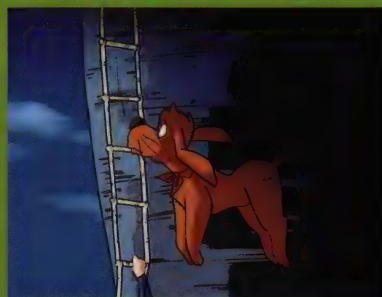
Ringhum

ゼルの兵士AとB▶
ゼルの部下で陽子を狙う男たち。左のいかついのがA、右のふとったのがB。

▼ゼルの側近
レダの伝説を信じ、恐れている小心な男。脚本ではチザムという名がついていた。

▼カエル兵士
ゼルの部下。アシャンティの不思議な生き物?

◀オムカ
浮遊城についた陽子たちを出迎える「お迎えロボット」

A君▶
陽子があこがれている少年。最後まで顔も名前も出てこない。

アシャンティの森で陽子が出会った放浪の学者犬。好奇心が強く、すぐ「お前は何じゃ?」「それは何じゃ?」とききたがる癖がある。危険に会うと毛が逆立つというまるで猫みたいなところもある。陽子と共にレダのハートを追って冒険にまきこまれていく。特技は空を飛ぶこと。

FILM STORY

"このメロディーが、あたしに、勇気を与えてくれたのかも…"

水槽の中のピアノ…。閉ざされた心の風景。

プロローグ

その調べは、まるで水の中から聞こえてくるようだった。熱帯魚がゆるやかに泳ぐ、かげろうのような水の中。ぼんやりと浮かぶ、ピアノを弾く少女のシルエット。ピアノの音は、光にきらめくさざ波のように、ひめやかにたゆたい、愁いを含んで響いた……。

少女の名は陽子。朝霧陽子。

鍵盤の前におかれた楽譜には一枚の写真がピンで止められていた。友人に、少女を撮るふりをして、こっそり撮ってもらったのだろうか、その写真の少女の後には、一人の少年の姿が写っている。

「知ってましたか、あたし、あなたの事、ずっと好きでした」

ピアノの横にはマイクスタンド、そこからコードがのびて、カセット・デッキにつながっている。

「一年五ヶ月という時が、人を想うのに長すぎるのか、短かすぎるのか、あたしにはわかりません」

少女のモノローグがピアノの音にかぶさっていく。

「この曲は、あなたへの想いをこめてあたしがつくったんです」

テープは、もの悲しいその曲を収めて行く。

「この曲が出来た時、あたしは決心しました。告白しようって……。そうなの、このメロディーが、あたしに勇気を与えてくれたのかも……」

少女は明るい光が射しこむ並木道を歩いていた。頭にはヘッドフォン、腰の赤いテープ・デッキは、あの曲を流していた。

一瞬、少女の足がとまった。

大きく見開かれた少女の瞳にとびこんで来たのは、あの彼！

並木道の向こうから少年は歩いて来た。木もれ日が少年の姿を飾る。

緊張に震える少女の手。大きく深呼吸をすると、少女は意を決して歩き出した。言うんだ！

一歩く、少年に近づいて行く。

ピアノのメロディーは、激しく高鳴る。来た！目の前に少年！

スレ違った――。

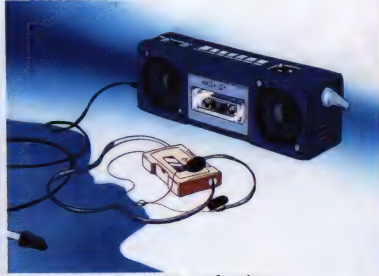
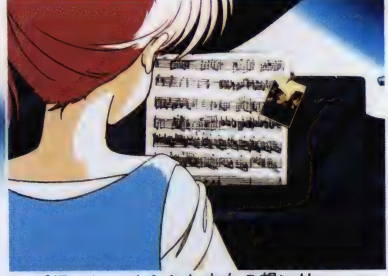
少年は少女を気にもとめず、通り過ぎた。少女は立ちどまり、呆然とうつむいた。

思わず目をふせる。

「でも……」

少年は遠去かっていく。

「言えなかった……」

世界中から取り残されてしまったような悲しみが、少女の心を覆った。そんな

ピアノにこめられた少女の想いは…。

マイクを通してテープの中に。

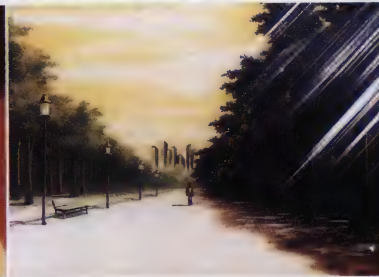
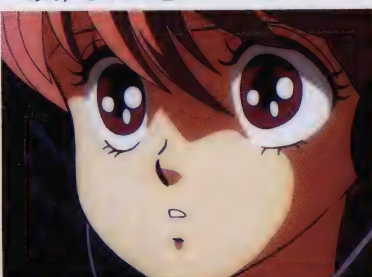
心を決めて並木道を行く少女の耳には…。

ヘッドフォンからあのメロディーが。

あ，向こうから歩いてくる人は……？

彼だ！

だめ，そんな。急すぎる。

あん，どんどん近づいてくる。

どうしよう？告白！告白!?

まぶしくって顔なんて見られない。

お願い，あたしに勇気をちょうだい。

言わなくっちゃ，言わなくっちゃ。

少女は深呼吸して，気持を落着かせると，

きっぱりと決心して歩き出した。

激しい調子のピアノの音が流れる。

一声，一声かけるだけ……。

少女の気持も知らぬげに、並木道に、日の光は、あくまで明るい。
一枚の木の葉が、ちぎれた少女の心を代弁するように、枝から離れた。
少女をかすめ、ゆっくりと舞い落ちていくひとひらの木の葉。地面に落ちた。と、思ったその一瞬――。
木の葉は、吹きちぎられたように、消え去った。
地面から強烈なエネルギーがほとばしり、少女の髪を逆立てる。少女の足元で大地は溶け、熱湯のように泡立ち吹き上がった。驚く少女を青い閃光が包んだと思うと、吸いこまれるように、少女の姿は消えた。後には、小さな地面の波紋だけが残っていた。
何か気配を感じたのか、少年は足を止めるとふり返ってみた。だが、そこに何もある筈はない。並木道も、遠くの街も、いつもと変わらぬ姿でたたずんでいる。少年は踵を返すと、又、歩き出した。ほんの少し前スレ違った少女のことなど、少年の気にもとまらなかったのかもしれない……。
少女が消えた地面には、木もれ日が影を落とし、静かにゆらめくばかりだった――。

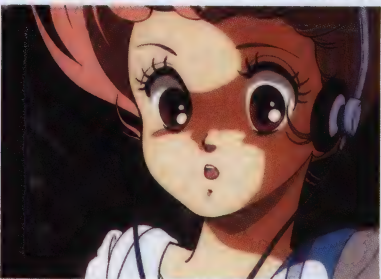
「でも…言えなかった……」

ちぎれた少女の心のように散る木の葉。

少女を残して，少年は歩み去る。

木の葉は吹きちぎれるように消えた。

少女をかすめて落ちていく…と思った時，

少女の足もとで地面が泡立ち……

何，何が起こったの!?逆立つ髪！

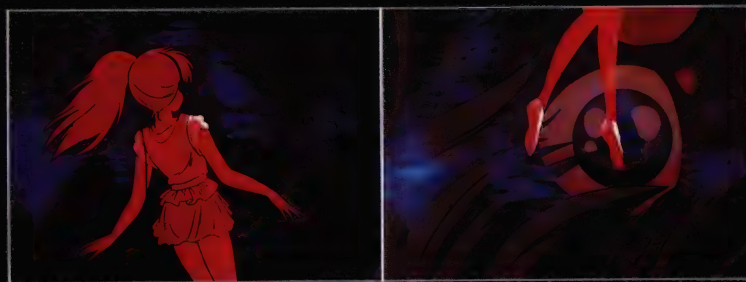
閃光が走って少女の姿を消し去った。

少女を包むように立ち昇ると，

木もれ陽だけが，妖しくゆらめいている。

少年はふり返ったが，変わらぬ景色だけ。

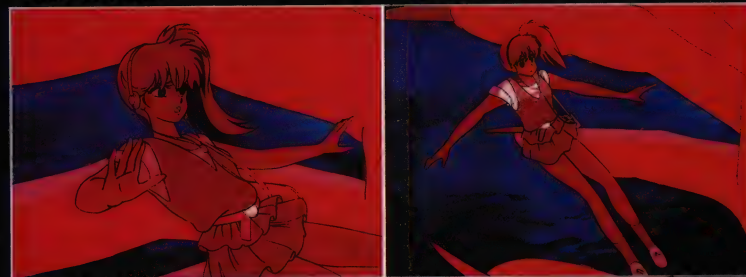
少女、陽子は、青い闇の中に浮かんでいた。天も地もなく、ただ青い輝きが不気味にまたたくー。その中に赤く浮かび上がる陽子の姿。
　そこは、異次元の洞。
　突然、陽子の目の前に青い光のかたまりが現われた。光は次第に人の形をとると、異国風の装いに身を包んだ、美しい青年の姿に変わった。
　整った顔立ち、切れ長の目、ゾッとする程妖しい美しさにあふれた青年。だが、その瞳は冷たく、唇は酷薄な笑みをたたえていた。
「待っていたよ……」
　猫なで声で青年は陽子に語りかけ、手を陽子に向かって伸ばしてきた。
「さあ渡すんだ、レダのハートを！」
　青年の手が陽子に迫った。手は陽子に近づくにつれて巨大化し、檻のように、陽子を包みこんだ。見知らぬ罠にかかった小さな動物のような陽子！
「いやぁーっ!!」

　陽子は絶叫した。
　再び閃光が陽子の体を包み、陽子の姿はかき消えた。
　青年の手は空をつかんだ。信じられなかった。絶対に捕まえた筈の獲物だった。
　青年はゆっくりと手を開きながら、まだいぶかしげな表情をしていた。
「逃げた……!?」
　青年の横顔が怒りにゆがんだ。
「ゼル様」
　青年に心配気に呼びかける声がした。
　青年、ゼルの側近の声だった。
　暗く赤い光を放つ円のある不思議な室。ゼルは、そこに部下達といた。そこから異次元の陽子に接触していたのだ。側近の声に我に帰ったゼルは、立ち上がると部下に命じた。
「追え！レダのハートは確実にこちらの世界にひき込んだ！必ず手に入れるのだ」
　二人の部下がすぐさま駆け出して行く。
　不気味な赤い光を浴び、ゼルはすさまじい形相で宙をにらみつけ続けた。

レダのハートをー!!

陽子は青い闇の中に浮かんでいた。

上も下もない，ここは……どこ？

光が人の形になって……

「さあ，渡すんだ。レダのハートを」

いくら美形だって，この手の大きさは！

ちょっと，いくらなんでもあんまりよ！

行方不明のハートたち

あなたのことなら　何でも知ってる
口ぐせや横顔や好きな色　エトセトラ
好みのタイプは　優しい子だって
私なりの努力を　気づいてほしいの
Wo Wo Wo Wo Wo One Way Love
瞳があうたびに
うつむくようじゃ駄目ね　きっと
Wo Wo Wo Wp Wo One Way Love
あなたに恋して　飛び出したまま
行方不明のハートたち

はずれてばかりの　星座占い
おしえてよ　私たち　恋人になれますか
夢見るだけなら　きれいでいいけど
傷ついてもいいから　ロマンスしたいわ
Wo Wo Wo Wo Wo One Way Love
臆病なのよ
好きといえないなんて　きっと
Wo Wo Wo Wo Wo One Way Love
あなたに恋して　飛び出したまま
行方不明のハートたち
行方不明のハートたち………

闇の中で

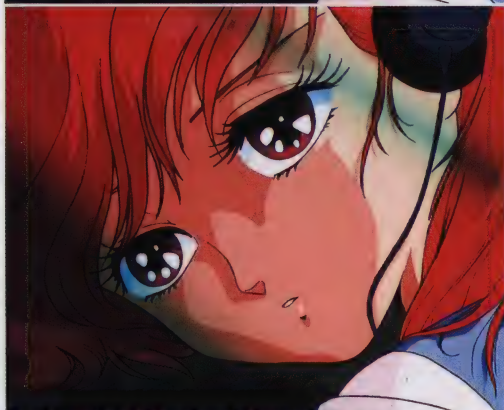
「イヤァーッ!!」

こんな目に会わされたらもう……

「逃げた？こんなバカな……」信じられぬ顔のゼル。

不気味な光に照らされてゼルは何を企む。

ゼルの命令で二人の部下が陽子を追う。

さあ、渡すんだ。

"それに…ここは、どこ!?"

陽子は、気を失って草むらに倒れていた。森の切れた、池のほとり——。小さな滝が澄んだしぶきをたて、流れに突き出た岩からは、薄紫色のカエルに似た生き物が、水の中へ飛びこんでいる。おだやかで、美しい場所だった。

陽子はゆっくりと目をあけると、立ち上がり、ヘッドフォンをはずして、ぼんやりと周りを見た。

森は不思議な生き物にあふれていた。

群れ飛ぶ赤と白の蝶に似た生き物は、躍るように空へ上っていった。なだらかな斜面には、緑色の球状植物がはえ地面から首のような茎を伸ばすと、緑の球が離れ、空中に浮いてはじけとんだ。白く光る胞子が風にのって、森の中へ拡がっていく。川にはオレンジ色の岩とも生き物ともつかぬ丸いものが、せせらぎを聞いている。葉かげから見える太陽は、連らなった二重太陽で、柔かな光が澄んだ青空に映える。

羽根を拡げた妖精のように乱舞する浮遊植物のしげみをかきわけ、陽子は先へ進んでいった。枝の上では紫色のくわがた虫が牙を動かしている。

ふいに不気味な電子音がした。

立ち止まった陽子の行く手を、奇妙な一つ目の機械がふさいでいた。空中に浮いたその機械が、つと、陽子に近づいて来た。

後ずさりして、陽子は駆け出した。

後を追って機械も森の中を飛ぶ。速い。小さな段差があった。ジャンプして飛びこえる陽子。こけた。その拍子にヘッドフォン・ステレオが、転げおちる。

「あっ…待って！」

手を伸したがもう遅い。と、地面がぐっと盛り上がった。

陽子が落ちたのは巨大な亀の背中だったのだ。

亀は大きく口をあけてあくびをすると、ゆっくり森の道を歩き出した。一歩ごとに陽子は大ゆれ。手の届く所につるが伸びていた。思い切ってとびつく。そのまま亀をやりすごす。ほっとして力が抜けた。陽子の手は、つるから離れ、地面に激突!?

「アイタタ……」

草がクッションになってくれたけど、陽子はしたたかお尻をうってしまった。その痛みが、陽子にヘッドフォン・ステレオのことを思い出させた。

見知らぬ土地で一人きり、ふいに途方にくれた。

陽子のそばのしげみがガサゴソと音をたてて、一匹の犬が現われた。

「落しものじゃよ、お嬢さん」

犬の首には、失くしたヘッドフォン・ステレオがぶらさがっていた。

「あ、えーと……どうも」

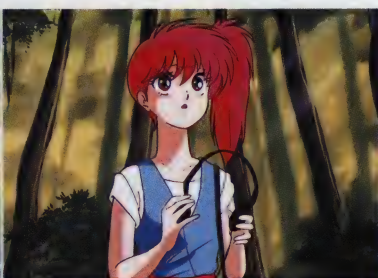
戸惑って何といっていいかもわからない陽子に、犬は親しげに近づいて来た。

「いや何、礼にはおよばん。親切は、わしのモットー。受けとりなされ」

「あ……ありがとう」

陽子がヘッドフォン・ステレオを受け取ると、犬は後足で首をかきながら、自己紹介を始めた。

柔かい草の上で，ゆっくり，陽子は目を開けた。

原色の蝶の群れが陽子のまわりで舞うと

ヘッドフォンを外すときこえる森の声。

滝には，紫のカエルモドキが鳴く。

陽子は，森のはずれの草原に倒れていた。

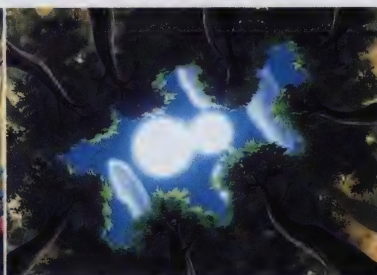
輝きながら森をうめていく胞子

緑の玉が宙に浮くと，はじけ，胞子が出る

陽子はもっと森の中へ歩き出す。

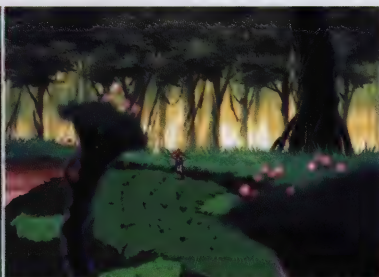
空へと上っていった。

次第に不気味な雰囲気も出て来て……

一見，小人の形に見える浮遊植物たち。

二重太陽。これは別世界のしるし。

このオレンジ色のものは，何なんだ!?

ASHANTY

アイタッ！こけてしまったその拍子に

ポッドに追われて逃げてきた陽子だが，

偵察ポッド。ちょっと近づかないでよ！

何，これ!?

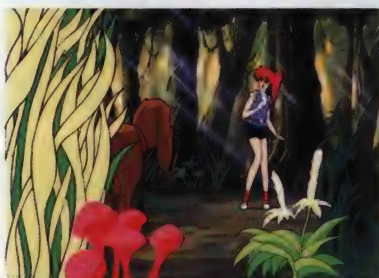
つるにつかまったのはいいけれど……

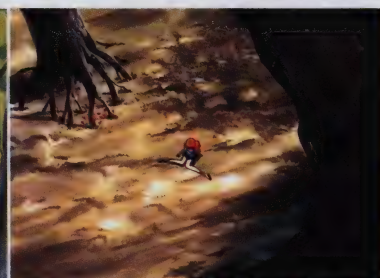
もうユーゼンとしかいいようがない。

亀!?亀ねえ……何ちゅう顔だ。

待ってよ！という間にも地面が隆起する。

「落し物じゃよ，お嬢さん！」

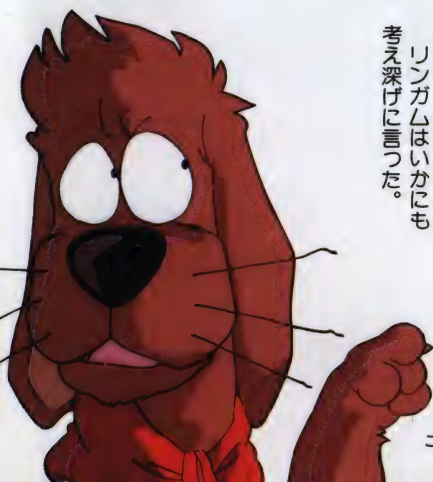
アタタタ……。お尻うっちゃった。

「あ…えっと，どうも」位しか言えない。

すっかり途方にくれた陽子，どうしよう？それにここは……？

あたしのヘッドフォンどこへ行ったの？

ウッソー!!遅いんだよ陽子ちゃん！

ハッと，自分が誰と話しているか気づいて

「何かよくわからなくなってるの！」

「あたし朝霧陽子，普通の女子高校生」

「うむ。わしの名はリンガム。すべてを見、すべてを聞き、すべてを知るために旅をしておる。んでおぬしは……」陽子はかがみこんで犬のそばに顔を近づけると、髪をかきあげながら答えた。
「エ・ト……あたしは朝霧陽子……普通の女子高校生……」
「ジョシコウコウセイ……？　な、なんじゃそれは……」
「うん、そのはずなんだけど、なんだかよく判らなくなってるの……」
「どういう事じゃ？」
「あたし、ちょっと前まで、並木道を歩いてたはずなのに、いつのまにかこの森の中にいるの。そして、その森の中には見た事もない花や虫や、いろんな生き物がいて…それに…それに…」
ようやく陽子は気がついた。目を見開くと、とび上った。
「わーっ！犬がしゃべってる。どうして!?」
手をバタバタふって驚く陽子。
「それに……ここは、どこ？」
陽子は、やっと自分がまったくの異世界に来たことを悟った。
リンガムも陽子が何か変わった所があると気づいたようだ。
「おぬし……この世界の人間ではないのか」
「わ――っ！　又しゃべった」
「落ち着かんか。犬がしゃべって何が悪い！」
「は……はい！」
思わず陽子は納得してしまった。
「ここは、アシャンティじゃ。おぬしは、封印された世界〝ノア〟から来たのではないか。わしにちょっと思いあたる事がある」
リンガムはいかにも考え深げに言った。

この犬，何か知ってるらしいんだけど…。

小高い岩山をかすめて象牙色の鳥が群をなして飛んでいく。リンガムに案内されて、見晴らしのいい岩場に来た陽子は、信じられないものを見た。
　はるかに広がる平原、地平線にかすむ山なみ、そしてその上に、空を白く塗りつぶして、逆立した高層ビル群が浮かんでいたのだ。
　呆然と立ちすくむ陽子に、リンガムが説明する。
「何日か前からじゃ……あのしんきろうが現れたのは……。どうかな、あの景色に見覚えはないかな……」
　リンガムの声も届かないのか、陽子はしんきろうを見つめ続けた。風が陽子の髪を、なぶっていく。
「ふーむ、すると、やはりあれはおぬし達の世界〝ノア〟の街なのか」
　陽子とリンガムは岩場に腰を下ろし、しんきろうを見ていた。
「ええ……でも、信じられない、ここが全然別の世界だなんて……」
「もともとは、一つの世界だったんじゃ。ああやってノアのしんきろうが出る時には、ノアとアシャンティの間に次元の道ができるという……。おそらく、あんたは、何らかの力でその道を通って、こちらに来てしまったんじゃろうな……」
「ますます信じられない」
　そう言いながら、陽子はヘッドフォンを頭につけた。
「ほう？そりゃなんの道具じゃ？」
　リンガムには初めて目にする機械だ。
「あ、コレ？　知らないんだ！」
　陽子は明るく教えてやった。
「音楽を聞くものなのよ」
「ほう、ちょっとやってみてくれんか」
　好奇心の強い犬だ。
「いいけど……外には聞こえないのよ」
　陽子の指が、スイッチを押した。
　あのピアノのメロディーがヘッドフォンから陽子の耳に流れてくる。この曲を頼りに告白しようとしたのはついさつき。

「ますます信じられない」

「あれが，ノアの世界なのか…」

大空に倒立する高層ビル群……見た事ある！

何，アレ!?しんきろう？

強烈な光が走ると，次元の扉が……。

ふいに光に包まれ始めた陽子。

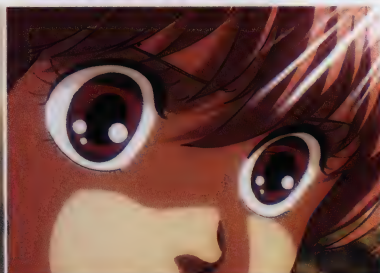
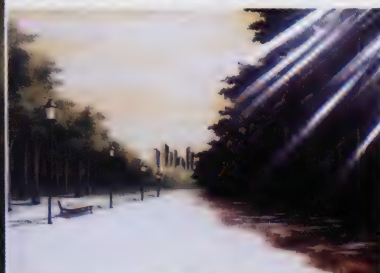
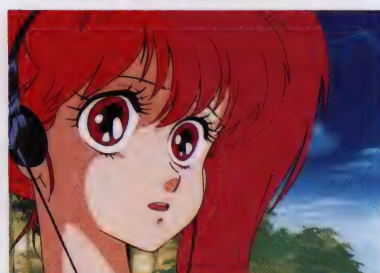
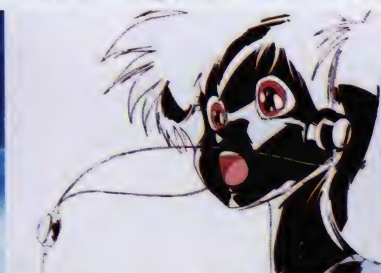
テープの音楽は陽子に一筋の涙を……。

「何じゃそれは？」「あ，知らないんだ」

「オ，オイ」アン，水ささないでヨ。

気がつくと目に入ったのは……

リンガム！ど，どうしたの!?

帰れた……。喜びが胸にこみあげてくる。

なつかしいあの並木道！

元の場所？失望が心を曇らせる。

次元エクスプレスの帰りは速い！

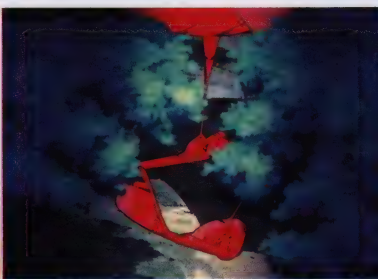
思わず，キャアアア——ッ!!

そのショックで——

蜃気楼

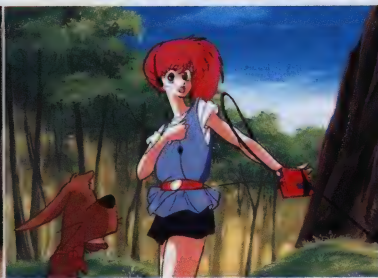
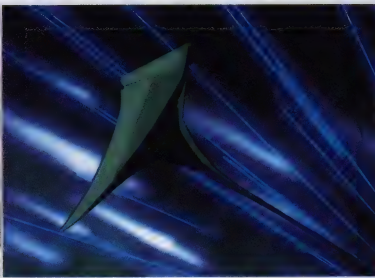
「どうして、こんな事に……帰りたい、……帰って、もう一度……」
涙が一筋、陽子の瞳にこぼれた。
胸に自分の世界への想いが、熱くこみあげて来たその時、あの青い閃光が陽子を包んだ。閉じた目を開くと、そこはあの並木道。
帰れた！陽子の顔に笑みがこぼれる。
「オ……オイ」
リンガム？ふりむくと、地面から首だけ出してリンガムがあせっている。
「な、なんとかしちくれ」
「キャーッ」
思わずあげた悲鳴が、陽子をノアから吹きとばした。光と影になって飛び散った陽子は、再び、もとの岩場に戻っていた。失敗だった。
陽子は立ち上がると、音楽をとめた。
鳥の群が岩場をよぎって飛んで行った。
冷汗をたらしながらリンガムが尋ねた。
「……い、いったい？　何が起こったのじゃ？」
「わからない……でも……せっかく帰れたと思ったのに……」
「すると、今のは……ノアの世界……」
「うん……。あーあ……がっくりだなァ……」
「気をおとすのは早いぞ。わしの経験と知性と教養から、この事態を考えるとだな……」
リンガムが、そう言い出した時だ。背後の木かげに、鈍い金属音をたてながら、何者かが忍びよって来た。
だが二人はそんなことに気づかない。今の現象を解こうと一生懸命だ。
「その機械が、ノアとアシャンティの次元の道に、何らかの関わりを持っておるのではないか」
「エーッ……。まさか……コレが」
陽子には、使い慣れたヘッドフォン・ステレオだ。しかし、リンガムは陽子を説き続けた。
「とにかく、もう一度それを動かしてみんしゃい」
「で、でも」
「おぬし、自分の世界に帰りたくはないのか」
リンガムの言葉は陽子の胸を刺した。
「帰りたい……」
目を伏せてつぶやく陽子をリンガムは、はげました。
「だったら、何でもやってみることじゃ。こっちに来れたのだから、帰り道は必ずどこかにある」
陽子の顔がパッと晴れやかになった。
「そうね、そうよね！」
陽子はスイッチに手をかけた。その時、猛烈な勢いで伸びて来た触手がデッキに吸いつき、陽子の手からヘッドフォン・ステレオを奪い去った。ゼルの手下、カエル兵士だ。
「ハッ」となる陽子。
岩場の下は、カエル兵士、偵察ポッド、そしてエア・バイクに乗ったウォーリアたちが取り囲んでいたのだ！
「やだ、どうしよう……取られちゃった……」
「わしの経験から云わせてもらうが…逃げた方がいいみたいじゃぞ……」
その間にも、ウォーリア達は岩場へと向かってくる。
陽子はまだ、ためらっている。
「でも……もし、アレがないと帰れないんだったら……」
「そうは云っても、生きて帰らなくては、意味がなかろう」
「おどかさないでよ……」
「おどしじゃない。う～、毛が逆立ってきおった！」
そう言い残すと、リンガムは、森へかけこんだ。
「あッ待ってよ」陽子も駈け出す。
「逃がすな！追え！」
ゼルの部下が命じた！

気落ちした陽子をリンガムが励ます。

二人が話に夢中の間に怪しい足が……。

陽子の気持ちを知ってか知らずか，アシャンティは美しい風景を見せる。

「そうよね」陽子はメゲナイ子なのだ。

「こっちに来れたのだから，帰り道はある」

これは，カエル兵士です。

テープを奪っていく！「アアッ」

触手がすごいスピードで飛んできて，

もう一度アタックしようとした時……

「やだ，取られちゃった……」

岩場の下に勢揃いしたゼルの部下。いかついのとふとっちょは，ゼルの室にもいた。

何!? この連中

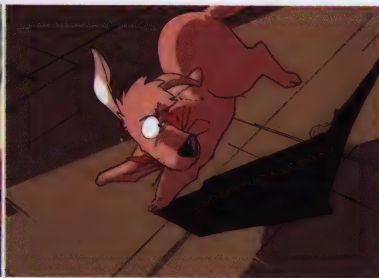
森へ逃げこむ二人を，カエル兵士が追う！

「アン，待ってよ！」陽子も逃げ出す！

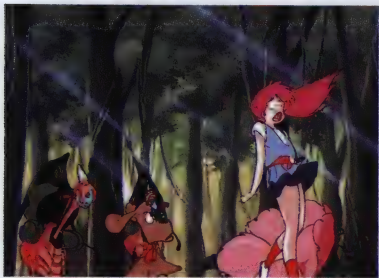
「アレがないと…」陽子は割と悠長。

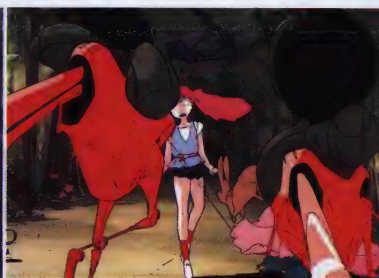
ロボット馬に乗って迫ってくる悪役連！

…それは！……それは………ちがいます……〃

「急げ！追って来たぞ！」

リンガムは飛べるのです。

「これがレダのハート？」

カマをふり上げカエル兵士が迫って来る。

キャン！こっちにもいる!!

いいもん！今の道，引き返しちゃうから。

ズルイ！ジャンプして通せんぼなんて！

ワッ！もう，あんなところに来てる！

「ちがいます…それは」あたしの…。

「お前たちには死んでもらう」殺し文句！

「わしらに何の用じゃ！」

ヤバイナァ，雰囲気出しちゃってる。

ともかく，逃げなきゃ！

右を見ても，左を見ても逃げ道がない。これって，チョッピリ，ゼツボー的じゃない。

カエル兵士がジャンプ。行手をはばむ。

追いつめられて

森の道を走るリンガム、そして陽子！ジャンプして二人を追うカエル兵士！ヘッドフォン・ステレオはゼルの部下の男が受け取った。

「それがレダのハート…？」もう一人の部下の太っちょが不審気に聞く。

「たぶんな、結論は技術部の連中が出すだろう」

そういうと男は、カプセルを取り出し、ヘッドフォン・ステレオをしまいこんだ。

木々の間をぬってリンガムと陽子は逃げ続けていた。だがカエル兵士は速い。距離はどんどん縮まって行く。

「来おった」

リンガムは耳を広げ、前足をばたつかせると、宙に浮いた。この犬は飛べるのだ。

「急げ、追ってきたぞ」

陽子を追いぬきながらリンガムが叫んだ。陽子も、ハッとなってスピードを上げる。

二人は巨大な赤い花が咲く空地に走り込んで来た。その後から、カエル兵士がジャンプ、二人の行手をふさいだ。

身をひるがえす陽子、

「アッ」

遅かった。陽子とリンガムはすっかり取り囲まれていた。

陽子を守るように、リンガムが一歩踏み出した。

「いっ、いったい、お前ら、わしらに何の用じゃ!!」

「用があるのは、この〃レダのハート〃だけだ。お前達には用がない。だから」

情容赦もない部下の声。

「死んでもらう」

「レダのハート……？ちがいます！それは……それは……ちがいます……」

〝レダのハート…？ちがいます！

飛びかかるが，一撃でふっとばされる。

陽子をかばうリンガム！男だねえ！

キャッ！女の子の髪に何すんの！

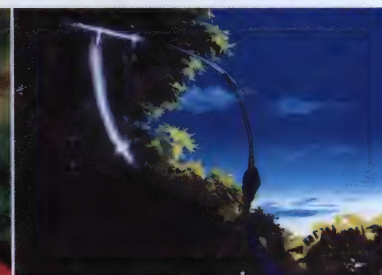
リンガム！その後に迫るカマの光！

しっぽをつかまれて，半泣きのリンガム。

花の方へ追いつめられる陽子。そして…。

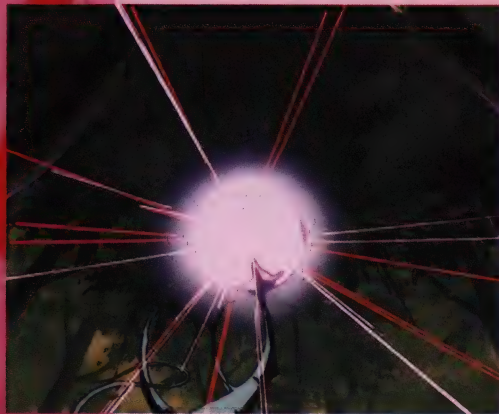
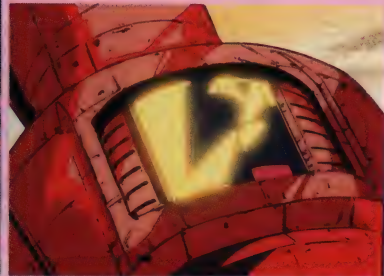
後がない……ジワジワ迫るカエル兵士。

まるでオムスビ……何てバヤイじゃない！

いけない！花びらに足をとられた……。

とどめのカマが中天高くふり上がる！

陽子の声はしぼみがちだ。
カエル兵士がエア・バイクからジャンプして二人に迫った。鋭いカマが冷たく光る。
「おのれ～っ！」
リンガムがカエル兵士に飛びかかったが、一撃の下にはねとばされ、地面に叩きつけられた。
「リンガム!!」
その陽子の後に振り上げられたカマ。ふり向いた途端、カマが宙を走った。
「キャッ」
カマは陽子をかすめた。飛び散る陽子の髪！文字通り間一髪!!
陽子は花の方へ逃げた。兵士の一人がリンガムをしっぽからつかみ上げた。
「うわーっ、おいおい、やめろ！しっぽは犬の誇りなんじゃ、やめろーっ」
あせるリンガム。そのしっぽにカマをあてるカエル兵士。
もう一匹のカエル兵士は陽子をゆっくりと花の方へ追いつめていた。後がない。兵士は高くカマをふり上げた。
陽子の足が巨大な花びらにかかった。
「アッ」
花びらに足をとられて、陽子は花の中に倒れこんだ。すると――。

戦士誕生!

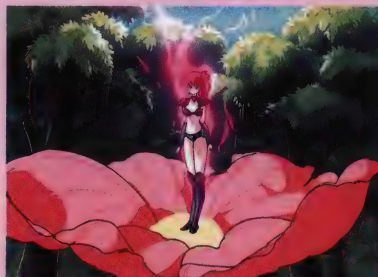
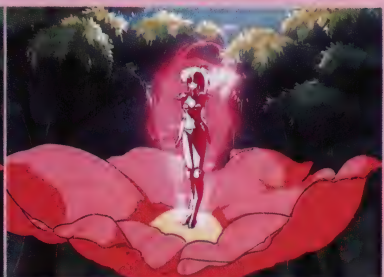
めくるめくピンクの光の波動がたゆたう中，陽子の体は次第に変化し始めていた。

巨大な花から放射される光。

解読の結果は強烈なレダ・エネルギー！

やがて，閉じられた花弁が開き始めた。

「何だと！」ふりあおぐウォーリア。

炎のような光に包まれて現われたのは，

秘められたその奥に浮かびあがる影——。

花の上にスックと立った，戦士のシルエット。満ちあふれるレダ・エネルギー。

生まれかわった陽子の姿だ!!

炎をすかして見えるその戦士は——少女。

巨大な花は陽子を包むように花弁を閉じると、空中高く茎を伸ばした。そして、柔かなピンクの光を八方に放ち始めたのだ!。

その光の波に包まれて、陽子の体は変わり始めていた……。

偵察ポッドの一つ目が激しく点滅をくり返した。赤、黄、ブルー。

「何だこの反応は……」

「解読してみます」

太った部下はエア・バイクに内蔵された解読装置を開けた。

「こ、これは!!強烈なレダ・エネルギーです」

「なんだと!!」

花の方へふりむく部下たち。

巨大な花は、ゆっくりと閉じた花弁を開き始めていた。花弁の奥はピンクの光が満ち、その炎のような光に包まれて、一つの影が浮かびあがった。

「オオッ」

驚く部下の目の前で、開ききった花弁の上にすっくと立ったのは——。

戦士の姿の陽子だ！

すかさずカエル兵士がジャンプして襲いかかる！

「アン！」

ピョンと飛んでカマをよけると、カエル兵士を飛び箱代わりに、陽子は大地へ飛び降りた。

「陽子、どうしたんじゃ、その格好は」

驚くリンガム。

「わからない!急に目がくらんで、息がつまって……体の中で何かがはじけたわ。それで……」

陽子はちょっと照れてるみたいだ。だが、そんなヒマな場合じゃない。花の上から、カエル兵士が陽子めがけてジャンプした。

「ハッ」

陽子は跳んだ！すごいジャンプ力だ。兵士のカマは地面に突きささる。

着地した陽子を追って、カエル兵士が迫って来た——。

"急に目がくらんで、息がつまって、……体の中で何かがはじけたわ！"

第一撃をかわすと，兵士と面と向かう。ヤル気？

地面に降りたった陽子！後ずさる兵士！

「どうしたんじゃ，そのかっこう」

「わからない，急に目がくらんで……」

花の上からカエル兵士が飛びかかった。

振りむきざま，ジャーンプ！

腰の貝のようなものに、陽子の手が伸びた。つかみ、かまえる。「だけど……とにかく、すごく強くなったみたい」陽子がそう言うと、貝の口が開き、青い光がほとばしった。剣だ！

襲って来たカエル兵士の攻撃を馬跳びでかわす。

恥じらってる時じゃないんだけど……。

カエル兵士が突っ込む。陽子も走る。
「くっ」
すれちがいざま、横なぐりに一閃する

……//

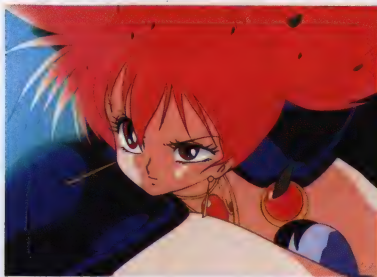
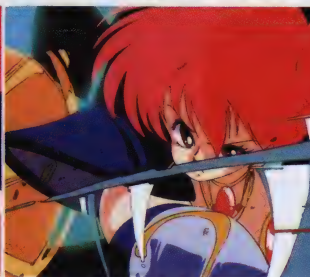
陽子の剣！カエル兵士の体はまっ二つに切られ、バラバラに崩れた。
残る一人は、後ずさりながら、リンガムをたてにとろうとした。だが、宙をとんで、陽子の剣がたたきこまれた！
「エーイッ」
胴を払う陽子！カエル兵士はやはりバラバラに飛び散って行く。リンガムが陽子の方へ飛んで来た。
「リンガム！」
「陽子、おぬし、いったい何者なんじゃ!?」
「何者って……フツーの女子高校生のはずなんだけど……」
陽子はちょっと戸惑い気味だ。
「ふーん、ジョシコウコウセイというのは、大したものなんじゃなアー」
リンガムは腕組みをして感心している。デカイのと太った男、二人の部下は、陽子の戦いぶりを目のあたりにすると、泡をくって逃げ出した。騎馬の足をたたみ、エア・バイクにすると、すごい勢いで飛んでいく。だが……。

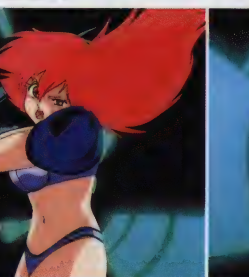
陽子が腰の貝状のものを握ると，口が割れ，閃光が走って，剣になった！

横なぐりに力を入れて，

思い切り剣を後ろに引くと，

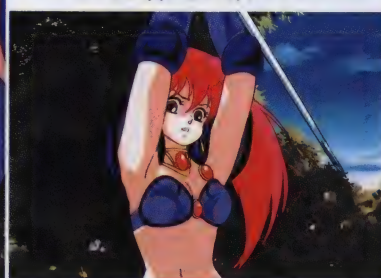
陽子も剣を構えると走る。

グェッ，グェッ，カエル兵士が突進！

決まった！

叩き斬る！

エーイッ！

すれちがいざま，

勢いをつけて，

リンガムを人質にとる気？

カエル兵士はバラバラ。中味はカラね。

とび上ると，今度は上から，

そんなの許さない！

「リンガム！」もう優しい笑顔──。

カエル兵士と一緒にリンガムも吹っとぶ。

ケサがけッ！アッという間の早技！

〝だけど、とにかく、すごく強くなったみたい

「ハッ」

ポッドは残っていた。正面から対峙する陽子とポッド。剣を上段に構え、隙をうかがう。スラリと伸びた陽子の体。

回り込みながら、斜めに切り落とす！ ポッドは首から二つに割れた。だが、首はそのまま宙に浮いていたと思うと、噴射煙を発して中天高く上っていった。爆発！閃光！青い空に光の球が浮かんだ。

「アアッ」

見上げる陽子、リンガム。

この光を見た者が陽子たちの他に二人いた。一人は、マントを着た小柄な少女――。杖を持ち、高台にいた。

「あ、あれは……!?」

そしてもう一人は……。

「ゼル様……捜索隊からの救援信号があり、ただちに救援機をさしむけましたが」

ゼルの側近である。例のゼルの部屋だ。

「レダのハートは……」

「そちらの方は、無事手に入れたようなのですが、ノアの人間を追跡中に、不可解な事が起ったようです」

「不可解な事？」

「そのノアの人間が、戦士の姿に変身し、強烈なレダパワーを発したそうです」

「なんだと!?」

側近の言葉にゼルは立ち上った。

「まさか……レダの戦士!?」

ヤベェ！逃げ出すウォーリア。

「フツーの女子高校生の筈なんだけど」

「おぬし何者じゃ」リンガム得意の質問。

閃光を中天高く発してポッドは爆発した。

首を切られて，ポッドは空へとぶ。

アレ，ポッドが残ってる？来なさい！

あの光は……。何か怪しい。

相手が相手だけど，時代劇の決闘ムード。

そしてもう一人は……当然，ゼル！

一人は，はじけ豆娘，ヨニ。

その光を見つけたのは……。

人生観、変わっちゃいそう！"

走りながら，リンガムがレダについて説明した。

陽子とリンガムは、盗まれたヘッドフォン・ステレオを追って、エア・バイクをとばしていた。

「レダ？……なにそれ？」

「うむ。ヤツら、あの機械の事を、レダのハートと言っておったじゃろ。おぬしのその力、ジョシコウコウセイ独自のものでないとすると、〝レダ〟がからんでるとしか思えんのじゃ」

「どういう事？」

「ウム、順を追って話そう」

砂煙をたて、猛然と走るバイク。

森の木々が次々と飛びすぎていく。

「……つまり、あたしのいた世界も、大昔にはこの世界につながっていて、自由に行き来できたっていうわけなのね」

「そうじゃ。争いが絶えぬこの世界に絶望して、〝女神・レダ〟が、おぬし達の世界を封印してしまったのじゃ。その世界に希望を託してな」

「……レダ」

森が切れ、バイクは荒野に飛び出した。

「〝レダ〟って……？」

「伝説では女神となっているが、その正体は今となっては誰にも判らん。ただ確かな事は、次元の間に横たわる膨大なエネルギーを自由に操れたという事だな……。たとえば、おぬしのパワーとその変身……〝レダ〟であれば、その位の事、いたって簡単な事であろう」

「あたしと、そのレダさんと、何か関係あるのかしら」

「わしは、あると睨んでおる。というのは、レダの秘密を知りたがっている者は大勢いるからのォ。あんたをこの世界に引き込んだのも、そういう輩ではないかと思っとる」

バイクの行手にはノアのしんきろうが浮かんでいる。その下をバイクはまっしぐらに進む。

「ふーん……。でも、どうしてあたしが…」

「その答は、やつ等の持ち去った、あんたの機械……あの中にあるはずじゃ」

「レダって？」陽子がきく。

「そんな大げさなもんじゃないんだけど……」

「しかし、アレ以外には、今の処、帰り道を捜す手がかりはないわけじゃからなァ」

崩れかかった神殿の前を過ぎる。

「そうね……。でも、こんな格好でバイク飛ばしてるなんて……人生観、変わっちゃいそう」

「フム……。変身前とはだいぶちがうのかな」

「そりゃもう……体中に力がみなぎってるカンジ！」

「そりゃ頼もしいのォ！」

陽子がのびをした時だ。前方に砂煙が見えた。ハッ。表情がひきしまる。あの部下たちだ。カプセルに入ったテープデッキに日の光がきらめく。

「追いついたわ…」

「ようし、とっつかまえてあの機械をとり返すんじゃ」

ハンドルを握る手に力が入る。スピード・アップ！バイクの推進機が光の球を発し、噴射する！

急激なエネルギーの変動に、陽子は束の間、バランスを失った。バイクはとびはね、右に左に、蛇行する。だが、それもほんの少しの間だけ、操縦のカンをつかむと、陽子は一直線に兵士達に向けて突っ込んでいった。

荒野から、岩山へ入る。谷間で激しいチェイスが展開する。逃げる三台のバイク。追う陽子。

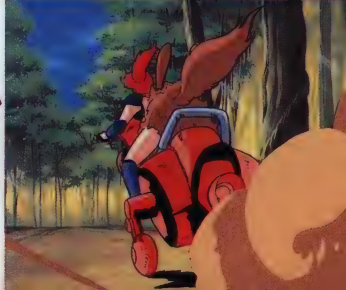
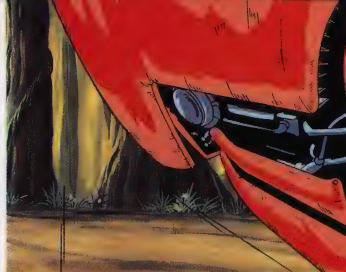
「逃がすもんですか」

一台が崖の横腹から陽子の後に回り込んだ。ハッとなる陽子に、機銃の乱射が襲って来た。陽子はバイクの脚を出してよける。後へジャンプする。すれ違いざま、バイクの脚で、後のカエル兵士をけっとばす。カエル兵士のバイクは爆発した。

更に追跡は続く。洞窟の中へ入った。急カーブで、一気に加速する。敵はもう目の前だ！

テープを追って，GO！

「人生観，変わっちゃいそう！」

追跡

"こんなかっこうで、バイクとばしてるなんて……

このジャジャ馬！どっちが!?

アッタタ，パワーがありすぎる。

見つけた！

「力がみなぎってる感じ」カイカーン！

ビートきかせて，追跡，又，追跡！

ドッギューン！スロットル全開!!

レダのハートは目前。

カエル兵士が逆襲してきた！

機銃の雨をかいくぐって，

「逃がすもんですか！」

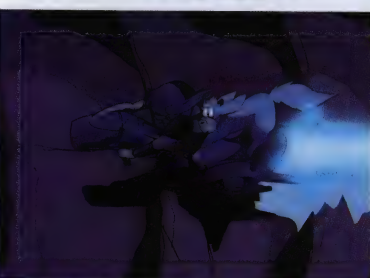
逃げるウォーリア

追う陽子！

ボカーン！カエル兵士は爆発した。

ジャーンプ！

脚を出すと，はずみをつけて…

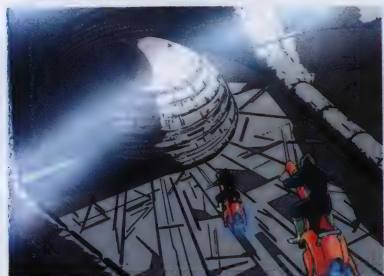
行くわよっ！

急カーブで加速をつけるハイテクニック。

洞くつの中に入った。

残るは２台。

光！出口だ。

「それを返して！」もう強気なこと。

リンガム！しっかりつかまって！羨しい。

ウォーリア達はその中へ逃げこんだ。

この怪飛行物体は……敵の迎撃機。

何これ？何で空飛んでるの？

引力なんかキライダーッ。

落ちるーっ!!

迎撃機からポッドがバラまかれた。

ぶっとばせ！

根性！逆噴射！

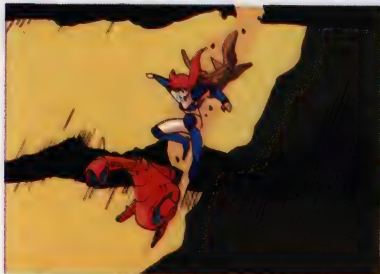
かっこうなんて気にしてられないわヨ。

ぶっちぎってやる！

"やった！味方のようじゃぞ"

もう、うっとうしいわね,

巨人

追いついた!!
「それを返して！あなた達には、用がないはずよ」
「そうじゃ！おまえら、いったい何者なんじゃ」
リンガムも口を出す。
前方に光が見えた。出口だ。
トンネルを抜けた！目が光にくらむ。目の下に拡がる無数の池、池、池!!
高度一万メートルの断崖から、陽子たちは飛びだしたのだ。落ちる！
「アアッ」
なんとか態勢を保とうと陽子はふんばった。その目の前に現われた、ピラミッドのような飛行物体。黒メガネ達は、その中へ逃げこんでいく。
「アアーッ」

ちょっとバイクさん，見捨てないで。

こんなのインチキ！向こうも崖なんて。

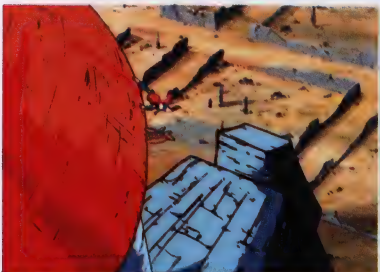
メじゃないわ，急上昇！

崖？

屋根にとびついてホット一息。

アン，落ちてばっかり。

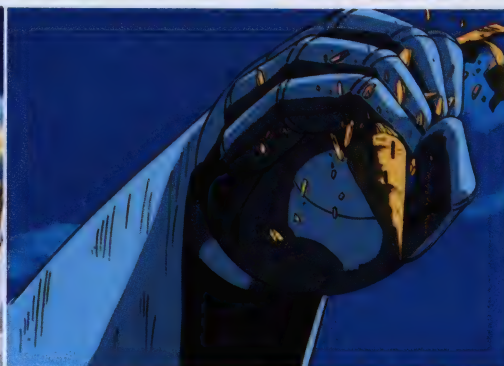
スーパーマンなら飛べるんだけど

もう走った方が速いわ！

振りおとされる〰〰。

巨人ロボットが戦い始めたのだった。

やだ！何で屋根が動くの？

カワイソウなバイクさん，ごくろうさま。

そこは何かの神殿の廃墟だった。

巨人はポッドを握りつぶす。

肩に降りて何とか命拾い。

ついに手が離れて…

必死にしがみついてみたけれど，

ダメーッ，そんなに激しく動かないで。

陽子のバイクは大地めがけて、まっさかさまだ。力を入れて、バイクを上に向ける。逆噴射!!噴射したまま、水面へ落ちる。噴射の反動で水が幕になって飛び散る。そのまま走り出す。成功だ。

飛行物体は、無数のポッドを吐き出した。陽子に襲いかかるポッドの群。蛇行してかわす陽子。崖！加速して一気に突き進む！飛び出す！

崖の向こうはまた崖だった。

「うわーっ」

勢い余って、陽子はバイクから、ふり落とされた。そのまま走り出す。崖の一部が平らになっている。ジャンプ！

陽子は空中に飛んだ。リンガムが必死に陽子を捕まえている。

目の前に赤いトンガリ屋根!?とびつく！バイクは崖から、廃墟へ落ち爆発した。だが、一息つく間はなかった。屋根が動きだしたのだ。いや、屋根だと思ったのは巨大なロボットの頭だったのだ。

ふり落とされまいと、陽子は、屋根の縁にしがみついたが、ロボットの動きは激しい。陽子は屋根から肩へ飛び降りた。そして陽子が見ていると…。

ロボットはポッド相手に戦いを始めた！ポッドをわしづかみにすると握りつぶした。

「やった！味方のようじゃぞ」

リンガムは歓声をあげた。

ロボットは次々とポッドを倒していく。しかし、その度に陽子とリンガムはふりまわされるのだ。「うわーっ」「うわーっ」たまったもんじゃない。

「アーハアー!!」

キャーッ！

浮遊城

とうとう、陽子はふりおとされた。リンガムが助けに入る。陽子をうけとめ、飛ぼうとしたが、力が足らない。そのまま一緒に落ちていく。衝突する!?

そこは、何かの神殿の廃墟らしかった。陽子はリンガムのおかげで、何とか無事だった。

ポッドの母船が指令を発したのか、ポッドは、引き上げて行った。その後を追って口ボットも歩き出した。

「わしらも行こう」

「ええ!」

廃墟の壁から飛びおりると陽子とリンガムは走り出した。口ボットを途中で追いぬくと、崖を登る。口ボットも登って来た。そして、崖の上に立った陽子とリンガムが見たものは――

「ああっ!?」

「ウムッ!?」

母船よりも何倍も大きい卵型の見張り塔を無数に従えた、さらに巨大な浮遊城だった。母船はその中に消えて行った。

大空に傲然と浮かぶ巨大な城。その側には、まるで獲物のように、ノアのしんきろうがまたたいていた。

「何……アレ!?」

「う、浮いとる」

陽子とリンガムがあっ気にとられていると、登ってきた口ボットの股の所が口を開け、はしごが降りて来た。

軟着陸。

それでもなんとか…

ナイス，キャッチ？ウム重いのう。

ポッドが引き上げていく。

何が起こったのかしら。

迎撃機が何か指令のような声をたてた。

巨人を軽く追いぬいて走る。

「わしらも行こう」「ええ」

巨人もじっと敵の動きを見守る。

陽子たちも崖を登る。

崖の向こうへ消えて行く敵機。

リンガムもただボー然とするだけ。

あまりのことに言葉も出ない。

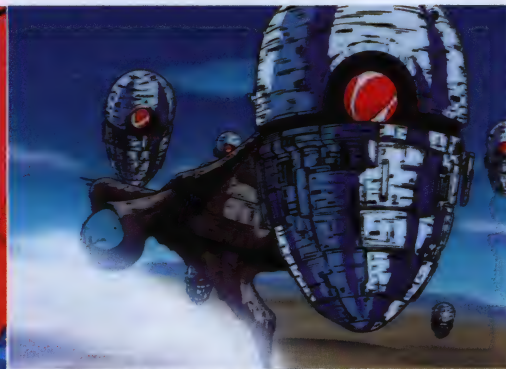
そして陽子とリンガムが見たものは……。

アシャンティの空にその巨大な物体は，悠然と浮かんでいた。その横にははるか異次元のノアのしんきろう！

〝何、アレ!?〟〝う、浮いとる……!?〟

浮かぶ城の中へ入る。その巨大さ!!

巨人のはしごを伝って降りて来たのは…。

この大きさはもう感動ものよ。

迎撃機は見張りの塔の合い間をぬって…。

「何…アレ？」「う…浮いとる」

失礼ね！人のこと見回すなんて。

ジロジロジロ。フムフムフム。

フーン、このチビさんが動かしてたの？

「アーア、逃がしちゃったか」

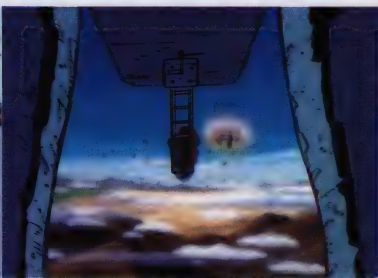
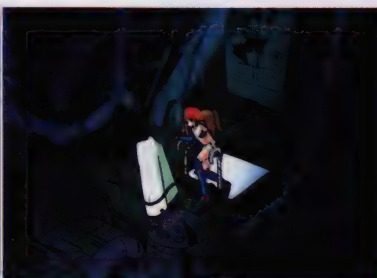
ハッ。浮かぶ城が吠えている。

「わっ!!」

「あたしは、レダの巫女でヨニってんだ」

「レダの…戦士……？」何か知ってるの？

「これがレダの戦士かァ」え？

ゼルは自信たっぷり。「放っておけ」。

浮遊城の城主ゼルこそすべての張本人だ。

これが巨人の内部。

立ち話もなんだからって、はしご登り？

降りてきたのは、あの光を見ていた女の子だった。陽子とリンガムが見ていると、その少女はため息をついて、一人言をいった。

「あーあ、逃がしちゃったか」

と、陽子に気がついたのか、ふりむくと、つかつかと近寄って来た。

「フム、フム、フムフムフム……」

品定めでもするような目つきで陽子のまわりを一回りすると、突然、

「ワッ」

と大声で驚かした。そして、

「これが、レダの戦士か!?」

「レダの…戦士……？」

陽子が問いたげに口に出した時、浮遊城が低くうなった。

リンガムが後を引きとって尋ねた。

「娘さん……何か知っとるなら教えてくれんか。わしは、しがないさすらい犬で、この娘は封印された国から来たばっかりでな……。何が起っているのか、よく判らんのじゃ」

陽子も口添えする。

「お願いします。あたし、朝霧陽子」

「わし、リンガム」

少女は、ちょっと鼻をこすると、ニッコリ笑って答えた。

「お安い御用よ。あたしは、レダの巫女で、ヨニってんだ」

「レダの巫女……!? まだそんなのがおったのか……」

びっくりするリンガムを、さえぎって、

ヨニは、二人をロボットの中に誘った。

「とにかく、立話もなんだから、乗って！」

ヨニ、リンガム、陽子の順で、はしごを登る。いやリンガムは飛んでいるのだが……。リンガムが、質問を続けた。

「ヨニ、まず聞きたいんじゃが……あの大きなタマゴみたいのは何じゃ」

三人はロボットの中に入った。

「ゼルの浮遊城〝ガルバ〟」

「浮遊城!?……アレ、お城なの」

「あの城の城主、総統ゼルが、あなたをこの世界に引き込んだのよ」

「ゼル……？」

その名前は陽子にあの青年を思い起こさせた。

そのゼルは、浮遊城の中で側近の報告を聞いていた。

「ゼル様……捜索隊が戻ってまいりました」

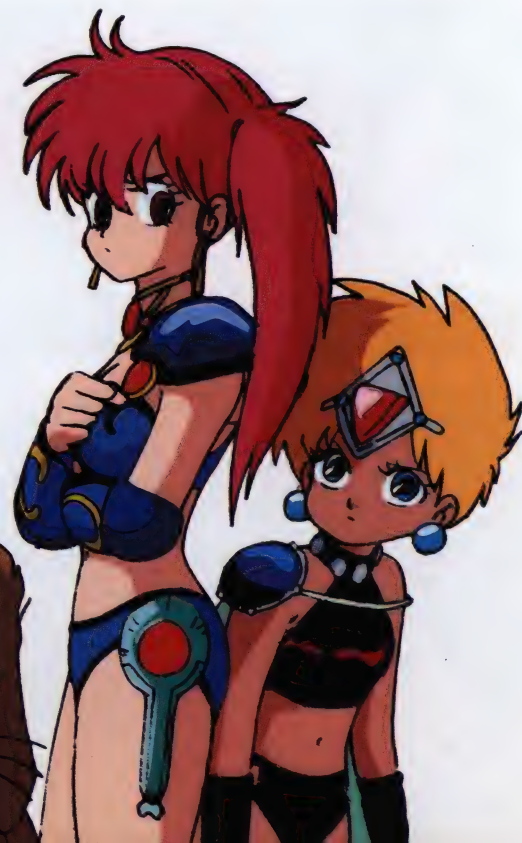
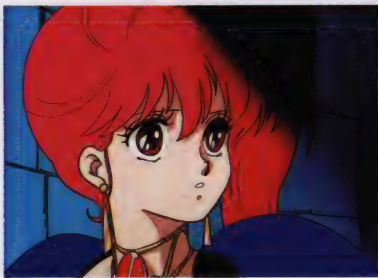
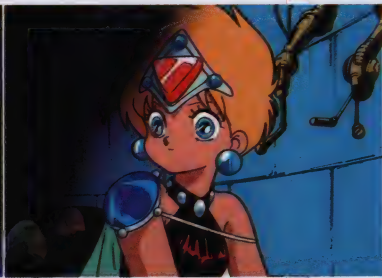
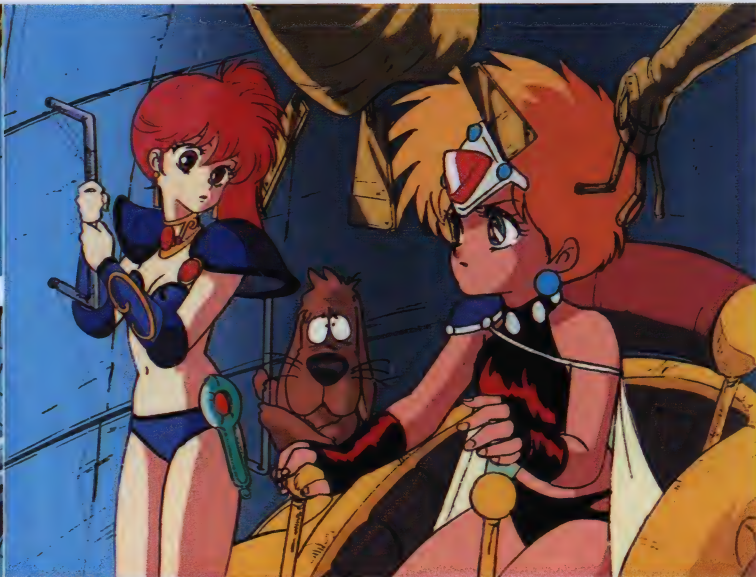
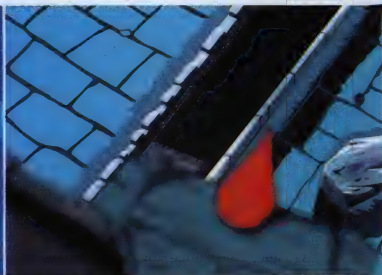
「レダのハートは？」

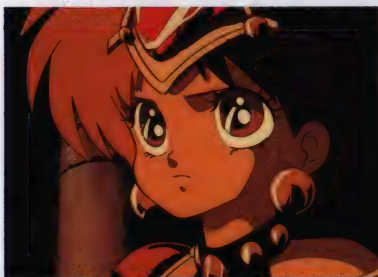
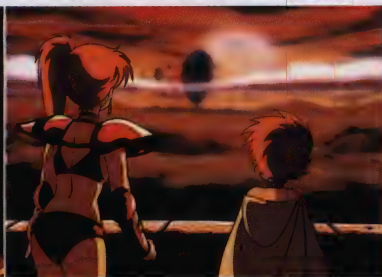
「すでに、分析作業に入らせました」

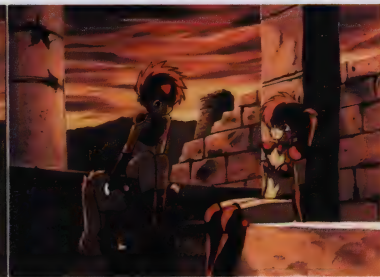
「ノアから来た娘はどうした」

「とり逃がしました」

「とり逃がした……」

「思わぬジャマが入りまして。おそらくレダ教徒の生き残りかと。いかがい

"今、世界の運命は、レダのパワーと共に、あなたの中にあるのよ！"

そんなこと言われたって，困るじゃない。

「世界の運命はあなたの中にあるのよ」

巨人はその台に登り，格納されていく。

柱を押すと池が割れて地下神殿が見える。

へ!?あたしが伝説の英雄するって訳？

「ゼルはノアを征服しようとしてるの！」

古代の遺跡，浮遊城を利用して……

「ゼルもレダ教徒の一人だったんだけど」

夕焼けの光の中，ヨニは身の上を語った。

ゼルはノアへの鍵を手に入れたのだ！

レダのハートの分析は終わった。

レダのハート？アレ，何かヤバそう。

「レダのハートがない限り大丈夫！」

たします」

「放っておけ。奴らには何もできん。我々には、もう恐れるものはない！」

ゼルは、自信たっぷり、ほくそ笑んだ。

ヨニのロボットは廃墟に戻っていった。

「ねえ、あたしがレダの戦士って、どういう事……」

陽子には、まだ何が起きたのか、よくのみこめていなかった。

ロボットを操縦しながらヨニは、ますますピンとこないことを言った。

「伝説は云う。レダの力、悪しき行いに利用しようとする時、異世界・ノアより戦士が現れ、それをはばまん」

「それが、あたしだっていうの」

「そう、今、世界の運命は、レダのパワーと共に、あなたの中にあるのよ」

「アア？」

ロボットは石造りの池の前に来ると、側に立っている柱を押し下げた。すると、池が二つに割かれ、地下の空洞が姿を現わした。ロボットが空洞の中の台に乗ると、台はエレベーターのように下がり、池は再び閉じた。秘密の格納庫である。

黄昏の光が、廃墟を黄色く染めていた。陽子とリンガムに神殿を案内しながら、ヨニは語り続けた。

「ここは昔、レダの神殿だったの……レダが伝説の彼方に消えさって、今はこの有様……。

でも、地下には昔のままの仕かけや部屋が残ってるわ。私の乗ってた巨人もその一つ。

でも、その事を知ってるのは、レダ教徒の中でも数少ない、レダの巫女達だけ。ゼルみたいに、レダの力を自分の欲望のために使おうとする人達から守るためにね」

「レダ教徒って？」

陽子がきいた。

「失なわれたレダの力を、もう一度この世界によみがえらせようとしてる人達なの」

ヨニの顔に暗い影が浮かんだ。

「ゼルもその一人だったんだけど…」

「えっ」

声を合わせて驚く陽子とリンガム。

三人は塔の上に出た。はるかに浮遊城が浮かんでいる。

「あの浮遊城は、レダパワーを集めるための古代の遺跡だったの。レダ教徒達が、復活しようとしてたんだけど…ゼル達が裏切ってのっとってしまったの。仲間達は、みんな殺されたり、散りぢりになって、この神殿に逃げ込んだ時には、あたし一人だけになってた……」

「まア……」同情する陽子。

「ゼルはいったい何をしようとしておるんじゃ」

リンガムが聞いた。

「……ノアのしんきろうが見えるでしよ……。アレは、浮遊城のパワーが、次元のゆがみを起こしているためなの」

「なんじゃと!?」

ヨニの目が厳しくなった。

「ゼルは、次元の扉をこじあけようとしてるのよ。ノアに行き、その世界を征服するためにね」

「そんな事になったら大変！ 私達の世界の人、別の世界があるなんて知らないもの。大パニックよ」

不安にかられた陽子をなぐさめるように、ヨニは軽く微笑んでつけ加えた。

「今のところは大丈夫。かなりの処までいってるみたいだけど、レダのハートがない限り、次元を超える事はできないわ」

「レダのハート……？」

まさか、あれが…。リンガムと陽子は顔を見合わせた。

「ん？」

ヨニが、二人に目をやった。

ゼルに奪われた陽子のヘッドフォン・ステレオ――ゼルは今や、その分析を終えていた。

「この磁性体の中に記憶された音声パターンが、大気中のレダのパワーと共鳴するようです」

分析機の中のデッキを前に側近が説明していた。

「やっぱり、音声パターンがレダの力を引き出す鍵か。気づかぬ訳だ」

ゼルはついにレダのハートを手に入れたのだ。

「コントロールの方法は？」

「この音声パターンと感応する力を持つものなら可能でしょう」

「ようし、私が、やろう。早速、準備をしろ！私のこの手で、伝説を書き換えてやる」

ゼルは、野望実現に着手した！

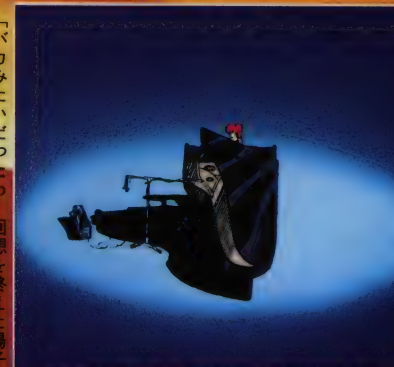
レダの巫女

※
帰りたい　帰れない
もう一度　あなたの腕の中
夢かしら　夢じゃない
ひとりぼっちの　ドリーマー

星くずが　流れてく
夜空　見上げるふりして
涙を　止めたいのよ
Blue Blue こんな夜

「だってあのテープは…」テープの事はつらい思い出……。

この次に　会うまでに
少しは　大人になる
だから　見てて遠くで
Blue Blue Lonely Blue
※Repeat

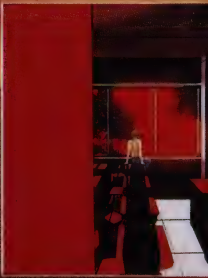
「バカみたいだったわ」回想を終えた陽子の心は暗く落ちこんでいた。もう帰れない日々なのだが……。

その頃、ヨニも、陽子から一部始終を聞いていた。
「たいへんだよ、ゼルが奪っていったその機械って、きっとレダのハートと関係あるんだわ」
三人は柱の立つ、遺跡の上に来ていた。
「そうか、そうよね。陽子は次元をこえて来たんだもの、不思議はないわね」
「じゃあ、アレがないと、やっぱりあたし、自分の世界へは戻れないのね……」
失望しかかる陽子に、ヨニは口調激しくたたみかけた。
「それどころか、ゼルがレダのハートを使いこなせたら、戻る世界そのものがなくなっちゃうわよ」
「そんな……そんな事って……。アレはただのヘッドフォン・ステレオだし。それに……それに……あれに入ってるテープだって……」
続く言葉は言えなかった。陽子は、目を伏せると力なく柱にもたれかかった。
「テープ？」
リンガムは聞きのがさなかった。
「……陽子、おぬしのあの機械……ホントはいったい何なのじゃ」
それは、今となっては遠い思い出…。
夕焼けに赤く染まった教室で、扉の影から、黙って、少年を見つめた夏の日。サッカーのボールを追う少年の汗のまぶしさ……。
雪の道、ふと通りかかった少年を追い続けたまなざし……。
想いのすべてをこめて、作った、あの曲……。
「なんか、バカみたいだったわ……一人でいい気になってて……。それがイヤで、思いきって告白しちゃえって思ったの……でも……」

「戻る世界がなくなるの！」ヨニは必死。

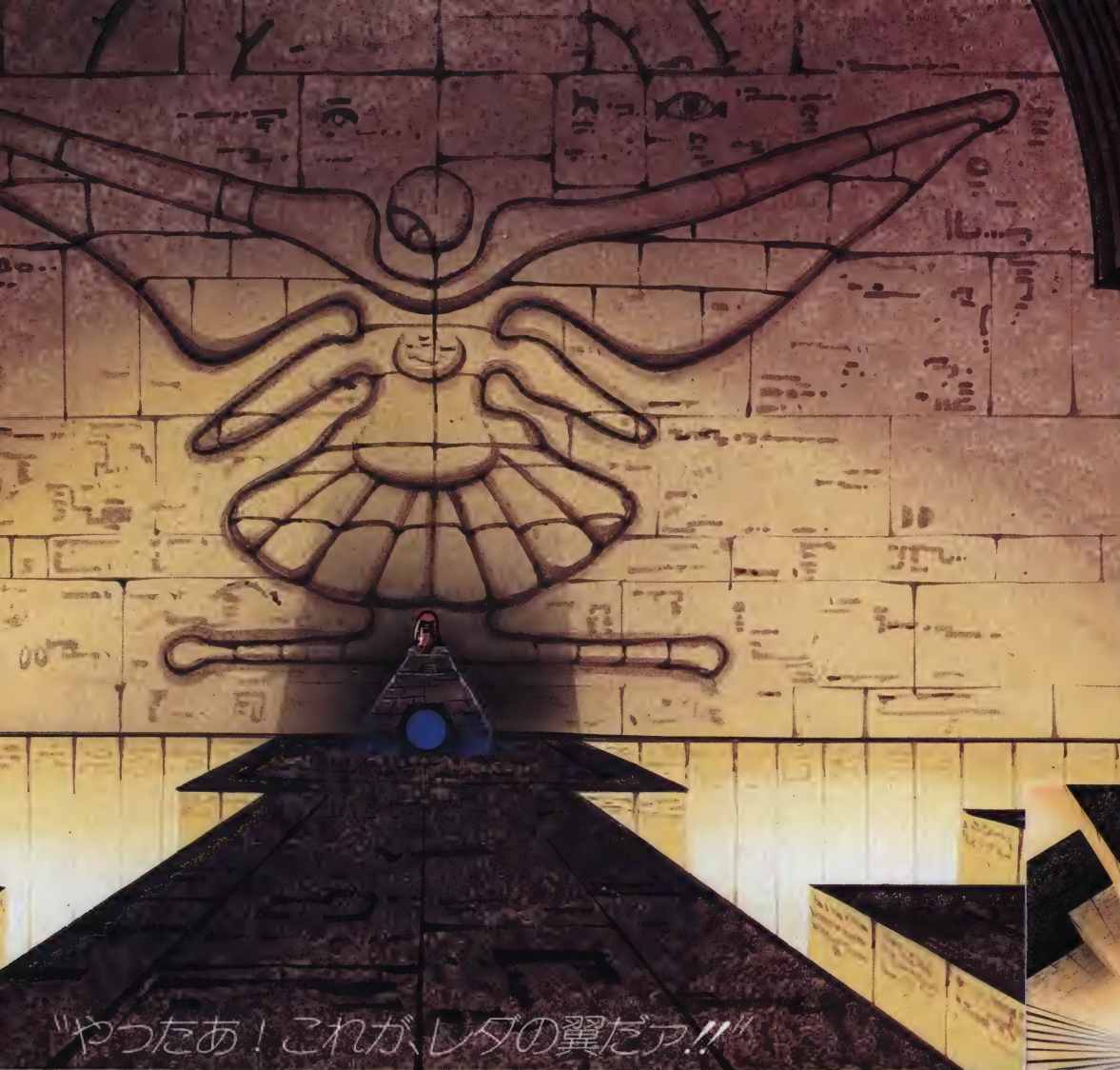
「じゃ帰れないの？」まだわかってない。

「たいへん！」陽子の話にヨニは驚いた。

一人ぼっちのドリーマー

帰り道　わからない
まるで　迷子の仔猫よ
景色は　ためいき色
Blue Blue にじんでく
誰よりも　好きなのに
素直じゃないの　私
かなり　後悔してる
Blue Blue Lonely Blue

語り終わった陽子にリンガムが言った。
「で、そのキッカケになったのが、あのキカイの中に入ってるオンガク…」
「うん、そう。だから、アレがレダのハートだなんて、なんかのまちがいよ」
「しかし、おぬし、現実にレダの戦士になっておるし……」
「それも何かのまちがいじゃない……。まァ、そのおかげで、ここまで追っかけてこれたんだけど……」
だが、ヨニはかぶりを振った。
「まちがいじゃない！　レダのハートって、音の組み合わせなの。だから誰にも見つけられなかったの」
「ええっ!?……じゃあ、あたしのつくった曲が、偶然……」
「偶然じゃないわ。レダはきっと、ノアに助けを求めて、レダのハートを送ったのよ。そして、陽子の心にレダのハートがとどいて、その曲ができたのよ」
「じゃあ、ゼルは……」
「その曲をキャッチして、陽子をこっちの世界にひきこんだのね」
「そして、その陽子がゼルをたおす、レダの戦士になったというわけか。いやしかし、ひとつ間違えば、ゼルのおもうつぼではないか。現にそうなりつつある」
「レダの力は、絶対じゃないわ。もしそうなら、ゼルみたいな奴がのさばってるはずないもん。」
ヨニは憤って、手に力をこめた。
「よーし、こうなったらぐずぐずしてらんない。ついて来て！」
ヨニは思いついたことがあるらしい。急ぎ足で遺跡をかけ降りていった。陽子とリンガムも後に続く。

「ついてきて！」ヨニは駆け出した。

ゼルみたいな奴がのさばるなんて！ヨニは首を横にふった。「音の組合せなの！」

巨人の足元にのびる通路。その奥に……
巨大な地下神殿の中、レダの翼の間がある。

地底深く落ち込んでいる床。

"やったあ！これが、レダの翼だァ!!"

巨人ロボットの格納庫、その足元に、奥深く続く地下通路が口を開けていた。

その通路の果てには、巨大な翼の紋が浮き彫りにされた壁があった。わずかな台座の周りを除き、壁のまわりの床は、底知れぬ地底深く、落ちこんでおり、ただ一本の通路だけが、台座へと通じていた。ヨニ、陽子、リンガムは、今、その通路を台座へと向かっていた。

「ここは……？」

不安気にきく陽子にヨニが重々しく答える。

「レダの翼の間」

「翼の間……？」

「そう。レダの戦士に力をあたえてくれるはずよ。しかも、レダの戦士だけに許された力をね」

壁からは二本の支柱が伸び、台座の上はコックピットのような椅子がついていた。尻込みする陽子を、ヨニはせきたてて言った。

「さア、このイスに座って」

「どうするの？」

「座るだけでいいの。さ、早く」

ヨニに押されて、陽子は台座に向かった。ヨニが思わず哀願する。

「云う通りにして。お願い」

「ええ……」

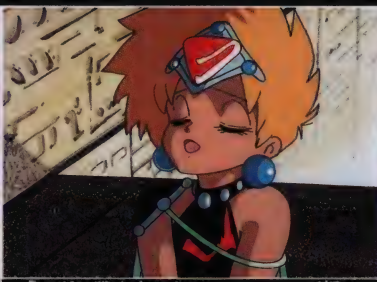
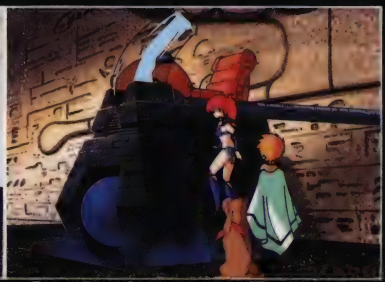
陽子は一歩一歩台座の階段を登る。

「何か固そう」

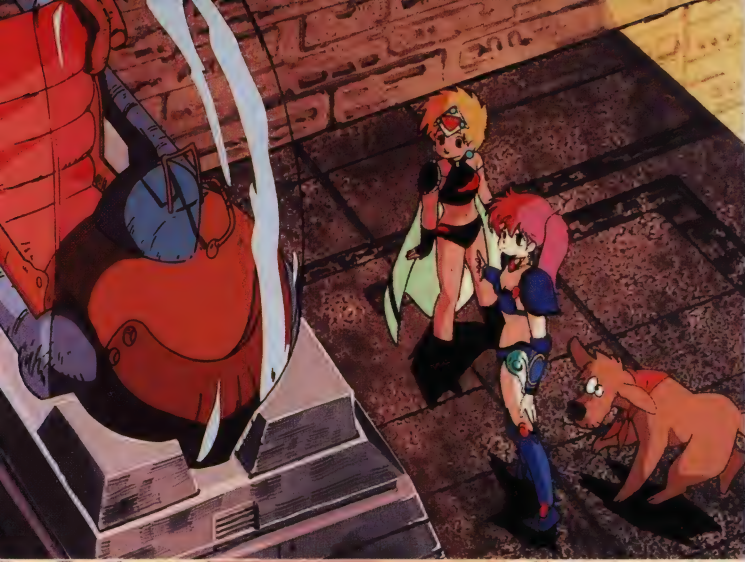
そんな陽子にかまわず、ヨニは目を閉じると、古い詩のような言葉を唱えた。

「レダの戦士来たりて、ここに座す時、力の門は開かれ、レダの翼は天空へは

轟然たる響と共に壁が開き始め……

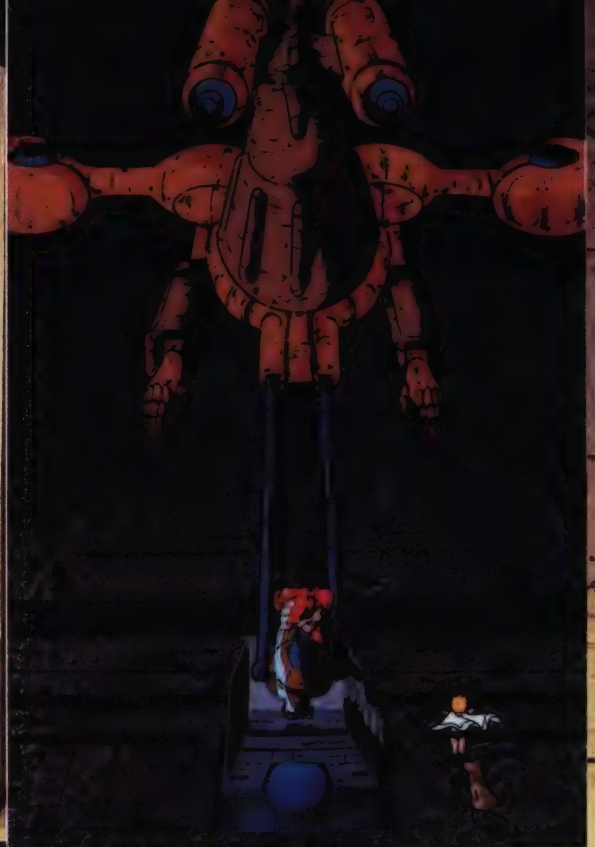
その奥には巨大な飛行機に似たものが——。

「レダの戦士来たりて……」ヨニが祈る。

「さあ早く乗って」ヨニが陽子をせく。

フン！こうなりゃ気合で決めるわさ。

よっこらしょ。いい気持ちじゃないわね。

この椅子は何？不安がる陽子。

「お願い！」ヨニの瞳がせつなくゆれる。

「何か固そう」陽子はオズオズ座る。

これが、レダの翼⁉

ついに全貌を現したレダの翼。とび上って喜ぶヨニ。

レダの翼

ばたく……」

「レダの翼？」とリンガム。

「いいつたえ……。でも、ホントいうと、ワタシも意味は知らないの」

ヨニの唱えたのは、レダの伝説の一節だったのだ。その謎が今、解ける！

ポンと手を合わせると、ヨニは期待に目を輝かせた。

「だから陽子、早く、座って！どういうことか、きっとわかるわ…」

「え…ええ」

オズオズと、陽子は、椅子に腰をおろした。ウン！ヨニが気合いを入れる。

と、重い音が響き、巨大な壁がゆっくりと左右に開き始めた。台座の下の支えが引っこんだ。ふり向いた陽子の目に、壁の中の、巨大な飛行機が映った。

「やったァ！これがレダの翼だァ！」

とびはねて歓ぶヨニ！

だが、それだけでは終わらなかった。

不思議な力に誘われるように陽子の手が、コックピットの操縦桿へと伸びた。両手が操縦桿を握りしめた瞬間、中央の丸い部分が光を放ち、陽子はコックピットごと、上へ持ち上げられた。

「アッ⁉」

陽子の手は，操縦桿へと誘われていく。

何かに引かれるように振り返ると……

何かが変わり出した──。

操縦桿を握ると赤い光が回転を始め……

"あたし、レダのハートを取りもどす！そして、必ず、自分の世界へ帰るわ！"

レダの翼は変身を始めていた。巨大な翼は立ちあがり両足となり、陽子を乗せたコックピットを胸に、エンジンを背中にしょったその雄姿は、力強い戦士形の巨大ロボット！

「レダの翼、はばたく時！　レダのヨロイ、力の門をくぐり、戦士を守るべし！　レダのヨロイだァ！」

伝説の一節を口にするヨニの声は感激にふるえている。とびはねるヨニ。やがて、ロボットは再び変形し、レダの翼の姿に戻った。

「感激!!　カンゲキだわ！　いいつたえが、こうやって目の前でホントになるなんて！」

手を打ち合わせ、全身で喜ぶヨニに、コックピットから降りながら、陽子は静かに、告げた。

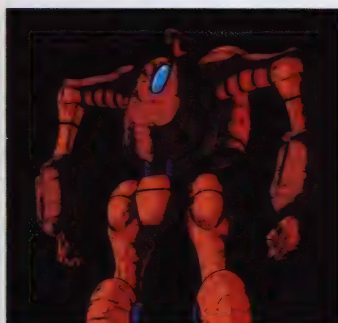
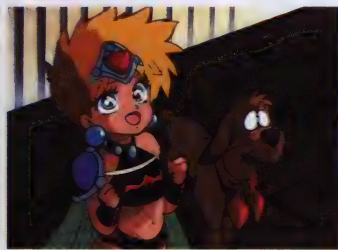
「ヨニ……レダがどうしてあたしを選んだのか判らないけど……あたし、レダのハートを取りもどす。そして、必ず自分の世界へ帰るわ」

今，伝説は現実のものとなったのだ。

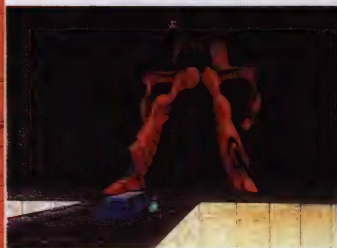
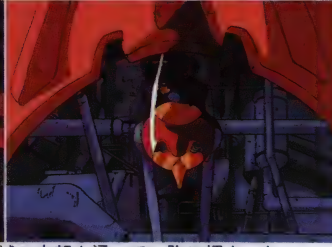
そして陽子の心も何かが変わっていた。

感激するヨニに，陽子が語りかける。

「レダがどうしてあたしを選んだかわからないけど……

あたし，レダのハートを取りもどす！」
陽子はリンとして言い切った。

巨大ロボット！

「レダのよろいだーっ!!」

よろいは再び翼の姿に戻っていく。

陽子を乗せたままコックピットが上昇を始めた。

翼が脚となって機体が直立する。

コックピットは更に上昇し，機械の内部を通って，胸に押まった。

二機のエンジンを背中にしょった姿は──。

襲撃

同じ頃、浮遊城では、ゼルがレダ・エネルギーをコントロールしようと、苦闘していた。

赤い光に照らされたエネルギー変換システムの中で、陽子の曲が流れる。そのメロディーは、チューブをいくつも通り脳のような、心臓のような、鼓動するメカを通して、測り知れぬエネルギーを生み出すはずだった。

「レダハート変換エネルギー、注入開始……。次元移動エネルギー、発動」

作業員の声がする。

ノアのしんきろうを青い光が包んでは放射する。その源はゼル。ゼルは溝の上に浮く球の中で、思念を集中させていた。

「レダのハートよ……美しき鼓動よ…わたしを、ノアの世界に連れていってくれ……」

だが、衝撃がゼルを貫いた。

「ウッ」

球の周りを青い光が乱れ飛ぶ。驚く側近。

「レダ・エネルギー、コントロール不能！」

エネルギー炉に火花が走り、作業員の声が危険を告げる。

「ダメだっ」

絶望的にうめくゼル。

ついにゼルはあきらめて、球の中から床に降りたった。

「ゼル様」

「ダメだ……。想いが……ノアへの想いが足りないのか……」

「ゼル様、やはり人間の力では、次元を越える事はできないのでは……」

「けエィッ」

側近の言葉はゼルの怒りをかきたてた。ゼルににらまれ、側近はビクついた。

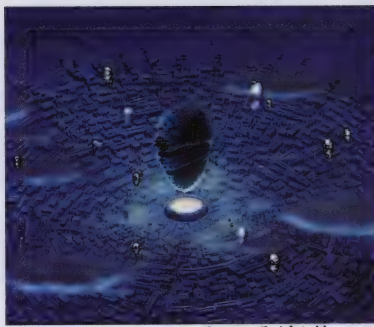
「…ゼル様のお力を疑うわけではありません。ただ、ノアから来た娘の事が気になりまして…」

「レダの戦士か……」

ゼルは不敵な笑みをもらした。側近は訴え続けた。もう涙声だ。

「ハイ、もし我々が、伝説のあやまちをくり返しているとしたら、世界の終り……。ゼル様、今一度お考えを……」

「どうした。おじけづいたか」

ゼルのターバンの赤い飾り玉に、側近の姿が映った。次の瞬間、ゼルと側近は、空中高く、浮かんでいた。

そのころゼルは……。

「見るがいい、レダに見すてられたアシャンティの大地を。老いさらばえ、活力を失い、かつての栄光は、見るかげもない」

はるか、目の下に広がる荒野─。

ゼルは続けた。

「今さら何を恐れる。我々のなすべき事は一ツ、美しいノアの世界をこの手におさめるのだ！それがわからぬというのなら、アシャンティの大地と共に朽ち果てるがよい！」

飾り玉が赤く光った。

「ウワーッ」

側近は悲鳴をあげて落ちていく。

「アアッ」

気がつくと、そこは元の溝の間。ゼルの見せた幻だった。力がぬける側近。

「次元移動のエネルギーを操れる者がいる」

ゼルが思いついたように言った。

「ハ？」

「レダの戦士ならそれができるはずだ。ノアの娘をあぶり出せ。どうせあの神殿あたりだろう」

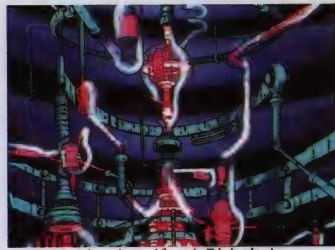
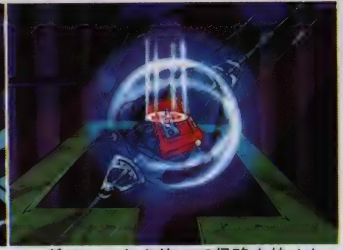
「は……はい」

「本当にレダの戦士かどうか、確かめるのだ」

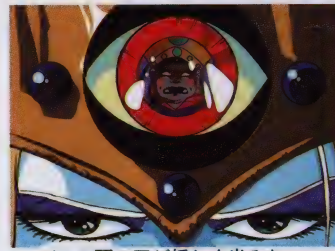
夜の遺跡に二筋の怪しい光が走った。偵察ポッドだ。ポッドは池に近づいた。何かを感知したのか、ミサイルを発射した。底が破れ、池の水が巨大ロボットに降り注いだ。異変に気づいて、陽子、ヨニ、リンガムが駆けつけてきた。

「どうしたの？」と陽子。

「ゼルよ！見つかったんだわ！」

ポッドは照明弾をうちあげた。闇を切り裂く閃光。照らし出された遺跡に向かって、二機、三機と急降下して来る戦闘ポッド。ゼルの襲撃だ！

メカがエネルギーを引き出す。

レダのハートを使って侵略を始めた。

「ダメダーッ！」

その源は，ゼル。だが──。

ゼルの頭の玉が妖しく光ると，

不安がる側近に，怒りの矢が向く。

「くちはてるがいい！」怒るゼル。

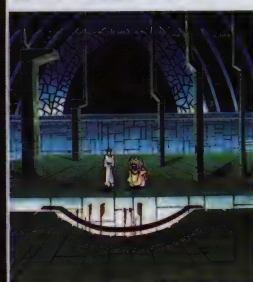
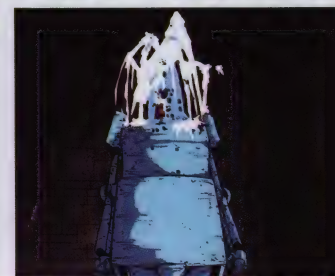
二人は大地を見下す高空にいた！

レダの戦士か……。悪だくみにゼルはほくそ笑む。

落下する側近。それは……

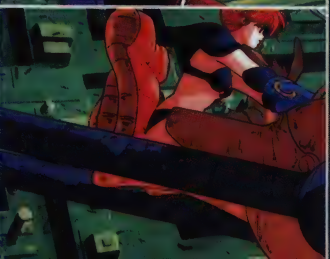
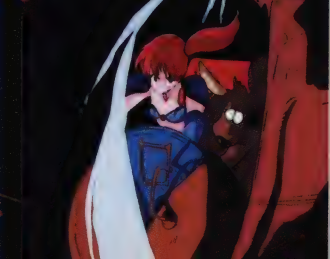
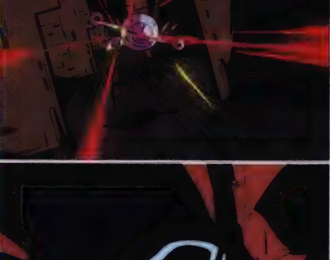
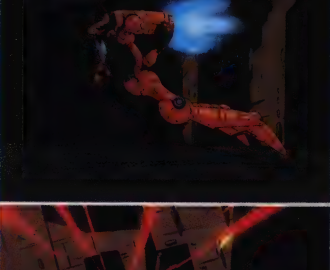
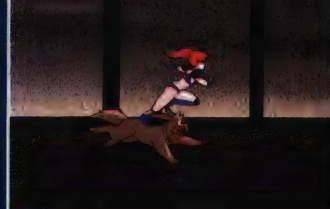
ゼルが見せた幻だった。

ポッドの光が夜空に輝き渡り，

戦闘ポッドが襲って来た！

「ゼルよ！」あわてて走ってくるヨニ，陽子，リンガム。

池にミサイルを射つ。落ちる水！

夜の廃墟に偵察ポッドが飛来した。

"ノアの娘をあぶりだせ！レダの戦士かどうか確めるのだ！"

戦闘

"巨人がやられるぞ" "やってみる！"

陽子とリンガムはレダの翼の間へと走った。

ヨニは巨人ロボットに乗り込むと、大急ぎで発進準備をする。格納庫の天井が開き、力いっぱいレバーを引くと、巨人はジャンプ！外へ飛び出した。その拍子に、一機のポッドと激突、ポッドは地下神殿に墜落して爆発した。

戦闘ポッドは巨人ロボットに襲いかかった。まわりを飛びまわっては、機銃を射ち込む。巨人ロボットはポッドを握りつぶす！

三機のポッドが地下へ侵入した。

陽子はレダの翼に乗り込むと操縦桿を握った。走る光！ついに伝説から醒めたレダの翼が飛びたつ時が来た。地下通路を猛スピードで飛ぶレダの翼！ポッドが来た。陽子はレダの鎧に変身させた。機銃を射ちながら迫るポッドを次々と叩き落とすレダの鎧！強い。

鎧は夜空に飛び出すと、再び翼の姿に戻った。

遺跡では巨人ロボットが戦っている。

「あそこじゃ！　ヨニのやつ、苦戦してるようじゃぞ」

「ようし！」

陽子は機首を巨人の方へ向けた。機銃を射って敵ポッドを追い払う。凄まじいスピードで空を駆けるレダの翼！

ポッドは巨人目がけて、ミサイルを発射した。二発が命中。

「ウワァーッ」

ヨニがのけぞった。巨人の胸の装甲が破れた。だが巨人はなおも戦い続ける。しつように襲いかかる敵。歯車が露出した。リンガムが叫んだ。

「巨人がやられるぞ！陽子、なんとかせい！」

「やってみる！」

ポッドに向かうレダの翼！一機撃墜した。だが、巨人はついにガクツとひざをついた。バラバラとこぼれ落ちる、歯車、滑車！

「いかんぞこりゃ！」

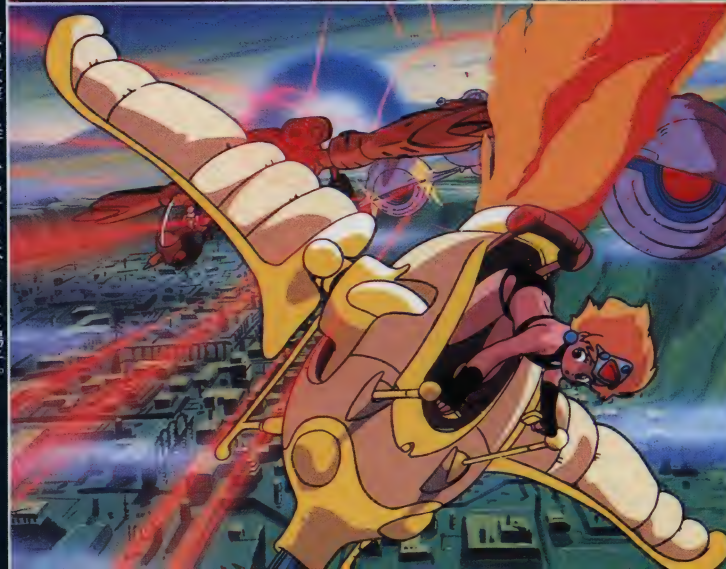
「むこうが多すぎる！」

断末魔のように口をあけ、巨人は倒れこみ始めた。炎と煙に包まれ、崩れゆく巨人の口から、小型の飛行艇が飛び出した。ヨニだ。倒れる巨人の仇をうつように、ヨニは飛び出しざま、敵のポッドを二機、撃ち落とした。

「ヨニ！　そういう仕かけになってたの……あたし、もうどうしようかと思っちゃった……」

陽子が弾んだ声で呼びかけた。

「心配御無用！　うまいことできてんだから……」

レダの翼と並んで飛ぶヨニの声は元気いっぱい。後から襲って来た残る三機の敵も、陽子が機銃で片づけた。遺跡に墜落した敵機は、次々と爆発、炎上した。

巨人を発進させようと急ぐヨニ。ウ〜ン背中のラインが……。

クラーッシュ！レダのよろいは強い。パンチ一発で敵ポッドは粉々。

「いかんぞ、こりゃ」「向こうが多すぎる！」

敵の攻撃！軽くかわすヨニ、そして陽子。

急降下！だが、

敵のミサイルが……

巨人に命中！火だるま！

キャッ！ヨニもとばされそうだ。

「やられる！何とかせいっ」「やってみる！」

機銃を射つレダの翼。

だが小回りがきかない。

ついに巨人は膝をついた。

断末魔にあえぐ巨人ロボット！その口から何か飛びだした。

ヨニだ！小型飛行艇を操っている。

敵を一機やっつけて翼と並走する。その背後から襲う敵。シツコイ！陽子が敵に向かった。射つ！射つ！射つ！射つ!! 敵機は全滅した――。だが……。

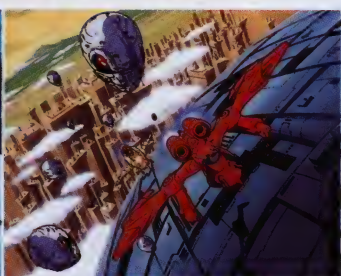
しかし、これはゼルの計略だった。
「まちがいありません、レダの翼です。やはり、あの娘、レダの戦士だったようです」
側近が報告する。
「よし！　出むかえの準備だ」
「はっ……しかし、レダの戦士を利用するといっても……どのようにして」
「盗むのだ……レダの戦士の心をな…」
ゼルの頭の飾り玉が妖しく光った。
そうとも知らず、陽子とヨニはそれぞれの機を駆って、浮遊城を目指していた。塔の並ぶ廃墟を低空飛行で行く。頭上にはあの見張り塔。
「ん？……攻撃してこんぞ……」
「レダの翼を見て、おじけづいたんじゃない」
不審がるリンガムに、ヨニは自信満々だ。前方正面に、浮遊城の巨大な姿があった。急上昇すると、見張り塔をかすめ、陽子とヨニはまっすぐ浮遊城へ飛んだ。
不気味に沈黙を守る浮遊城。二機はその最上部の割れ目から、内部へ飛込んだ。次々と眼前に展開する中空都市の光景。
「ヨニ。あそこ、入口じゃないかしら」
「らしいわね。行ってみましょう」
「ええ」
空洞の中を二機は降りて行った。レダの翼は鎧に変身する。
空洞の底は円形の広場で、何本もの通路が伸びていた。
着地しても迎え撃つ者は誰もいない。浮遊城は沈黙を守っていた。
「簡単にいきすぎて、かえって不気味じゃなア……」
「エエ……」
リンガムも、陽子も警戒を解かない。一台の小さなロボットが広場をやって来て、二機の前で止まると、こう告げた。
「ようこそ、ガルバ城へ。お待ち申しておりました、食事の用意も整っています。さ、こちらへどうぞ」
意外な言葉に陽子は面くらった。
「どうする、ヨニ……？」
「罠かもしれないわよ！」
「それでも、あてもなくウロついてるよりは、ましなのではないか。いざとなれば、こっちにはレダのヨロイもある事だし」
すっかり案内する気で行きかけたその小ロボットも催促した。
「どうしました？　御料理が冷えてしまいます」
とうとうヨニが決心した。

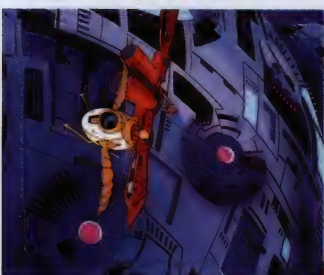
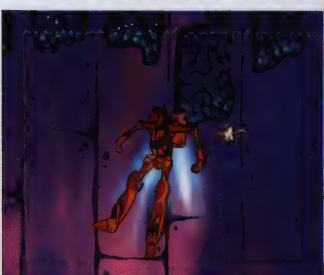
「やはりレダの戦士だったようで」側近の報告にゼルは何を企む。

「おじけづいたんじゃない？」

「攻撃してこんぞ」

陽子とヨニは浮遊城へ飛ぶ。

割れ目から内部へ侵入。

浮遊城の壁をかすめて飛ぶ！

それならと，上昇して正面から。

「入口かしら？」「らしいわね」

不気味な光の格子の中を奥へ！

レダの鎧に変身して降下する。

さすがにヨニも緊張気味だ。

通路から中空の内部都市へ入った。

それでも敵は現われてこない。

ゼルの罠

「ようし、行ってみつか……でも、陽子、油断しちゃダメよ」
「わかってる！」
出迎えロボットの後に続いて、陽子たちは中へ入って行った。
扉が開くと、そこは紫色の高い柱に囲まれた大広間。その中央には、テーブルが一つ。
「ゼル様。お客様をお連れしました」
豪華な食事を用意して、ゼルが待っていた。
「ようこそ……レダの戦士」
陽子はコックピットから床に飛び降りた。リンガムもヨニもその側に立った。
「あなたが……ゼル」
ついに陽子はゼルと対峙した。
「光栄だね……私の名を知っていていただけたとは……」
にらむ陽子に、ゼルは
「フッフフフ」
と含み笑いをすると甘い声で語りかけながら近づいて来た。
「そんなに、コワイ顔はやめてほしいな……。これでもずい分手加減はしたつもりだよ。判らなかった」
陽子は一歩後ずさった。ゼルは陽子の肩に手をかけると、唇を寄せて来た。ささやくようなゼルの声——

内部への通路を陽子は飛ぶ。

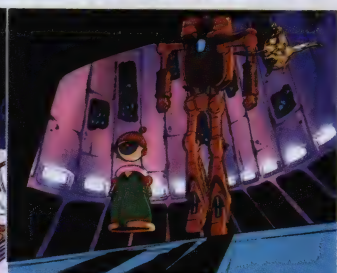
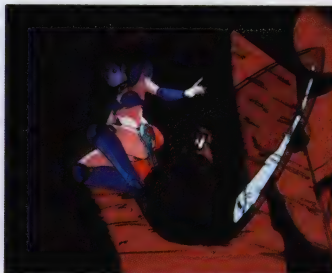
「それとも……、もっとやさしくして欲しかったの？ こんな風に」
陽子はゼルの手をふりほどくと、そのほほを一発、引っぱたいた。そしてゼルを見すえて言い放った。
「ゼルさん。あたしのテープ……いえ、レダのハートを返して下さい」
動揺を隠しながら、ゼルの口調は変わらず穏やかだった。
「そうだったね……あれは、あなたのモノだったね。もちろんお返しするよ」
だが、ヨニは信じない。ゼルの後姿にきつい言葉を投げつけた。
「フンッ！ 調子のいい事いったってダメよ。あんたのたくらみはみーんな判ってんだから」
「ウソではない！レダのハートはここにある」
ふりむいたゼルの手には、陽子のヘッドフォン・ステレオがあった。
ハッとして、思わず駆け出す陽子。
「あっ陽子！」
止めようとしたヨニは、見えない壁にぶつかってはじきとばされた。
「何じゃ！空気の壁？」
ゼルの罠だ！
「やること、せこいよ！」
起き上がって突進するヨニ。だが見えないバリアーはヨニを通さない。
「陽子!!陽子!!」
ヨニがバリアーをいくら叩いても、光が走るだけで、ヨニの声は陽子に届かなかった。
「彼女には少し黙っていてもらおう」

ヨニが罠に！ゆるさない，ゼル！

“盗むのだ…レダの戦士の心をな……”

お迎えロボット？罠かもしれないわよ！

「簡単に行きすぎて，不気味じゃな」

着地！でもどの通路を行けばいいの？

レダの鎧から飛び降りて，すっくと立つ。

待っていたのはゼル！やっぱり！

チビ・ロボットの後についていくと…

な、何する気、近寄らないでよ！陽子は思わず逃げ腰。

テープ！一瞬、陽子は何もかも忘れて——。

ヨニは、見えない壁にはねとばされた！

キスなんて，ズーズーしすぎない!?

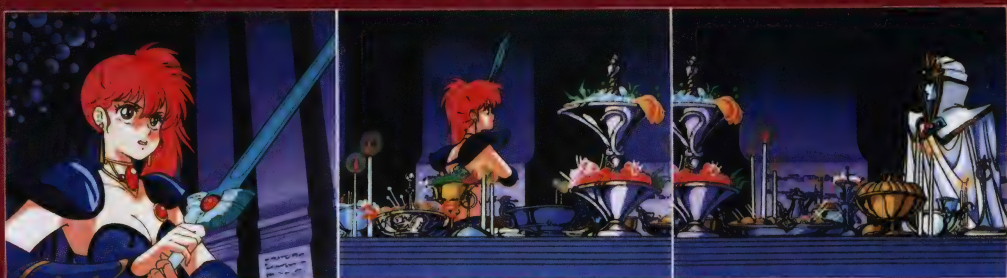
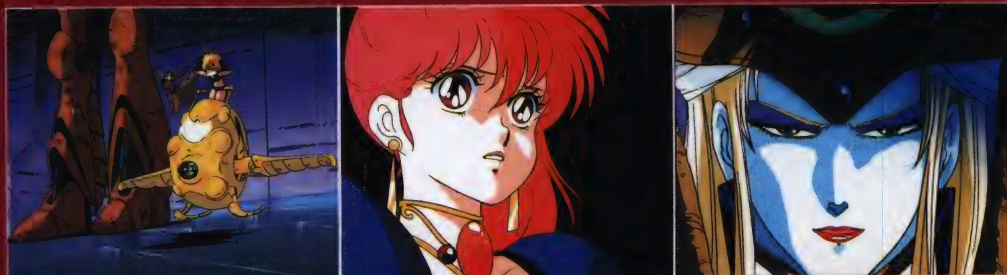
わっ，アップで迫って来た！ヤダッ!!

この男がゼル！にらむ陽子。

だがゼルは本当にテープを出して見せた！

「あんたのたくらみは判ってんだから」

ビンタ！「レダのハートを返して下さい」

"でも、今はちがう! あたし、あの世界でずうっと生きていきたいと思ってるわ!"

「ウソ!別の世界なんて知らなかった!」「呼びかけ?」ハッとする陽子。 「あなたは我々の呼びかけに答えたのだ」

ヨニが機銃を射っても歯がたたない。 ゼルの言葉に、一瞬、並木道の事が……。 「では,逃げだしたかったのかな」イヤミ!

「では一緒に行けばいい」メゲないゼル。

ゼルの玉の光に陽子は心を奪われた! 「でも、今は違う」陽子はきっぱり反論する。だが……

識を失って崩折れる陽子。

夢の虜囚

陽子はゼルの方に向き直ると剣を構えた。だが、ゼルは動じる様子もない。

「我々はレダのハートをさがしていた。だが、このアシャンティにはそんなものどこにもなかった、ところがある日、我々は異世界ノアからのレダの波動をキャッチした。次元の壁を越えたその波動こそ、レダのハートであるはずだった。我々は、それをアシャンティに引きこもうとした。そして、あなたは、我々の呼びかけに答えた」

「呼びかけ……!」

陽子の心にその言葉はひっかかるものがあった。

「そう、我々はあなたがこちらに来るのを助けただけ、あなたが、アシャンティに来たのは、あなたがそれを望んだからなのだ」

「ウソ!?……。あたし、別の世界があるなんて知らなかったわ」

「じゃあ、あなたは自分の世界から逃げだしたかったのではないかな」

ゼルは、陽子の傷口をえぐった。並木道の出来事が、陽子の脳裡に甦えり、思わず、陽子の目が伏せられていく。

ヨニはバリアーを突破しようと、飛行艇の機銃を射ち込んでいた。だが、バリアーはことごとく、銃弾をはね返す。

「だめ……全然歯がたたない……」

「陽子……」

リンガムも不安にかられた。

ゼルはかさにかかって陽子の心をさいなもうとした。

「どうしました。図星ですか。フフー

つまり、あなたは来るべくしてこちらに来たのですよ」

だが、陽子は、もはやあの時の陽子ではなかった。ぐいっと顔を上げ、ゼルを見すえると陽子はきっぱり言い切った。

「確かにあの時は、そんな気持だったわ。でも、今は違う。あたし、自分の世界に帰りたいし。あの世界でずうっと生きていきたいと思ってるわ」

ゼルは陽子に近づいて来た。

「それは、都合がいい、だったら、我々と一緒に行けばいい。もうすぐこの城は動き出す。ノアにむかってね」

「そんな事、させないわ!」

陽子は剣をかまえた。

ゼルもじっと陽子を見つめて言った。

「レダの戦士は……レダそのものではない……、その肉体は、私と変らぬ生身のもの……、愛し合う事だってできるはずだよ。愛し合う事だって……」

愛し合う……、愛し合う……。

ゼルの声が何重ものこだまとなって陽子に響いて来た。ゼルの頭の玉に映る陽子。その陽子の瞳に映るゼル。更にその映像の中の陽子。玉と瞳の無限の合わせ鏡!!

陽子の意識がはじけ飛んだ!

衝撃が何度も陽子の中を走りぬける!

陽子の心はゼルの手中に落ちてしまったのだろうか!?

"彼女は、この浮遊城のハートになったのだよ、ノアへの想いを秘めたな……"

「陽子に何をしたんだよ！」強気のヨニ。

衛士ロボットの大群に取り囲まれた。「陽子！陽子！」必死に叫ぶヨニ達は……

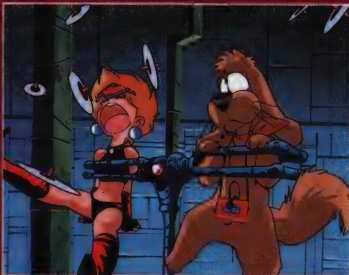
球の中に捕われた陽子は何を夢見る？

レダ・エネルギーが発動，しんきろうに光が走る！

「彼女にはレダのハートを操ってもらう」

ついに浮遊城は次元を超える旅に立つ！

陽子の想いは，今，ゼルの手によって，ノア侵略のエネルギーと化していた。

「彼女は浮遊城のハートになったのだよ！」

「陽子，起きて！」ヨニの絶叫も届かない。

「おまえ達には，死んでもらう」

何がとび出したの？これは，一体!?

剣が落ちた。陽子はガクッと膝を折ると、ゼルの足もとに倒れこんだ。

「陽子……どうしたの陽子ー」

叫ぶヨニの背後に衛士ロボットの足が迫った。振りむくとヨニとリンガムは何十台もの衛士ロボットに取り囲まれていた。

「他愛もない……フフフ」

気絶した陽子を見下ろしてゼルが勝利の笑いをもらした。その玉に映る陽子の心はどこに……？

浮遊城はいよいよノアへ向かって動き出そうとしていた。

あの溝のある広間にゼルと側近、そして金属の柱に縛りつけられて、ヨニとリンガムがいた。ヨニとリンガムの脇には見張りの衛士ロボ、そして、溝の上には、輝く球体が浮かんでいた——。

ヨニが自由な足をバタつかせて叫んだ。

「やい！ ゼル、いったいおまえ陽子に何をしたんだよ」

「まさか……殺したんじゃないだろうな……」

心配な面持ちのリンガム。

側近がニヤリと笑って答えた。

「我々は、レダのハートのエネルギーを使いこなせなかった。だから代りにレダの戦士に操ってもらおうというわけさ」

「なんじゃと……!?」

「ど……どういう事よ……？」

眠ったまま、胎児のような格好で、今、陽子はあの球の中に閉じこめられていた。レダのエネルギーをコントロールする球。

「次元移動エネルギー発動。レダパワー全開」

「次元座標軸、確認！ 誤差修正……」

浮遊城のすべてのメカが作動を始めていた。ノアのしんきろうに再び走る光。

ゼルが余裕たっぷりに言う。

「もうすぐ、次元の扉が開く。新世界への旅立ちの時がきたのだ。そうだ、約束通り、その機械は、お返ししておこう」

ロボットがテープデッキをリンガムの首にかけた。

「じゃあ、レダのハートは……？」

ヨニの問いに、ゼルは、ヨニをうちのめすような答を返した。

「レダのハートの音声パターンはすでに解読した。その音声パターンから生まれる次元移動エネルギーをレダの戦士を通して浮遊城に流し込んでいるのだ。彼女は、文字通り、この浮遊城のハートになったのだよ。ノアへの想いを秘めたな……」

球の中で眠りこむ陽子ー

浮遊城はついに動き出した。廃墟の街が、そのエネルギーにひきずられるように、崩れ、破片が舞い上る。

ゼルは高らかに宣言した。

「もう誰にも止められない。新しい伝説の誕生だ!!」

ヨニたちの足元に小さな穴が開き、そこからだ円の球がいくつも飛び出して来た。球はヨニとリンガムのまわりに8の字を描いて、飛びまわった。

「な……なにをする気じゃ！」

「おまえ達には、死んでもらう。いわば、ノアへの、いけにえというところだ」

ゼルの言葉と同時に、球から刃が出て回転を始めた。ヨニの顔を、リンガムを、二人をかすめて、飛びまわる刃。

ゼルは愉快そうに笑った。

「フフフ……すぐには殺さん。浮遊城が次元の道を越えるまでに、ゆっくりとな……」

ヨニが必死になってもがき、叫ぶ。

「陽子！ 起きて！ 目を覚ましてっ！ 陽子！ お願い」

「ムダだよ……彼女は今、夢の中だ。ノアへの想いをこめた、甘い夢の中だ……誰にもじゃまされず……幸福な夢にひたっているはずだ……」

ゼルの玉に映る眠りこんだ陽子の姿。

陽子は甘い夢にひたっている……が。

愛の幻

"あの曲はあったもの、本当にあったもの!!"

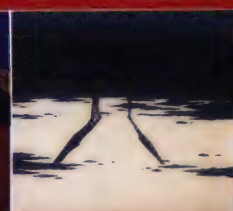
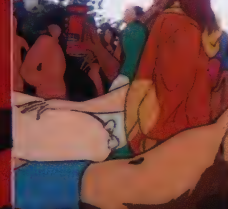
誰かが陽子を呼んでいた……。
「陽子……陽子……」
「えっ」
振り返った陽子に、少年がコーラを渡した。そこはプールサイド。
「はい、陽子」
「あ……ありがとう……」
「何、ぼんやりしてるんだよ……」
「ううん、別に……」
「ねエ、覚えてるかい、あの並木道を……」
サンチェアーに寝そべって、少年はなつかしむような声で話し始めた。
「あの時は、少しオドロイたけどね…君が急に話しかけてきて……」
一瞬の回想、それは本当かしら？
「でも、そのおかげでボクはこんなステキな恋人と巡り逢えたってわけさ」
「そう……そうだったわよね……もちろん、覚えてるわ……」
陽子は、何となく自信がなかった。一つだけ、思い出しかけたのは…。
「ねエ……あの時あたしの持っていたテープ、どこにいっちゃったのかしら……」
「え？　どのテープ……？」
「ホラ、わたしがヘッドフォン・ステレオで聞いていた……」
「ハハハ……何言ってるんだよ。あの時、君はそんなもの持ってなかったよ」
「そうだったかしら……」
少年に否定されると、その記憶も不確かなものに変わった。耳をすましても、聞こえるのはプールのざわめきばかり。
「だめだわ……想い出せない……人が多すぎるんだわ……」
陽子は目を閉じた。すると陽子と少年は、かもめが飛びかう海岸にいた。二人きりの砂浜に、パラソルが一つ。陽子は立ち上がった。長い髪を潮風になびかせる。
「海……海だわ」
陽子の心に疑問が芽生えた。
「おかしいよ、今日の陽子は……。君が、来たいって云ったんだよ」
少年の言葉を払いのけるように振向くと、陽子は、もう一度、少年に言った。
「ねエ、確かにあったわ！」
「何が？」
「テープよ、あの曲を入れたテープよ…」
「又、その話かい……でも、ボクは覚えてないよ」
「ウソ……あなたにも聞かせた事があるはずよ……ホラ、あのメロディー…」
「メロディー……!?」
陽子はその曲を知っている筈だった。だが……。
「想い出せない！」
少年が陽子の肩に手をかけてやさしく言った。
「陽子……。そんな事、どうでもいいじゃないか。今、ここにこうしてボク達はいるんだ……それ以上、君は何を望むんだい」
波が寄せて来ては砕け散る。
「愛してるよ…陽子……」
その言葉を聞いても、陽子の顔は曇ったままだ。海辺のホテルの一室で、二人きりでいるのに……何故？
窓からエイが入ってきて、二人のまわりを泳ぐように飛んだ。
「ねエ……あの曲」
「愛してるよ」
「あの曲は確かにあったわ」
「愛してるよ……」
「あなただって聞いたはずよ……」
「君が好きだ」
「想い出して……お願い!!」
陽子がいくら頼んでも少年は同じ事をくり返すばかりだ。
「愛してる……君が好きだ……愛してる……君が好きだ……」
陽子は、声を高めた！
「こんなのウソだわ！」
「ウソって何が……」
「あの曲は、あったもの！　本当にあったもの！　そうでなきゃ、あなたとあたしがここにこうしてるはずがないわ！」
陽子は次第に何かをつかみかけた。
「ウソよ！」
何かが違っているのだ！
「こんなのデタラメよ！」

あの少年、ここはプール。

少年のくれたコーラ。幸せ！

誰か呼んだ？遠い声にふりかえった陽子の目に映ったのは…。

「そうだったわよね」の筈。　少年の語る想い出。でも…。　でも、いつ出会ったの？

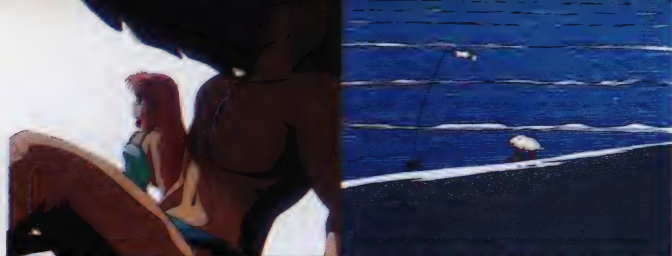
だめ…想い出せない…。

少年が笑って否定すると…

その記憶もあいまいになる。ハッ!テープ…があった。

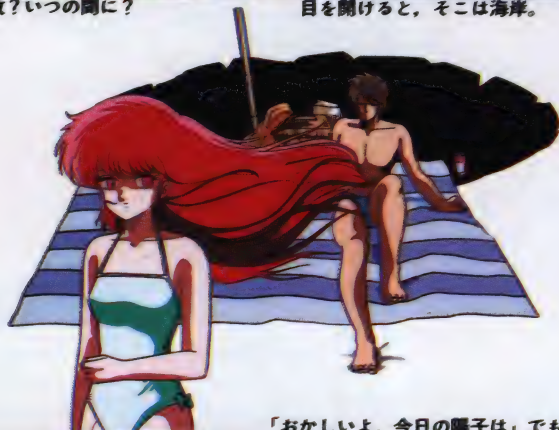
「ねェ……あの曲」

そこはエイが飛ぶシーサイドホテル

「あの曲は確かにあったわ!」

「想い出して…お願い!」

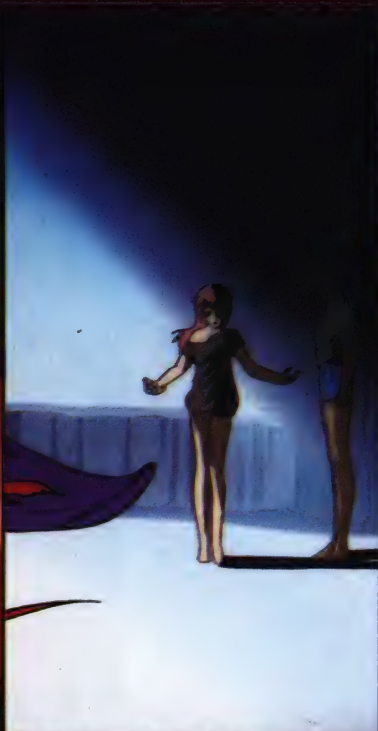
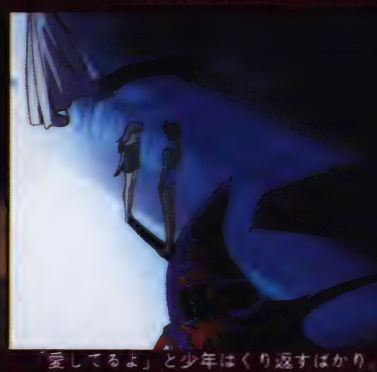
「愛してるよ、陽子」甘い愛の言葉も、陽子には、うつろに響く。何か… [illegible]

何故？いつの間に？

目を開けると，そこは海岸。

「おかしいよ，今日の陽子は」でも…。

「テープよ，あのメロディー！」

少年は陽子を現在だけにとどめようと誘う。

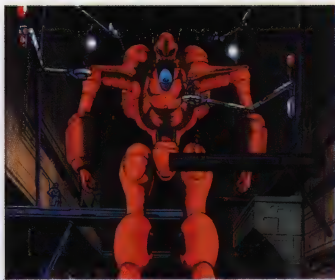
メロディーを忘れた！
愕然となる陽子

「ウソよ！」夢が破れ始める。

「こんなのウソだわ！」何かがはじけた。

「愛してるよ」と少年はくり返すばかり。

「こんなのデタラメよ！」

「でもまさか，こうしてるはずないわ！」

「あの日にあったもの」「本当にあったもの！」陽子は確信した！

“何故だ、何故、夢から逃げる——”

調べられていたレダの鎧は…

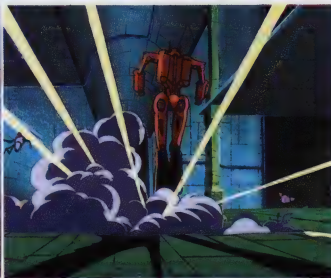
光が走ると，一人で動き始め，

「ウソ…ウソだわ」半ば眠りながら陽子は，苦しげに目覚め始めた。

「何ッ」その瞬間，ゼルはのけぞった。

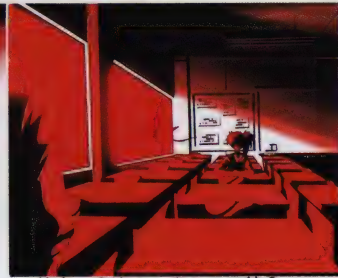
陽子の球から出た激しい光があたりを照らす。

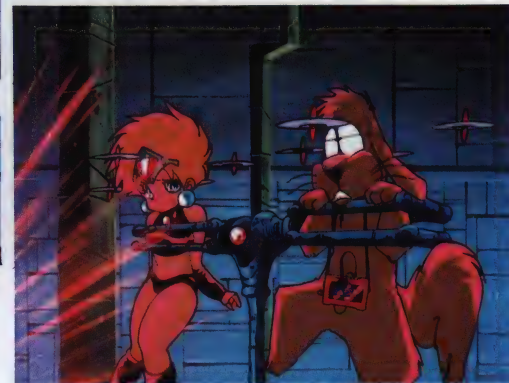
中心のエネルギー炉も危険な状態だ！

エネルギーが逆流を始め——

衛士ロボットを踏みつぶして歩き出した。

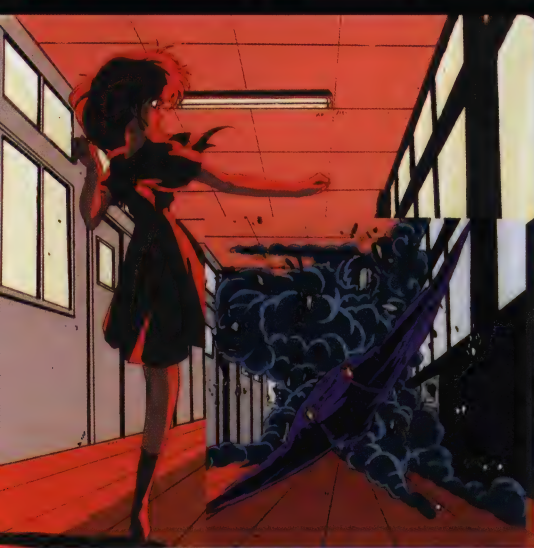
悪夢から醒めるように，陽子は苦しげに，夢の中で目を開けた。

激しく放電する陽子。

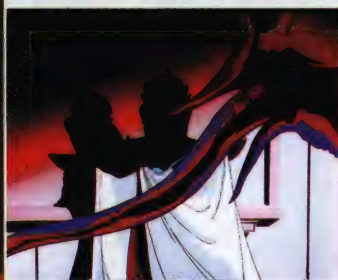
「おごるよ,欲しいものを言ってごらん」

教室…？迎えに来たのは彼？

ゼルは，再び陽子を夢の中へ…。

「起きて！」と叫んだヨニは，ゼルの一喝でシュンとなった。

ゼルの玉が激しく点滅した。
「なにッ!?」
のけぞるゼルに、陽子を包む球が放つ光が影を作る。
「ウソよ…、ウソだわ」
眠りながら、苦しげに陽子はつぶやき続けた。同時に、ノアのまわりにも閃光が走った。
「次元座標軸混乱！」
エネルギー炉も放電を始めた。
そして、ゼルの部下に調査されていたレダの鎧も——光が走ると、手の指が伸び、ゴンドラをはねとばすと、前進を始めた。足もとでつぶされる衛士ロボット。しんきろうの放電は更に激しくなった。
「レダ・エネルギー逆流！危険！」
エネルギー炉も制御できない。
陽子は目ざめかけていた。
「陽子！起きて！早く目を覚まして！」
「起きてくれーっ！」
ヨニとリンガムが叫ぶ。
「黙れ!!」
ゼルの一声で球が二人を脅すように一列になって回り始めた。黙りこむヨニとリンガム。ゼルは訳がわからぬ顔で放電する陽子を見つめた。
「何故だ…何故夢から逃げる……」
目を閉じ、再度、陽子に思念を送った。
そこは夕焼けに染まった教室。一人残っていた陽子を少年が迎えに来た。
「陽子……、迎えに来たよ。一緒に帰ろう。今日はクラブの練習はないんだ。君の好きなサ店にでも行こうよ……。君の好きな

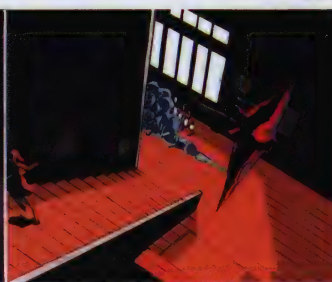
赤黒い光がおおう，そこは…。

どうしても？」脅迫的な少年の口調。

少年を見すえて，陽子はうなづく。

「あのメロディ，想い出して」欲しいものは――真実！「あの曲よ！」

エイが少年をかすめると，現れたのは‥。

同時に黒板を突き破って巨大なエイが

「ゼル!?」

屋上のドアから外へ脱出！光だ！
その時――！

逃げる陽子！追うエイ！

陽子目がけて襲って来た！

夢との戦い

モノをおごるよ」

「そう」

陽子の返事は素気ない。陽子の背後で、エイがゆるやかに舞っている。

少年はやさしく言った、

「…欲しいものを言ってごらん」

「じゃあ、あのメロディを想い出して」

「何を云ってるんだ……」

「あたしが、あなたに声をかけた時、持っていたテープよ……あの曲よ！」

「どうしても……？」

少年の口調が変わった。

陽子も厳しい表情でうなづいた。

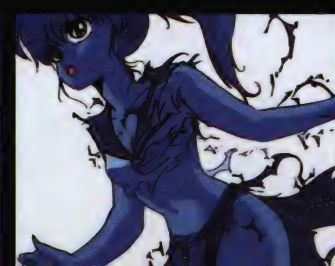
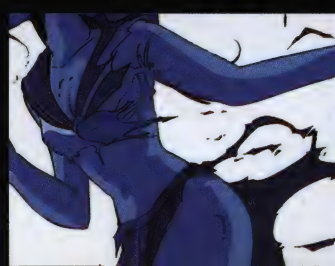
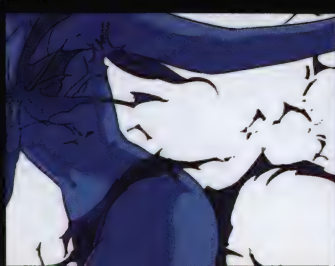
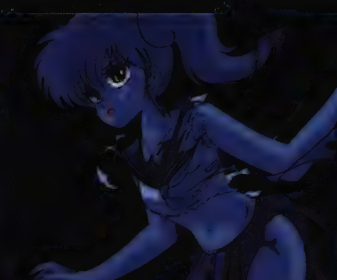
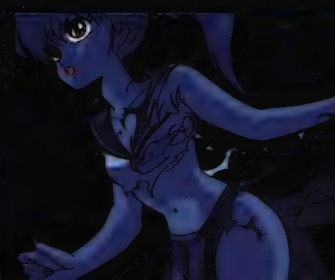
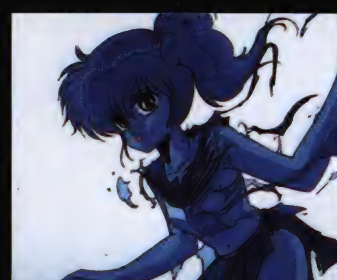
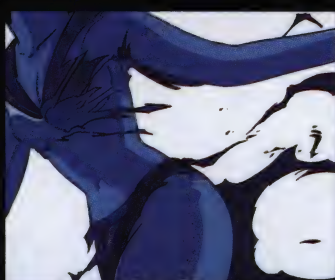
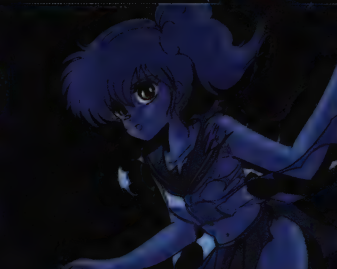
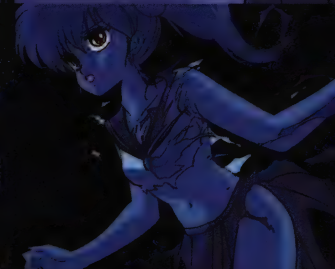
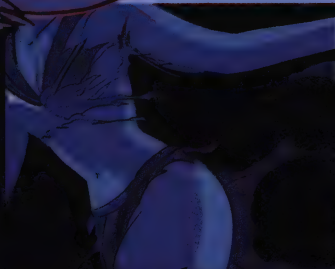
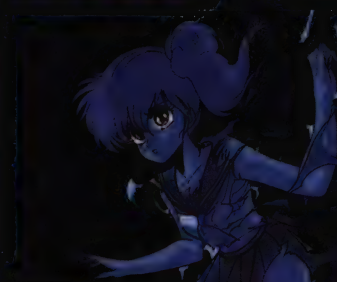
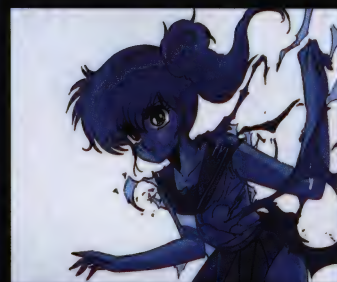
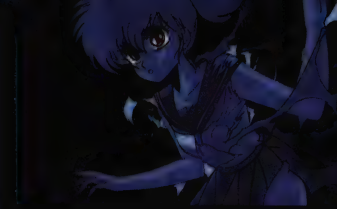
少年の前をエイがよぎった。そしてエイの影から現れたのは――

「ゼル!?」

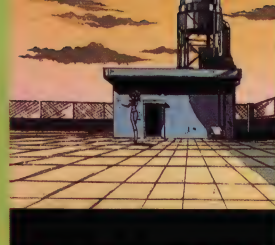
陽子がその名前を口にした途端、黒板の後から壁を突き破って巨大なエイが出現し、陽子に向かって突進した。

陽子は逃げた！教室を飛び出し廊下を駆けぬける。その後を建物を壊し、破片をまき散らしエイが追う。

階段を駆け上り、屋上へ出るドアを開く。外の光!!

その光に触れた瞬間、陽子のセーラー服は吹きちぎれた！

エイに向かって突進する！

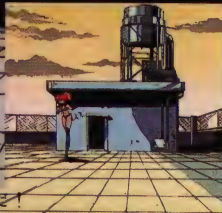
はね，回り込み，一瞬のスキを突いて，

エイの背中に剣を突きたてる！

回り込みながら，エイを避ける。間一髪スレ違い！

高く飛ぶと宙返りして体勢を整える。

逆さまになりながら剣をぬく！

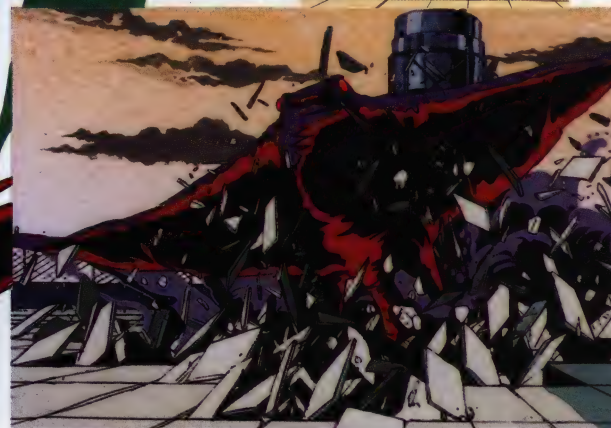
陽子は戦士の姿に変わり，空中へ飛んだ！

エイが追う！

屋上に出た。体に光が走る、戦士の姿に戻ると、陽子は空中へ飛び上がった！天井をぶちぬいて、エイも陽子を追って空中へ舞い出した。

宙返りして、エイと向かい合う陽子。回りこんで陽子を追うエイ。街の上空で陽子とエイの戦いが始まった！

エイの背中に向けて踊りこむ、勢いをつけて背をふみきりにして空中高くとぶ。剣をぬく。エイに向かって突つ込む。旋回して陽子に踊りかかるエイ。よける陽子。

「トーッ！」

陽子はエイの背中に剣を突きさした！

めいっぱい力を入れて、剣を抜く！
悶えるエイ！陽子も必死に剣を握りしめる。
同時に激しい閃光が球から走り、床がはじけた。
エネルギー炉も爆発する。
途端に噴出するエイの血しぶき！
エイの動きにつれ飛び散る緑の血！
縦横に青い光が走り、ついに、球は消失した！
ついに力尽き大地に激突すると、
ゼルを激痛が襲った。のけぞるゼル。
陽子を乗せたままエイは暴れ狂った。血が空中に雲のようにたなびく。陽子は力をこめて剣をエイからぬいた。噴き上る緑の血！　エイは地面に激突した！
同時に、ゼルに激痛が走った。

陽子覚醒

陽子の球から凄まじい力が放たれ、床ははじけ、崩れた！陽子がついに目を開けた瞬間、エネルギー炉が、コントロール・ルームが、浮遊城のあらゆるか所が、次々と爆発を始めた。
炎のような光の中で、今、陽子は復活した!!
「陽子ーっ！」
「た……助けちくれーっ」
ヨニが、リンガムが叫ぶ。
毅然として陽子は振り向くと、剣を抜き放った。刃の球は一斉に陽子に向かった。だが、陽子は、一つ一つ叩き切っていく。その正確さ、その速さ！
壁を破ってレダの鎧が現れて、ヨニとリンガムのいましめを解いた。
「ウホホーイ…」
とんぼ返りして喜ぶヨニ。
レダの鎧は逃げようとする衛士ロボをつかみ上げると、持ち上げてにぎりつぶした。
「なにもかも……伝説のとうりに…」
側近はガックリと膝をついた。
怒りにふるえるゼルは、剣を抜くと、陽子に躍りかかった。

目覚めた陽子に驚くゼル。

コントロール・ルームも爆発！

中球都市も火を吹いた。

陽子，何とかして！助けて！

炎のような光の中からふりむいて，陽子が剣を抜くと，剣球が一斉に陽子めがけて襲ってきた！

壁を突き破って現われるレダの鎧！

ヨニたちを解放すると，衛士ロボを倒す。

「なにもかも…伝説のとおりに…」

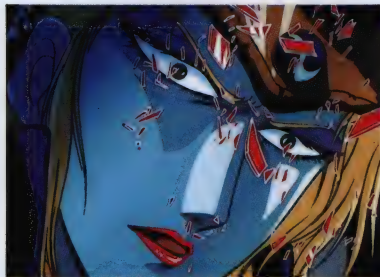
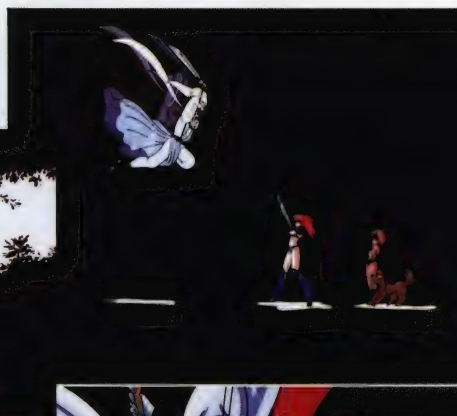
唇を歪ませるゼル。
この小娘，ただじゃすまさん！

ハッ！ゼルが斬りかかってくる!?

ム！……今なら言える、きっと言える！"

水晶のような破片となって消え去った。

浮遊城はそこに出現しかけていたが。

陽子の苦い想い出の一瞬――。

苦痛にあえぐゼルから出たものか。

覚悟！ゼルの刀は陽子めがけて一直線！

陽子の剣が貫いたのは――

陽子が突きたてた剣の先から，赤いガラスの破片が散る。それは…。

ゼルの体は溝の底の炎が呑んだ。

断末魔の絶叫を残して

大地に倒れこむ城から，レダの鎧は脱出。

今，浮遊城は炎の中に崩壊し始めていた。

ゼルの赤い球だった！

夢の終わりに

並木道をスレ違う少年と陽子――その背後の空に浮遊城があった。と、その浮遊城に、空ごとひびが入り、ガラスが砕けるようにきらめきながら、割れた。

陽子に降り注ぐゼルの玉の破片――。陽子の剣はゼルの玉を刺し貫いていた。よろめきながら後ずさったゼルは、溝の中へ悲鳴と共に落ちて行く。溝に逆まく炎がゼルを呑みこんだ――。

浮遊城のあちこちで、断末魔の爆発が起きていた。その炎に巻き込まれて見張り塔も爆発する。

レダの鎧が飛び出した。急速に脱出していく。

浮遊城は、浮力を失ない大地に倒れ、爆発した。

レダの鎧は空中でレダの翼になった。そのコックピットから、陽子、ヨニ、リンガムは浮遊城の最期を見つめていた。ヨニがふとつぶやいた。

「レダパワーを、復活するのは、これでふりだしかア……」

「ゼルは、どうして、あれだけの力をアシャンティのために使わなかったのかしら……」

「まったくじゃ、アシャンティもまだまだ捨てたもんじゃないのにのォ……」

「そしてノアもね」

陽子は、遠くを見つめながら、きっぱり言い切った。

レダの翼は、中空高く舞い上った。ノアを目指しているのだ。

「さア、急がんと、次元の道が閉されてしまうぞ」

「そうよ、ノアのしんきろうが消えないうちに」

ヨニの言う通り、しんきろうは薄れかけていた。レダの翼はしんきろうへ向かって急いだ。

ヘッドフォンをつけながら陽子が言った。

「ゆっくりお別れをしてるヒマもないわね」

「まーそのうち又会えるさ」

「あーあ、あたしも陽子みたいに恋でもすっかなア」とヨニ。

「相手がおればな」リンガムは口が悪い。

「なんですって！」

「おっと、急げ陽子、しんきろうがうすれていくぞ」

「フン！だ」

「ありがとうヨニ！」

″ありがとうヨニ！ ありがとうリンガ

光がすべてを消し，陽子はノアへ！

なおも爆発を続ける城の姿が映った。

高空で翼に変身，そこから見る三人の目に

「アシャンティも捨てたもんではないのに」「そして……ノアもね」

ヨニとリンガムはいいコンビになりそう。

レダの翼はノアのしんきろうへ飛ぶ。

「ありがとう……リンガム！」

「ありがとう……ヨニ！」

「ありがとうリンガム！」精いっぱいの想いをこめた陽子の別れの言葉だった。

陽子は目を閉じるとテープのスイッチを入れた。あのメロディーが流れる。

「今なら言える、きっと言える……」

陽子の心はノアに、現実の世界に飛んだ。青い光がレダの翼を包んだ。ヨニもリンガムも、レダの翼も何もかもかき消すようにいなくなった。ただ一人になった陽子を、まぶしくあたたかい光が包み、その光に導かれるように、陽子は、飛んだ。こみあげてくる歓びに満たされて、ノアへ、なつかしい、自分の世界へ——。

あのメロディーが流れる　「今なら言える」

エピローグ

目を開けると、陽子が立っているのはあの並木道。木の葉が一枚、陽子をかすめて、地面に——落ちた。

ハッとして陽子は振り返った。少年が去って行こうとしている。陽子はニッコリ微笑むと、目を閉じて、テープをとめた。なつかしい曲だけど、今はさようなら——。

晴れやかな顔で、ヘッドフォンを外すと、深呼吸を一つする。もう心は決まっている。

陽子の足は、地面を力強くけると、少年に向かってかけ出した！

少年の足が、後にむいた。

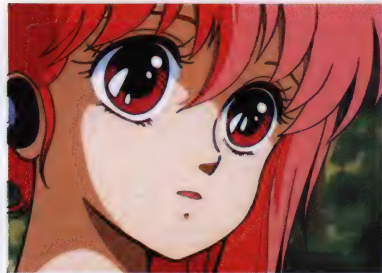
立ち止まる少年、その前に想いのありったけを胸にしてたつ少女——

二人をやさしく包む陽の光、それは、少女が生きていく、この世界の光だった。

一枚の木の葉が落ちた——！

呆然となっている陽子の足元に

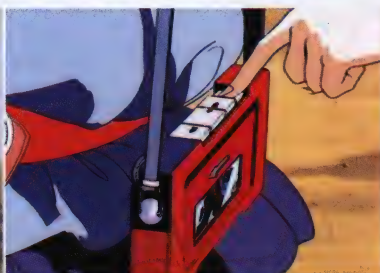
あの想い出の場所。

目を開くと，そこはあの並木道。

じゃ，あの時，あの時間？間に合う！

彼が歩み去っていく！

ふりかえってみると…

もしかしたら？

その顔は明るく晴れやかだ。

テープを止める。ありがとう……。

一度はためらったけど，微笑んで，

じっと行く手を見つめる。

ヘッドフォンを外す。もう…要らない。

振りかえった少年の足，追いついた少女の足。

かける!!かける!!

力強く大地をけって

深呼吸して，決心すると，

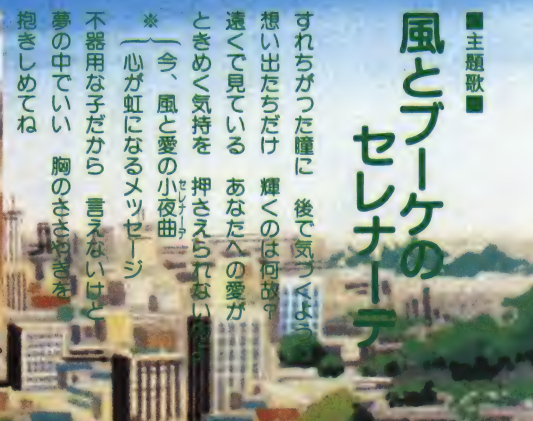
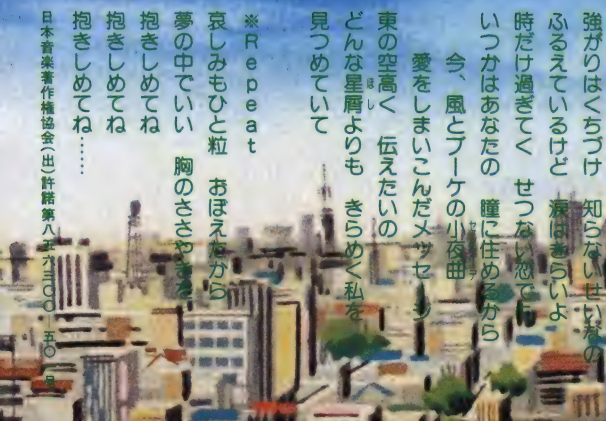
■主題歌■

風とブーケのセレナーテ

すれちがった瞳に　後で気づくよう
想い出たちだけ　輝くのは何故？
遠くで見ている　あなたへの愛が
ときめく気持を　押さえられない

※今、風と愛の小夜曲(セレナーデ)
心が虹になるメッセージ
不器用な子だから　言えないけど
夢の中でいい　胸のささやきを
抱きしめてね

強がりはくちづけ　知らないせいなの
ふるえているけど　涙はきらいよ
時だけ過ぎてく　せつない恋で
いつかはあなたの　瞳に住めるから

今、風とブーケの小夜曲(セレナーデ)
愛をしまいこんだメッセージ
東の空高く　伝えたいの
どんな星屑(ほし)よりも　きらめく私を
見つめていて

※Repeat

哀しみもひと粒　おぼえたから
夢の中でいい　胸のささやきを
抱きしめてね
抱きしめてね
抱きしめてね……

今、少女の想いは、光に満たされて……。

画／影山楙倫

画／豊増隆寛

画／小原渉平

画／いのまたむつみ

画／いのまたむつみ

MUTSUMI INOMATA

キャラクター・デザイン
作画監督
いのまたむつみ
INTERVIEW & IMAGE SKETCHES

〝キャラ・デザインは、とっても恥ずかしい♥〟

♥これが「缶切り事件」の真相だ

―『宇宙皇子』の取材で沖縄へ行かれたそうですが、いかがでしたか。

いのまた 疲れましたァ(笑)。

―沖縄は初めて?

いのまた ええ。

―暑いのは平気ですか。

いのまた そうですね、あんまり苦になりません。気候がよくて土地の方の人柄もよくてね。「仕事じゃなかったらいいのに」とか思いましたけどね(笑)。

―強行スケジュールで?

いのまた そうです。遺跡とか博物館とか、色んなとこを見てまわって。

―あのイラストは、作者の藤川桂介さんのご指名ですか。

いのまた そうなんです。『プラレス3四郎』をやった時のご縁で。とても光栄です(笑)。

―初めて小説のイラストをおやりになって、いかがですか。

いのまた えーと……大変ですね。物語のイメージとはズレないように、かといって、あまり表現が狭くならないで、読者の方が絵を見て何かインスピレーションが湧くような、そういう感じが出せるようにと思ってやってるんですけど、なかなか難しいですね。特にあれは時代がちゃんと決まってますから……。

―時代考証の面で?

いのまた あんまりあの時代っていうのは、資料が残ってなくて。私も全然知らないもんですから、図書館に通ったりして大変でした。

―少女漫画の繊細なペンタッチと共通したものがあるような気がするんですが……。

いのまた 自然に受けた影響っていうのはあるかも知れないですけど、意識してそうしたということはないと思んですが。

―佐保媛なんて『日出処の天子』の岸涼子さんぽいかな、と(笑)。

いのまた (笑)似ちゃうんですよねえ。『宇宙皇子』の時代は『日出処の天子』から百年くらいあとなんですけど、女の人の服装とか髪形とかが、あんまり変んないんですよね。種類も少なくて。だから、今のうちは、宮廷の若い女性っていうのは佐保媛しか出て来ないんですけど、もっとたくさん出て来るとね、みんな同じになっちゃうんじゃないかと思って(笑)。

―男の人の方が描きやすいですか。

いのまた いえ、男性の方も似ちゃうんですよねえ、ほとんど(笑)。難しいですね。

―『宇宙皇子』は完結まで10年かかるとか。

いのまた 40冊ぐらいの構想だとうかがいました。おかげさまで10年先まで仕事があります(笑)。

―さて、『幻夢戦記レダ』のお話しなんですが。最初は、30分くらいのプロモーション・ビデオ風のものだったそうですね。

いのまた ええ。その時は、アニメーターが2〜3人くらいで、各々10分ぐらいずつパートを受け持って、ひとつの簡単なストーリーをつけて、各自がやりたいことを自由に動かすみたいな―
―そういう考えの時もありましたけど、それだとまとまらないというのと時間が延びたので、ああいう物語で作ることになりました

―ストーリーや設定には、どの程度、参加なさってるんですか。

いのまた どの程度というと……どの程度でしょう(笑)。

―女の子が主人公で異世界物というアイディアは初めから……

いのまた そうです。

―初恋のテーマは?

いのまた あれは監督の湯山邦彦さんのアイディアです。

―『GBボンバー』みたいなスラップスティック物でキャピキャピのヒロインをイメージされたということはないですか。

いのまた そうでもないです。逆にもっと女の子らしい―というとおかしいですけど―そういう面も描きたいなあと思ってたので、湯山さんにお願いしたこともあります。

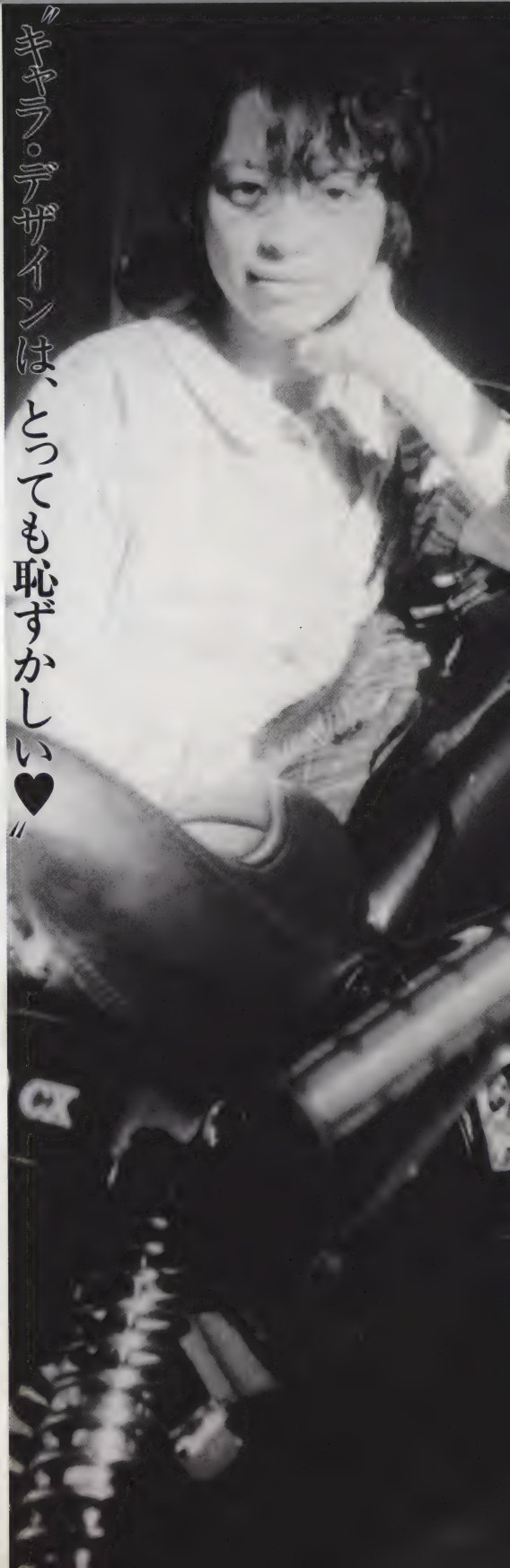
―その「女の子らしい」というのを、具体的に説明していただけますか。

いのまた なんかもう、ハチャメチャで、女の子でもウンと力持ちとかね、そういうのが多かったので、そうじゃなくて、もっとやさしいみたいな、女の子の弱いところも出せるといいなと思いました。

―それは、ある程度、陽子の性格に反映してますね。

いのまた そうですねえ、優柔不断で……(笑)。

―ああいう優柔不断な女の子っていかがですか。親近感がわくとか(笑)。ご自分の性格をお考えになって。

いのまた ええ、アレですよ、私はやさ

しくて(笑)。ウソですけど、フフフ(笑)。

——カナメプロの方のコメントを拝見しますと、「いのまたさんは意志が強い」とか……。

いのまた (強く)そうなんですよ、「怖い」とかねえ。他の方をインタビューして来て、私のところに最後に来るとね、「皆さん、怖いって言ってます」とか言われるとね、「え～☆△◎!!」とか(笑)。

——某武上純希さんの「借りた缶切りを拭いて返さないと怒られる」とか……(笑)。

いのまた 違う違う、アレは違うんですよ! 会社にね、備品がないんで、缶切りとか栓抜きとかを、みんな個人で持ってるんですよ。机の上のそれを誰かがすぐに持ってっちゃって、返してくれないの。で、また持ってくると、またなくなっちゃう。そんなで、三つか四つなくなって、今度は箱の中とか紙袋とかに入れとくんだけど、それでも勝手に持ってちゃう人がいるの。

——ははあ……。

いのまた で、そういうのが返って来なくて、年末の大掃除なんかすると、どっかにホコリだらけになって落っこってるんですよね。「これはなくなった私のだ!!」と言って……プリプリ怒って……怒るでしょ、誰でも? そういうところを、ああいう風にゆがんで記憶してたんじゃないかと思うんですけど(笑)。

——武上さんは平気で持ってっちゃう方?

いのまた いえ……あの方はちゃんと借りに……来たんじゃないかと思うんですけどォ、ハイ(笑)。

——すると、いのまたさんは性格的にはヨニの方に近いですか。

いのまた そうですねえ……そうじゃないですか。

♥陽子にセーラー服を着せたのは湯山監督

——陽子とヨニが、ああいう露出の多いデザインになったのは、いのまたさんの考えで?

いのまた ハイ、独断と偏見で(笑)。

——あのコスチュームであのストーリーのわりには、パンチラは少ないし、ヌードシーンとかは全然ないですね。それは意識的に?

いのまた そうです。コスチューム自体はああですけど、そういうのって好きじゃないんですよね、私は。で、湯山さんも、そういうのをドンドンやって「エヘヘ、うれしい♡」という人じゃないと思うんです。そういう下品なのがキライだったので、もっとちゃんと、誰が見ても楽しめるというような、そういう上品な作りにしたかったんです。

——話の展開や絵、パックまでが非常に女の子っぽいといいますか……。

いのまた 湯山さんは少女マンガも、す

ごくお好きなんですよね。『魔法のプリンセス ミンキーモモ』とかもやってらっしゃるし、だから、ああいう世界というのは、得意の分野だと思います。

そこで、いのまたさんの指向と一致したわけですか。

いのまた そうですね。

——内股で立ちまわりをやったのは陽子が初めてでしょうね。

いのまた (笑)そうですね、ハイ。

——陽子の想い人であるA君の顔を見せないのは、どうしてですか。

いのまた 女の子が『レダ』を見て、そういう身に覚えのある人は、自分の相手にあてはめられるように、です(笑)。

——なるほど。ゼルと側近のコスチュームを見ると、この作品は東南アジアには輸出しない方がいいのではないか、と。

いのまた アハハハ、そうですかァ(笑)。

——ああいう衣装や風俗はお好きですか。

いのまた 初期設定を作ったころに、湯山さんたちと、インドの仏教とか密教にキャッキャッとミーハーに騒いでたんです。アシャンティは、熱い日射しと乾いた空気で中近東の方のイメージがあったもんですから、ゼルの衣装はそういう感じで。

——王族ですね。

いのまた そうですね。中近東の王族。側近は東南アジアのバリ島のお面と祭りの衣装です。魔除けの面とかをイメージして作りました。

——普段から、そういう資料は気をつけて収集なさってるんですか。

いのまた そうですね、興味があると本なんて買いますから。

——女の子のファッションを勉強するのに「流行通信」とかを定期講読してらっしゃいます?

いのまた ええ、資料にするためだけに読んでるわけでもないんですけどね……。

——あ、一人の女性として?

いのまた (笑)。

——ゼルの幻覚の中で陽子が着ている制服がセーラー服なのは湯山さんの趣味ですか。

いのまた そうです!(笑)。

——作画監督というのは、すべての原画と動画に目を通すんですか。

いのまた 原画だけですね。ただ、動画でも重要なところは目を通しました。主要キャラのバスト・シーンとか、いわゆる「キャラくずれ」が動画でおこらないように、一応、キャラを中心に見ました。

——陽子がレダの戦士に変身すると、顔が少し面長になるようですね。

いのまた なります。変身したので意志の強さみたいなのを出せないかなあ、と。

——アテレコの時は、湯山さんと一緒に立ち会われたそうで。

いのまた はい、最初の一日だけ。

——アドバイスとか?

いのまた いえいえ、全然、何もないです。ただ、もう、見学者の気分でいました。

——アテレコのスタジオに行かれたのは初めてですか。

いのまた よく行くんです。見るのが好きだし——アテレコも製作の一環ですから。アニメーションっていうのは、全部そろってフィルムが完成して、初めて出来上がりですよね。私がやってるのは絵だけの部分なんですけど、他にアテレコを見たりとか、ダビングに行ったりとか、そういう完成する過程を見るのが好きなんですね。でも、あんまり絵が入ってないと行きたくないんですけど(笑)。

——鶴ひろみさんの声はいかがですか。

いのまた 登場人物が少ないですから、ああいう華かな声の方がいると、パッと明るくなって良かったと思います。音響監督の松浦典良さんから、色んな方のデモ・テープを聞かせてもらって、鶴さんが一番、作品のイメージにあってたんですよね。

——坂本千夏さんは?

いのまた やっぱり良かったです。陽子との掛け合いのシーンとか、ありますでしょ。そこで、お互いに相手の芝居を食ったりとかじゃなくて、それでいて二人の個性がちゃんと出てますからね。

——富山敬さんのリンガムは、難しい役ですね。

いのまた 絵があんまり入ってなかったんで、「ああ、申し訳ないな」と思って。富山さんのようなベテランの方だから、アテられたんですよね。

——そういう意味では、実力派ばかりそろったという感じで……。

いのまた そうですね。

——ゼルは?

いのまた 意志が強くて高圧的な声の感じをイメージしてましたから、池田秀一さんはピッタリでした。

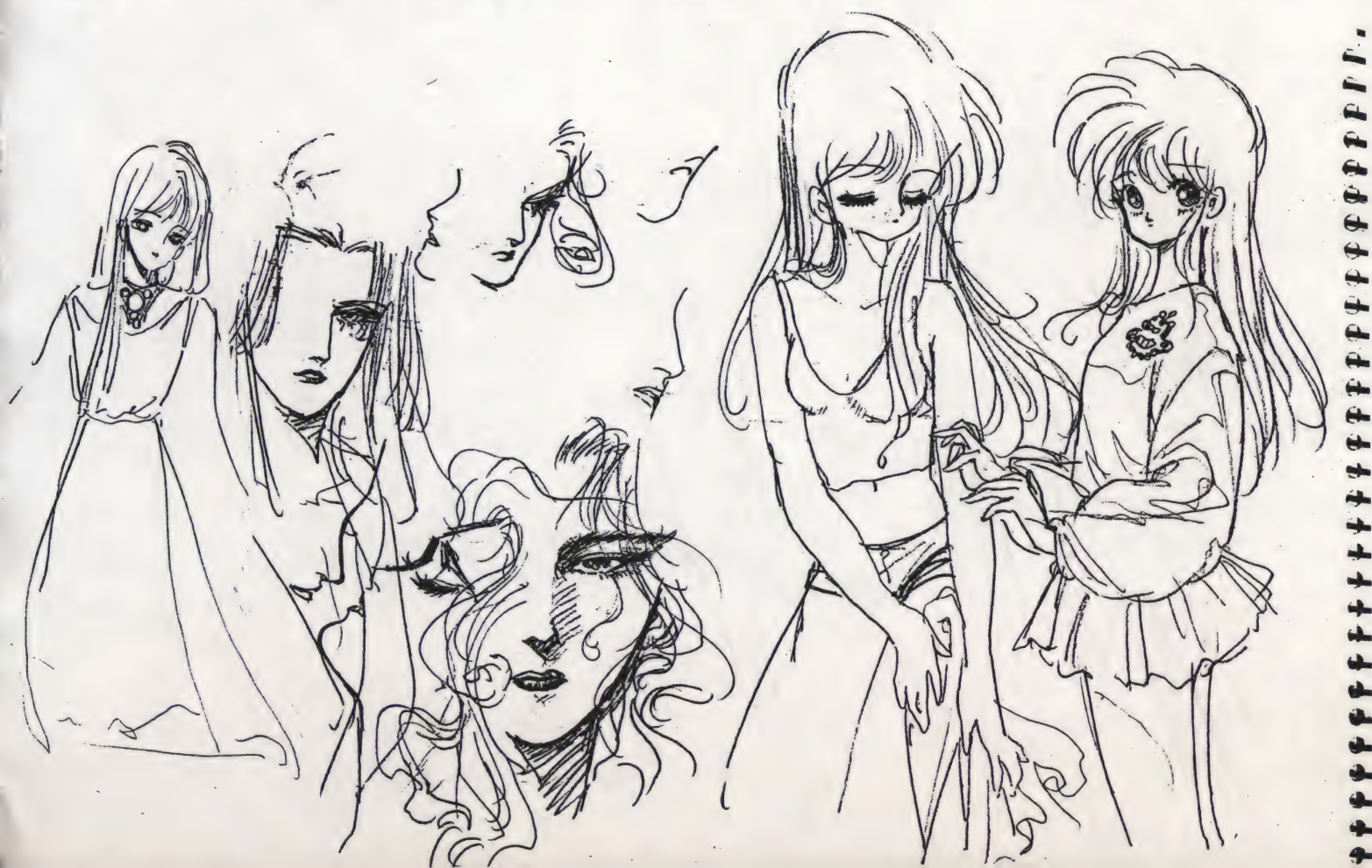
——鷺巣詩郎さんの音楽と秋本理央ちゃんの歌はいかがですか。

いのまた 音楽はすごく良かったと思います。劇場物くらいの迫力があって、画面に広がりが出て来ましたね。それと、理央ちゃんの初々しさが、陽子がホントに唄ったらこんな感じ、というのがあって良かったですねえ。舞台で唄ってるとこなんか、陽子の姿とダブって見えたりして……。

——イベントでお会いになってるんですね?

いのまた ええ、何回かは一緒になってますから。すごく明るくてスナオでいい人ですね。

♥スケジュールがつまったら「平常心!」

——異世界物というのは、いくらでも手を抜けるようなところがあるんですが、『レダ』は現実と異世界をキッチリ分けてあって、しかも異世界の存

在理由もちゃんと説明してありますね。

いのまた　だから、単なる異世界物、にしちゃうと、すごくご都合主義になっちゃって、何でも都合よく出て来て、「魔法のおかげだ、アリガタヤ」になっちゃうから(笑)。それでは見ていて納得できないですからね。湯山さんたちと、その辺の説明が一応つけられるようにと話し合ったんです。

——あのゼルの幻覚世界で、窓からスッとエイが入ってくるイメージがすごい。

いのまた　あれは湯山さんのイメージです。やはりその辺は、湯山さんは原画を描いてらしたし、絵の描ける演出家というか、絵のイメージからお話もおこせますから、そういうのが湯山さんの強みだと思いますね。

——陽子の「好きなんだけど言い出せない」という心理はいかがですか。

いのまた　そうですねえ……(笑)。誰でもあるんじゃないですか、女の人には。一年何ヶ月というのは長すぎるかも知れないけど(笑)。そういうのって、誰にでもあると思うんですよね。特にアニメ・ファンの方は、内向的な人が多いみたいですから。

——そうしますと、ああいう気持ちは「私の心の中にもある!」と?

いのまた　キャハハハ(笑)、さあ、どうでしょうねえ(笑)。

——笑ってゴマ化したということで(笑)。

いのまた　(笑)。

——某誌のインタビューでキャラクター・デザインは恥ずかしいとおっしゃっていますが?

いのまた　そうですね、恥ずかしいですね。キャラ表とか描いても、不完全な部分ってのがありますよね。実際に動かしてみると、こういう角度で、こういう表情の時は、どうなるのかわからない、とか。わからないっていうか、キャラ表からだけだとくみとるのが非常に難しいんですよね。で、よく見ると色々とおかしいところがたくさんあるんですよ。難しいですね……。

——最後の方で製作スケジュールがつまってくると、どういう精神状態になるんですか。

いのまた　ええ、もう、アレですねえ、怒りをおさえて(笑)。「平常心、平常心」と思いながら。

——ストレスがたまるでしょうね?

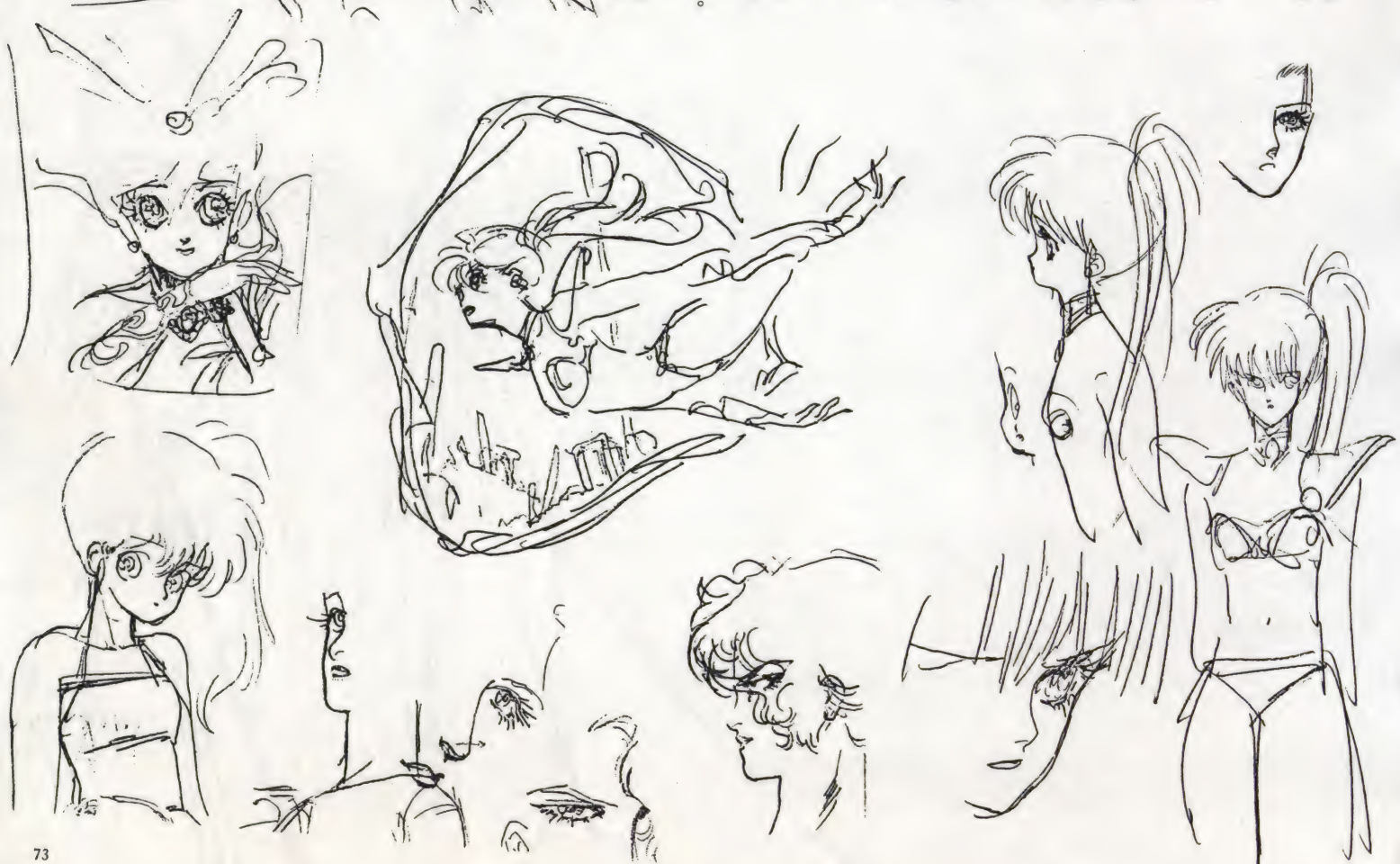
いのまた　たまりますねえ、発散する時間もないですから。とにかく平常心を保たなけりゃいけないですからね。もう、家に帰って眠るだけですからね。

——睡眠時間はどのくらいですか。

いのまた　わりと少なかったんじゃないですか。でも、一週間だけやったら終るっていうのと違いますから、少なくても5時間は眠るようにしてたと思います。

——それでもキツイですね。

いのまた　まあ、そうですねえ。でも、5時間くらいあれば、一ヶ月や二ヶ月は持ちますから。最後の方は、精神もモーローとしてきましたね。

——体力的にはタフな方だと思いますか。

いのまた　もっと弱いと思ってたんですけど、いつ倒れてもおかしくないな、と思ったんですけど、意外と持ちました(笑)。

―精神力で持っちゃうみたいな……。

いのまた　そうですね。そういうのはあるかもしれないですね。

―完成した直後は、2～3日、死んだように眠りこけたとか……(笑)。

いのまた　そういうのはなかったですねえ。フィルムの方だけじゃなくて、『レダ』関係のイラストの仕事も平行してやってたんで、締め切りが次から次へとズーッとありましたから。えー、いまだに終ってないです。

―どうもすみません。

いのまた　いえいえ(笑)。大体、この日は休もう、オフの日とかね、日曜日は仕事をしないとか、最初に決めてるんですけど。なんかズレこむんですよねえ、「ああ、いいや、明日は日曜日だから、明日やればいいや」っていうので、いつもとかわんないんですよねえ(笑)。

―完成した作品をご覧になった感想は？

いのまた　細かいことを言い出すとキリがないですから、直したい部分ていうのはたくさんあるわけですけど、あの状況の中では良い出来だと思います。

♥運命を変えた仕上げのアルバイト

―お生まれは東京ですね。

いのまた　東京には小さい時しかいなかったんです。東京には小さい時しかいなかったんです。で、神奈川県の茅ヶ崎の公団住宅があたっちゃって、父は「そんな遠い所、どうすんだ!!」って悩んだそうですけど、まあ、せっかく当ったんだからって引越しをして……。

―すると茅ヶ崎―東京間を毎日、通勤されたんですか。

いのまた　通ったそうです。ずいぶん大変だったんじゃないですか(笑)。それから中学の時に横浜に引越して来たんです。

―兄弟は？

いのまた　三歳下の妹がひとり。二人姉妹です。

―長女になるわけですね。小さい頃は、どんな子供だったんですか。

いのまた　小学生の時は茅ヶ崎で、田舎ですから、遊ぶっていうのは、表を走りまわるぐらいしかないんですよね。小学校もグランドがダーンと広くて、広いだけで体育館もプールもないんですよ。で、グランドのまわりは野っ原ですから、あとは海があるだけでしょ。そういうところを走りまわって遊ぶんですよね。田舎の子供だから。スポーツは苦手ですけど、体を動かすのは好きですね。

―すると活発な方だったんですね。

いのまた　いえいえ、おとなしくて良い子でした。いや、ホントーに(笑)。

―勉強の方は？

いのまた　ダメです、フフフ(笑)。

―何が苦手なんですか。

いのまた　(強く)数学ですねえ。

―図画工作のたぐいは？

いのまた　図画工作……(考えて)そういうのは、わりと好きでしたね。小学校の時に、棚を作って色を塗って提出するという宿題があったんですよ。で、まあ、昼間はチャランポラン遊んでて、夜になって色を塗ろうとしたら、絵の具が切れてるんですよね。しょうがないから、ある色でムニムニ塗ってたら途中で足りなくなって、違う色を塗り重ねてったら、何かキタナーイ色になっちゃって……。茶色に薄い黄色と薄い水色を塗ったんですよね。

―すごいコーディネートですね(笑)。

いのまた　それで、出来上がったのを見て、悲しくなっちゃって。子供ですから、もっときれいな色に塗りたかったんですよね。「昼間だったら文房具屋さんもあいてたのになあ……」とか考えながら、翌日、はずかしかったけど提出したんです。そうしたら先生が、「これは、おちついた良い色だ」ってほめてくれたんです。で、「大人の感覚はわからない！」って(笑)。

―もう信用しない、と(笑)。何年生の時の話ですか。

いのまた　2年生か3年生の頃ですね。

―子供の頃はどういうアニメをご覧になってたんですか？

いのまた　『アタック№1』とか『巨人の星』とか……それと『宇宙戦艦ヤマト』の前に、『侍ジャイアンツ』っていうのをやってたんですよね。

―梶原一騎原作で井上コウ漫画の野球物をアニメ化したやつですね。

いのまた　その頃、野球がすごく好きだったんです。原作が「少年ジャンプ」に連載してて、そのファンだったから、アニメの方も好きでしたね。あとは『未来少年コナン』とか『ガンバの冒険』とか。アニメ・ファンというほどは、数を見てないんです。

―映画だと東映の『わんぱく王子の大蛇退治』とか……。

いのまた　『アラビアンナイト　シンドバッドの冒険』とか……。

―そう言えば、切れ長の目の美形という点で、シンドバッドとゼルは似てますねえ。

いのまた　ハハハハ、そうですね！(笑)。昼が色トレスで。当時は枚数使ってるから。ナヨナヨって動くんですよね。アレが好きで(笑)。

―どちらかと言うと、一コマや二コマ撮りがお好き？

いのまた　そうですねえ、表現したいことを十分だそうとしたら、一コマないし二コマでやらないと。三コマだけだと限界を感じますね。だから極端にデフォルメしたアクションすれば、三コマで、かなり表現できると思うんですけど。それって、つきつめて行くと、どのキャラが何やってるのか、わかんなくなっちゃうんですよね。

―同人誌活動とかは……。

いのまた　全くやってません。

―中学生や高校生の時は、どういう職業につこう、と？

いのまた　特別に深くは考えてなかったですけれど、絵が好きでしたから、どこかの美大にでも行ってデザイン会社に勤めて、みたいなことを漠然と考えていました

―それが高校生の時に牧プロダクションという会社で仕上げのアルバイトをしたことで方向がかわるわけですね。

いのまた　新聞に広告のチラシが入っていて、「自宅でもできる！」って書いてあったんです。それでやり始めて……。

―失敗談とか、ありますか。

いのまた　ええ、いっぱいしましたよ。せっかく塗って乾いてみたらムラムラになってたとか、絵の具のビンをひっくり返したりとか。

―わりとギャラは良かったんですか。

いのまた　安いですよ、あの仕事は。とても人には勧められない(笑)。

―そういうのを毎日おやりになってると、学校の勉強の方は？

いのまた　できなかったですね。

——美術部に所属されたそうですが、クラブの方も？

いのまた　あんまりマジメには出てなかったですね。出ても遊んでましたから。その前から絵画教室みたいな所に行って、絵は習ってたんですけど。

——中学生の頃から？

いのまた　ええ。美大へ行くとなると、美大の受験のための技術を教えてくれるアトリエがあって、そこでキチンと勉強しないと、なかなか受からないんですよね。まあ、私はノビノビしてまして、進学の方は、一浪してそういうアトリエに通って、美大へ行けばいいや、ぐらいに考えてたんですね。

——美術部で油絵を描いたりデザインをやったりしたのが、今の仕事にプラスになってますか。

いのまた　どうでしょうねえ、あんまり役立ってないんじゃないですか(笑)。

——その牧プロでやった初仕事は『SF西遊記　スタージンガー』ですね？

いのまた　ああ、そうです。

——あとは放送順だと『銀河鉄道999』、『キャプテン・フィーチャー』、『花の子ルンルン』。

いのまた　仕上げの方は、もうゴッチャにやってましたね。もっと、色んな作品をやったと思うんですけど、一本だけとか……。

——印象に残ってる仕事は？

いのまた　アレは何の作品だったのかなあ、いっぱい色変えがあるのがあったんですよ。画面で見ると同じような色なんだけど、塗る時は一枚づつ違う色を塗らなきゃいけないんですよね。それに影がはいってたり、小さな模様があったり、そこをチビチビ塗ってくのとか、面倒くさくて。

——手間のかかるのは、簡単なやつよりギャラが高いんですか。

いのまた　いえ、同じなんですよ(笑)。私はあんまり上手じゃなかったから、そんなに難しいのは渡されなかったですね。

——そして、高校3年生の時に、牧プロの社長さんが葦プロに紹介してくれたんですね。それは、自分で描いた絵を見せたか何かがキッカケで？

いのまた　いやあ、そんなことしないです。どうしてでしょうねえ、「色塗るより、描く方がいい」とかブツブツ言ってたんじゃないですか。

——入社試験がなかったとか？

いのまた　「明日、連れてってあげよう」って言われて。絵の会社だから何か描かされるんだろうと思って、必要な道具はって聞いたら「何もいらないんじゃない」と言われたんです。「ホントにいいのだろうか？」って思って面接に行ったら、「じゃあ、卒業したらおいでよ」みたいな感じで。

——何か絵を持参して見せたんでしょう？

いのまた　いえいえ。何もなくて。「こんなことでいいのだろうか？」と思ってね。当時はわりとそんな感じだったみたいですね。

♥「あれが雲の上の金田さんだ」

——4月に新卒で入社して、3ヶ月間は研究生ということですが、この間は何をするんですか。

いのまた　まず、原画に紙をのせて清書の勉強があったんです。でも性格的に、チビチビ写すのは面倒でしょうがなかったんですよね。線が乱暴なんです。

——そういうのは、アニメーターの適性としては……。

いのまた　よくないですね(笑)。だから動画をやってる時も、早く原画をやりたくて、しょうがなかったですね。

——他には何を？

いのまた　タイムシートのつけ方とか動画の練習と。本番で使い終った原画から、自然物とか人間とか勉強になりそうなのを与えられて、それを中割りして見てもらうんです。

——デッサンの勉強はなかったんですか。

いのまた　そうですねぇ……デッサンはほとんどしなかったですね、そう言えば……。

——苦しい三ヶ月が終って(笑)、動画を始めるわけですね。作品としては、『くじらのホセフィーノ』、『ずっこけナイトドンデラマンチャ』、『宇宙戦士バルディオス』。『ドンデラ』の時は金田伊功さんと一緒ですね。

いのまた　ええ。当時、金田さんというのは雲の上の方でしたから、会社に来ていても、「今日は金田さんが来てるよ(笑)。

そういう感じでした。

——『バルディオス』の途中から原画になったんですね。

いのまた　そうです。ただ、話がシビアで、描いても描いてもキャラが笑う場面がないんですよね。ニコリともしない。それがつらかったですね(笑)。

——湯山邦彦さんとは研習中からの、お

つきあいで？

いのまた　ええ、色々と教えていただきました。

――『戦国魔神ゴーショーグン』の原画もなさってますね。

いのまた　はい。最終回も、Aパートの初めの方を描いてます。

――アニメ業界に入るについて、ご両親は反対なさいませんでしたか。

いのまた　なかったですねえ。女の子だからスキにすれば、みたいな感じで(笑)。

――妹さんの方は？

いのまた　今はデザイン事務所に勤めてます。

――姉と妹と、どちらが絵が上手なんですか(笑)。

いのまた　さあ、どうでしょうねえ、妹は私に全然、見せてくれないんですよ(笑)。妹も、私の作品を見ないようですけど。

――この道でやれるんじゃないとか、このぐらいの地位までは昇ってやろうとか、そういう自信とか野心がでてきたのは、いつ頃から？

いのまた　まあ……自信というのはなかったですけど、野心というか、がんばって上へ行きたいみたいなものは、ズーッと最初から、今でも勿論あります。やっぱり、始めたからには、がんばって色んなことをやれるようになりたい、というのはあります。今でも、あります。

――最初の目標は作画監督ですか。

いのまた　初めは右も左もわかんないですから、まず一人前の動画マンになろう、と。動画マンになれたら、次は原画をできるようにしようとか。原画ができるようになったら、作監やキャラ・デザをやりたい、とか。目標というか、色んなことを次々に考えます。

――『ゴーショーグン』のあと、新設のカナメプロダクションに移籍して、ここで待望の作監とキャラ・デザインをなさるわけですね。それが『魔境伝説アクロバンチ』。

いのまた　作監をやったのは、6話の『滅亡のアトランティス』と14話の『幻のバビロン』の2本くらいですね。

――影山楙倫(かげやましげのり)さんと共同のキャラ・デザですが、感想は？

いのまた　まあ、何事も最初ですから、色々と……今、見ると恥ずかしいです。笑いのタネというか……(笑)。

――どういう分担なんですか。

いのまた　私が味方側の蘭堂(らんどう)一家で、影山さんが敵側です。

――『レイダース／失われた聖櫃(アーク)』の影響がありますが、映画はご覧になりました？

いのまた　観(み)ました。面白かったですね。ちょうど『ゴーショーグン』の最終回の原画をやってて、初日の土曜日のオールナイトを観に行ったんです。前の2日ぐらい徹夜してたんですけど、「何が何でも仕事を終わらせて行くんだーっ！」と思って、ドドドドッて原画描いて葦プロの仲間と観に行ったんです。でも湯山さんは演出ですから処理とかがいっぱいあって、行けないんですよ。それで、「僕だけ仕事してるんだ……」とかね(笑)。

――初作監の感想は？

いのまた　いや、もう……作監て言われるほどのことは、出来なかったんじゃないかと思うんですけど。何しろ初めてですから、勝手がわかりませんから、「こんな風の方が、もしかしていいのかな」とか、まあ、あんまり深く考えないで、やってしまいました。

――主にキャラの修正を？

いのまた　キャラの修正もありますし、カットのつながりとか、レイアウトやアクションも直します。

――またも某誌のインタビューからなんですが、作監の仕事はあまり好きではない？

いのまた　面白くないですね(笑)。他の方が描いたのをチェックして直すわけですから。でも、作品をひとつの世界にまとめるという意味では、ものすごく重要な仕事ですから、本当はそういう気持でやってはいけないと反省してます。もっと掘り下げて出来る仕事だと思いますから……。

――『ゴーショーグン』の劇場版にも参加されてますね。

いのまた　ハイ、中間のコマーシャルの部分をほとんど全部やりました。

♥『3四郎』と『GB』、地獄の日々

――そして『プラレス3四郎』の話になるんですが、原作の神矢みのるさんの絵をご覧になって、どう思われました？

いのまた　初めに見た時はアニメにしやすいなと思ったんですけど、やっぱりペンタッチというのはアニメで再現するのは難しいですね。鉛筆の線だと、どうしても単調になりますから。アップなんかの時は、何重にも線をひいて、強弱をつけたりはするんですけどね。表面の輪郭だけ似せても、全然、雰囲気が違うんですよ。だから、アニメ向きにアレンジしてます。

——男性も女性も美形が多いですが、これは作品を華やかにしようということで？

いのまた 私はそう思いましたね。美形っていっても、わりと丸顔の感じで。主人公の素形3四郎くんが、幼ない感じでしょ。だから吹雪今日子とは、すごい凸凹コンビなんですよね。あんまりバランスをくずしてはいけないので今日子さんを丸顔でマンガっぽくしました。シーラ・ミスティとかも、まあ一応、大人っぽいキャラなんですけど、丸顔で目も大きくて、あんまり他とバランスがくずれないよう配慮しました。

——主人公が、あんな風に小柄だと？

いのまた やりにくいですねえ。フレームにおさまりにくいんですよね。だから、普通なら上半身だけフレームに入って芝居するところでも、今日子さんの上半身に合わせると3四郎が入んないんですよね。難しかったですよ。

——今の『レダ』のスタッフが、ほとんど揃ってますね。確か、村尾伸次が一番描きやすかった、とか。

いのまた やっぱり今日子と3四郎。

——シーラは？

いのまた シーラは難しい。丸顔で大人っぽい神秘的な雰囲気を出すっていうのは、どこかアンバランスですね。

——その分をサングラスとかファッションで補なって……。

いのまた でも、シーラのあの服は、実際に着てたら道歩けないですよね(笑)。

——それを言ったら、ほとんどのアニメ・キャラがそうじゃないですか(笑)。

いのまた それはそうですけど(笑)。

——さて、マンガの方なんですが、「ザ・モーション・コミック」誌に、『GBボンバー』を連載されましたね。あれは「マンガに挑戦してやろう!!」と炎と燃えながら……。

いのまた いえいえ、あれは恥ずかしいモノですから、あれで挑戦というと、あまりにもマンガに対して失礼ですね(笑)。

——しかし、依頼が来た時は「チャンスだ！」と思われたでしょう？

いのまた そうですねえ、チャンスだというか、気軽な感じで受けてしまったんですけれど、あとで「しまったぁ！」と(笑)。

——『3四郎』の各話のキャラ・デザをやって作監して原画して、それと平行してイラストやマンガを描くとなると、地獄のような毎日ですね。

いのまた そうですねえ、そのシワヨセが全部マンガの方へ行ってしまって、悲惨(ひさん)(笑)。

——アニメと違って、マンガは何がキツイですか。

いのまた 何がキツイっていうか、何の仕事でも大変ですけど、そうですねえ……(シミジミ)何でも大変ですねえ……。それに私、ベタ塗ったり、トーン貼ったりとかが、イヤでイヤでしょうがないんですよ。

——他にマンガの依頼は？

いのまた まあ、チマチマありますけど……恥ずかしくて……(笑)。

——イラストもむずかしいですか。

いのまた 色とか全体の雰囲気とか、表現の仕方とか構図とか……何をやっても各々、難しいところがあります。

♥わが憧れの松田優作

——ここから私生活篇なんですが(笑)、今は東京で一人暮しなさってるんですね。お仕事のない日は何を？

いのまた ボーッとしてます(笑)。昼ぐらいまで眠っていて、それから掃除して洗濯すると、もう夕方になっちゃいますね。

——得意料理は？

いのまた クリーム・シチューです。あれは楽なんですよ。余り野菜をお鍋に入れて煮るだけですから。

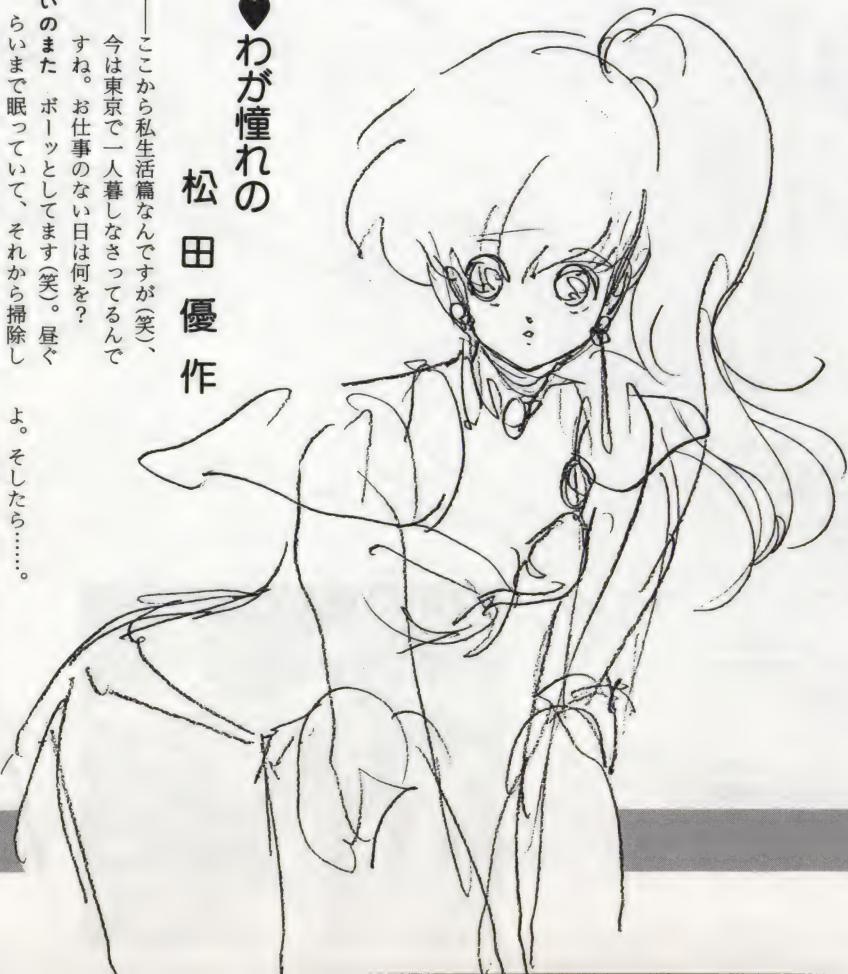
——コーヒーをかなり飲まれるみたいですけど、胃に悪くありませんか。

いのまた 良くないですねえ。一応、ハマッ子ですから、友人と一緒に大洋ホエールズの優勝を祈って、一年半「コーヒー断(だ)ち」をしたことがあるんですよ。そしたら……。

——優勝したんですか。

いのまた 最下位でした(笑)。

——アクション映画がお好きとうかがいましたが？

いのまた 『レイダース』とか、観ていてハッキリしてる映画がいいですね。この前、『ミツバチのささやき』っていう映画を、あまり良くない精神状態で観たら、「ウ～ン？」という感じで。他の人たちに「あんなにいい映画がどうしてわかんないの!?」って言われちゃいましたねえ。

いのまた やはり、それは性格的なものが……。フフフ(笑)。

――日本の俳優では草刈正雄が趣味とか？

いのまた オットット！(笑)。

――『華麗なる刑事』とか、ですか。

いのまた そうですね。あと『プロハンター』の藤竜也さんとのコンビがおかしかった。

――あの路線だと『探偵物語』の松田優作とかは？

いのまた あっ、好きです、大ファンです！『遊戯』シリーズとか映画の方も大好きです。

――草苅と優作では、どっちがお好きですか。

いのまた (即座に)松田優作さんの方が好きです、ウム。

――長身で足の長い男性がいいわけですね。草刈、優作……三浦友和とかは？

いのまた 前はなんかボクチャンて感じだったけど、『獣たちの熱い眠り』が渋い感じで良かったですねえ。

――村川透監督作品がお好きみたいですね。

いのまた あ、そうですね。実は今度の郷ひろみの『聖女伝説』も観に行きたいんです、フフフ、恥ずかしい！(笑)。

――草刈、優作、友和、郷……面食いなんですね。

いのまた そうですか。でも理想は高い方が……夢だから……。

――ちなみに歌手では、誰がお好きですか。

いのまた 沢田研二さん。

――やっぱり面食いですよ！(笑)、そういえばゼルは沢田研二にも似てる(笑)。

いのまた 沢田研二さんは、ザ・タイガースの頃からのファンです。

――女性だと、どうなります？

いのまた 日本だと小林麻美さんとかが、好きですけど。

――海外だとキャスリーン・ターナーとか？

いのまた そうですね。

――あ、これは面食いに決定ですね。

いのまた オットット(笑)。

――小説はどんなものを？

いのまた 大藪春彦とか……

――えぇっ!?

いのまた ウフフフ、好きになりました。フフフ(笑)。

――大藪――村川――優作、全部つながりましたね。

いのまた つながりましたねえ(笑)。大藪さんは全部、読んでます。押入れに今、本がダンボールいっぱい入ってます。

――すると平井和正さんとかは？

いのまた 好きですねえ。『サイボーグ・ブルース』、すっごく良かったです。『死霊狩り』が「野性時代」に連載された時は、発売日の朝に駅前の本屋まで走って行きましたから、翌月には、それが文庫本で出まして、生頼範義さんのイラストが欲しいから、また買っちゃうんです。

――ハードボイルド物をかなり読んでらっしゃるみたいですね。

いのまた そうですねえ、レイモンド・チャンドラー、ディック・フランシス、ジェイムズ・ハドリー・チェイス、ダシール・ハメット……。

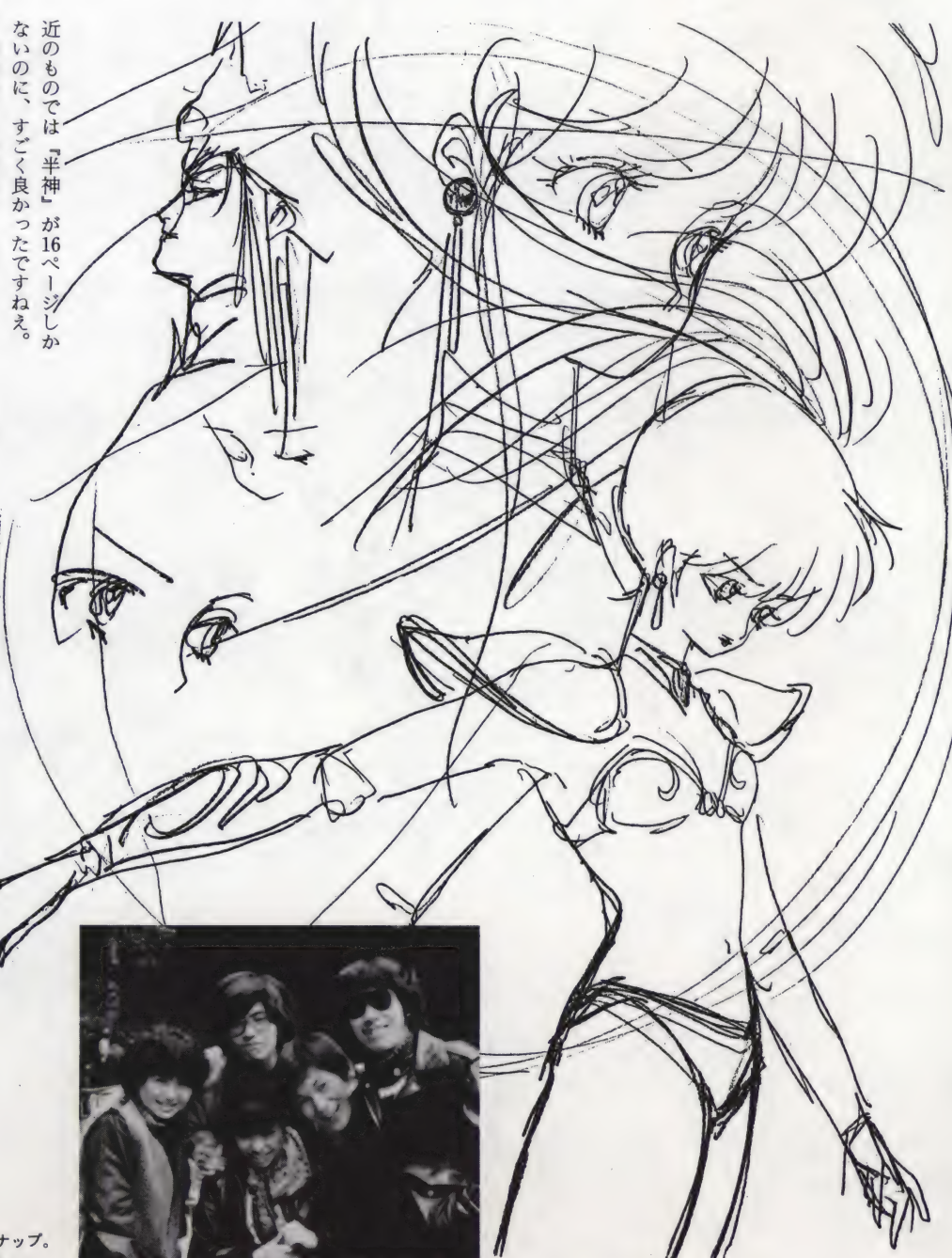
――女性でそれだけ読んでらっしゃる方は珍らしい。

いのまた あとは司馬遼太郎さんの歴史小説が好きなんです。

――『燃えよ剣』とか？

いのまた 大好きです！ テレビ化されて栗塚旭さんが演った土方歳三なんて最高ですね。今でも最終回だけはビデオに録って持ってます。

――少女マンガは、どういうのがいいですか。

いのまた 美内すずえさんの『ガラスの仮面』とか大好きですね。あの〝くささ〟がたまらない！(笑)、萩尾望都さんも好きです。『ポーの一族』とか、最近のものでは『半神』が16ページしかないのに、すごく良かったですねえ。

――男性のマンガ家は？

いのまた うーん、池上遼一さん。

――『スパイダーマン』ですか。

いのまた いや、『男組』、『男組』しかないですよ！(笑)、オットット(笑)。

――普通の番長マンガはダメ？

いのまた そうです。池上さんは、絵がすごくキレイで、『男組』は感動のドラマですよ。それと望月三起也さん。『ワイルド7』の最終回が、涙、涙、涙で……(笑)。

――〝くさい〟ドラマがお好きなんですね。

いのまた そうですねえ、根本的に(笑)。いや、言われてみて初めて気がつきました。

――まさかと思いますが、志穂美悦子の『女必殺拳』シリーズとか……。

いのまた 何本か観てます。残念ですね。志穂美さんは、あの方向で、もっとお金をかけた作品にドンドン主演してほしかったですね。東映映画は、深作欣二監督の『仁義なき戦い』シリーズも好きでした。

――第2部と第3部に出演していた成田三樹夫がオメアテだったんでしょう。

いのまた どうして、わかるんですか(笑)。

――先ほどの面食いラインにそってますから(笑)。

■プロフィール■

12月23日、東京に生まれる。横浜育ちで、高校時代に仕上げのアルバイトをしたのがキッカケとなって、葦プロに入社。ここで『くじらのホセフィーノ』『ずっこけナイトドンデラマンチャ』『宇宙戦士バルディオス』『戦国魔神ゴーショーグン』などの動画、原画を手がける。後に新設のカナメプロに移籍して『魔境伝説アクロバンチ』で初の作監とキャラ・デザイン(影山楙倫と共同)を担当。『さすがの猿飛』の作監を経て、『プラレス3四郎』『幻夢戦記レダ』で作監とキャラ・デザインを担当する。他に「ザ・モーションコミック」誌に掲載したマンガを集めた単行本『GBボンバー』(徳間書店)や、藤川桂介の小説『宇宙皇子』(角川書店)のイラストなどを手がけている。

プロレスと大洋ホエールズと松田優作とバイクを愛し、ゴキブリ嫌い。現在、フリー。

58年カナメプロ創設のころの旅行のスナップ。
中央いのまた、上 長尾、右小原の各氏。

♥初恋……そして将来

——さて、いよいよ初恋篇に入りますが……。

いのまた　えっ!?　いえいえ、そういうのは、いえいえ……。

——しかし、他の皆さんにはお聞きしてますんで。

いのまた　そうですかぁ……。

——いのまたさんだけ抜けると、インタビューのバランスを欠きます。

いのまた　いえいえ、もういいんです。いいですよォ、フフフ(と笑って話をそらそうとしますが……)。

——では、こうお聞きします。冒頭の陽子と同じだったか、ラストの陽子と同じでしたか。

いのまた　ん～～～～～(考えこみます)。

——打ち明けられました?

いのまた　そうですねえ。でも……初恋っていうか、憧れみたいなのって……ありますよね?　同級生の人にとか。そういうのって、恋……初恋ってとこまで行かないかも知れないですけど、まあ……打ち明けなかったですけどね。ホラ、写真を撮るとか、ね、ホラ……。

——修学旅行のスナップを買うとか……。

いのまた　そうそう。あと、相手がどこか歩いてるのを、友達の写真を撮るふりをして、むこうを歩いてるのを撮っちゃうとかね。そういうのは、みんなでよくやりました。

——非常によくわかりました。で、結婚の御予定は?

いのまた　ないです。いえ、今はないです(笑)。

——年令的な目標とか……。

いのまた　目標ですかあ……どうでしょうねえ……こういう仕事をしていると、あまり、そういうのに縛られたくない、というか……。

——わかります。

いのまた　時間が不規則ですからね。変に規則正しく生活しようとしたら、ダメになっちゃう部分てありますから。今は、あんまり考えていないですね。

——業界内結婚とかは?

いのまた　業界内では、あまりにも夢も希望もないというか……(笑)。

——女性の作監というのは、まだまだ少ないですが、これはどういう理由なんでしょう?

いのまた　やっぱり、作監になるまでには何年かかかるでしょ。そうすると、女性の方はしかるべき年令になって(笑)やめてしまう方が多いですからね。

——女性に不向きというのでは、ないわけですね?

いのまた　そういうことではないと思いますよ。ただ、体力的にも大変ですし、責任もありますから……そうですね。大変な仕事ですよね。

——女性作監の立場から、いわゆるロリコン・アニメについては、どう思われますか。

いのまた　私は、ああいうのはキライですね。ハッキリ言って嫌ですね。何か、すごく嫌な感じで。で、また、そういうのが安易に受けちゃって、たくさん出来てますでしょ。どういうんだろうなあ、と思いますけどね。まあ、ビデオはテレビとは違って、見たい人が自分でお金を出して買うわけだから、それはその人の自由だけど……個人的には好きじゃないです。

——仕事の方向としては、演出をやってみたいとか?

いのまた　そうですねえ、今はそういうのはないです。将来的には、やってみたいと思ったりするかもしれないですけど、今は絵の方を中心に色々やってみたいと思います。

——自由に企画できるとしたら、どんなジャンルの作品をやりたいですか。

いのまた　やっぱり、アニメっていうのは、見てる方は年の若い人がほとんどですから、見て楽しい、見終ったあとに「よかったなあ……」と思える作品がいいですね。ジャンルにこだわらずに。

——どうも長い間、有難うございました。

※このインタビュー中のカットはすべて、いのまたさんのラフ・スケッチノートより転載させていただいたものです。

KUNIHIKO YUYAMA

監督 湯山邦彦 INTERVIEW

〝『幻夢戦記レダ』は女の子の内宇宙と異世界の二重構造です〟

★〝不思議の国のアリス〟から〝オズの魔法使い〟へ――

――まず、この作品のお話が来たのは、いつの頃でしょうか。

湯山　一昨年の10月ぐらいからボチボチ。

――昭和58年の秋ですね

湯山　ただ、その時はやるかやらないか決まってなくて、何か企画があったら考えておいてくれ、ぐらいの話だったんですね。それで、カナメプロのみんなって、わりと古いつきあいなんです。いのまたむつみさんなんかは、アニメに入った頃から一緒にやってた。

――葦プロ時代ですね。

湯山　ええ。わりと話なんかするのにツーカーな感じだったんだね。それで、どんなのやろうか、みたいな雑談事でね。始めたのが、だいたいそのぐらいなんです。

――具体化したのはいつ頃から？

湯山　最初は、30分ぐらいで、ということだったんですね。じゃあ、ちょっとイメージビデオ風のね。ドラマよりも、絵的な音楽と絵でシンクロさせて。プロモーション・ビデオってありますよね。あんな形で30分持たせられるだろう、ということで最初話を作ったんですけど。

　最初のイメージは『不思議の国のアリス』だったんです。頭と結末を現実にしておいて、間でいろんな絵的な遊びとか、何が起っても不思議はないというところでやろうとしてたんですけどね。

　それが、2月末ぐらいですか、もうちょっと長くと。それで、45分ぐらいになって。最終的には70分だったんですけど。伸ばすと、ちょっと『不思議の国のアリス』じゃもたないんで……。

――もう少しストーリー性が…。

湯山　じゃあ『オズの魔法使い』だと(笑)。『不思議の国のアリス』は、本当に夢でしたで終わっちゃうんですけど『オズの魔法使い』みたいに、異世界へ行って何かを女の子が得て戻ってくる、というので1本まとめれば、70分はなんとかなるんじゃないかという感じだったんですね。

　ただ、企画の最初の段階で、女の子を主人公にして異世界物にしよう、と決めるまで結構大変だったんですね。というのは、カナメプロのスタッフはクリエーター、特に絵描きのクリエーターが多いんですね。アニメーターの豊増隆寛くんや影山楙倫くん、いのまたさんもそうだしね。だから、わりと絵的なイメージが先行するんですよ。だいたいそういうメンバーで企画やってましたからね。それをどうやって1本のお話に、1本の作品にまとめて行くか、みたいな部分では一番苦労したと思うんですね。

――最初のメンバーというのは、湯山さん、いのまたさん、影山さん、豊増さん……。

湯山　あと、シナリオの武上純希くん。

――それでは、ストーリーラインが固ったのはだいたいいつぐらいでしょう。

湯山　それは、1月ぐらいですね。

――昭和59年の1月ぐらい。

湯山　ええ。女の子が告白しようとしてできなくて、異世界に行ってまた戻ってくるというのは、その時すでにあったんですけど。頭と結末は、とにかくできまして……。

――中味の方は？

湯山　1月の頭ぐらいに、原稿用紙1枚ぐらいに箱書きといいますか、だいたいこういう流れで、みたいなのを僕が作って出したんですね。

――その時には、レダ教とかゼルとか、ああいうキャラクターは全然……。

湯山　いや、ゼルに相当するキャラはありました。だから、大枠はそんなに変わっていないんですね。細部の肉づけとか、話のちょっとしたもってき方なんかは、ずいぶん変わってますけどね。

――シナリオの最終稿ができ上がったのは、いつぐらいですか。

湯山　えーと、いつなのかなあ…。

――夏ぐらいですか。

湯山　そうですね、夏前ぐらいですかね。武上君と話し合って、決定稿のシナリオを起こしたんですね。

――武上さんのアイデアというのは、どのような話なんですか。

湯山　とりあえず、女の子を主人公にした異世界物で、その大まかなのは一応できてたんですけどね。女の子が異世界に入って戻ってくるという。ゼルという敵役みたいなのがいて、という部分ができてましたね。

　武上君と僕とで一番もめたというか迷ったのは、異世界を女の子の夢にするのか、内宇宙として完全に扱うのか、本当に異次元があるとするのかということだったんですね。そこでかなり悩んだんですよね。

　第1稿目が完全な内宇宙物。しかもそれは、マザコンの男の子の内宇宙にしてたんですよ(笑)。そこに女の子が入って行って、男の子のマザコンで閉ざされてた心が、女の子の戦いによって開いていくみたいな、そういうのだったんですよね。

　第2稿目が、今度は逆にまったくSF的に、異世界が現実に存在するものとしてやって行った。それは、男の子と女の子がある程度つきあっている仲という設定でね。遊園地か何かでデートしてて、ミラーハウスから異次元へ入り込んで、男の子がさらわれるんです。それを、女の子が取り返しに行くみたいな。わりとストレートな世界なんですね。

――アドベンチャー物ですね。

湯山　お話としては、2本目のが結構いいんじゃないか、ということだったんですけど。ただ、異世界を現実のものとしてキッチリ描こうとすると、70分というのは中途半端な時間だったんでね。描写しきれないだろうし、ヘタするとダイジェストみたいな感じで終わる可能性があるんですよ。それで、女の子の内宇宙寄りに少し戻して、結果的には両方取れるような二重構造にするのが一番いいんじゃないかという…。

――夢とも現実とも取れるようにですね。

湯山　そうですね。ただ、ドラマとしての構図といいますかね。図式から言うと、女の子の内宇宙なんですね。でも、絵的にはそうしないで、一応異世界が現実にもあるというような描き方でもって行ったんですね。その辺で、70分という時間の中で最大限の効果が出せるんじゃないか、ということでそれが、最終的な決定稿になったんですね。

★ただ一つのよりどころはスタッフの信頼関係！

――作画のクランクインはいつ頃ですか。

湯山　9月ぐらいだったと思いますけどね。今年の1月ぐらいまでかかりましたね。

――70分に対して、約4ヵ月というのは…。

湯山　長いです。それに、準備期間が約8ヶ月近くありますからね。

――70分といいますと、単純計算するとテレビシリーズの約3本分になりますか。

湯山　そうですね。

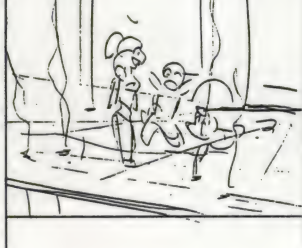
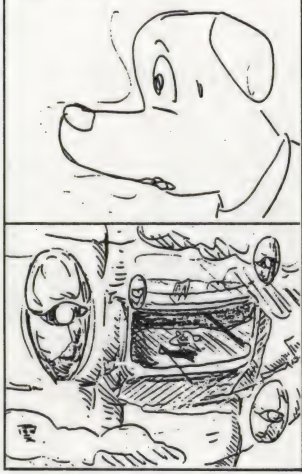
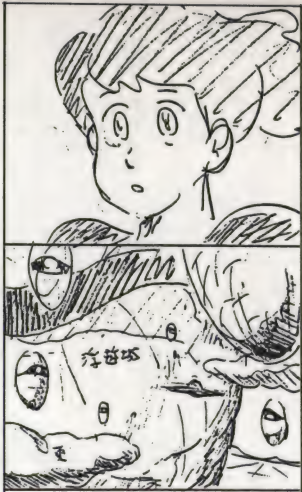
――普通テレビ一本で20分から22分ぐらいのは、作画だけだと2週間ぐらいですか。

湯山　やっぱりひと月かかりますね。ひと月からひと月半。

――じゃあ、だいたい70分で4ヶ月だとあんまり変わらない？

湯山　ただ、作り方によって全然変わってきちゃうんですけどね。『幻夢戦記レダ』の場合は、みんながわりと多めに百カットぐらいづつ受け持って。わりとシーンごとに、きれいに分けられたんでね。絵的なものは、まとまった感じがするね。

――そうすると8班ぐらいあったわけですか。

湯山　そうですね。全部で800

◀絵コンテより
上は初めて浮遊城を見るシーン。
下は、カットされたシーンで、剣球を叩き切った後、　ヨニが「早く逃げましょう、くずれるわ」という場面。

カットぐらいですから。

——イメージ設定ということで、豊増さんの名前がありますが、これはストーリーボードみたいな……。

湯山　豊増君に関して言うと、出てくるものありとあらゆるもの全ての設定を彼が。

——じゃあ、大道具小道具のような…。

湯山　そうです。だから、異世界そのもののイメージというのは、豊増君にまかせたというかね。ある程度、イメージみたいなものを伝えておいて。

——いのまたさんが直接担当されたのはキャラクター？

湯山　ええ。キャラクターですね。

——クランクアップしたのはいつの頃になりますか。

湯山　1月の末ですね。

——ギリチョンもいいところですね(笑)。

湯山　イベントのあとです(笑)。

——で、一番最後に完成したのは？

湯山　それが2月5日ぐらいでした。だから、まるまる企画から数えて、1年ちょっとかかったという、ほとんど大作並のスケジュールですね(笑)。

——相当追われてしんどかった？

湯山　精神的にしんどかったですね。というのは、オリジナル長編をやるのは初めてなんですね。寄りどころになるものが何もないわけですよね。テレビと違いますから。寄りどころになるものは、いのまたさん、豊増くん、影山くんとかとの、それまでの長いつきあいといいますかね。

——信頼関係ですね。

湯山　信頼関係ですね。コミュニケーションが、わりとツーカーで取れるという、その部分だけだったですね。

——そうすると、どんなものが、どこまでのものが出来るか上がってみないとわからない不安感みたいなものもあった？

湯山　というより作品のトータルなでき上がりというのは、最終的には僕とかシナリオの武上君の責任になってきますね。その辺の部分で、どうやってまとめて行くかというのは、なかなかしんどかったですね。絵的な面では、そんなに僕は心配してなかったんですね。スタッフの顔ぶれ見てるとね。
　オリジナルですから、原作のイメージとか原作である程度知ってるとか、そういうのはまったくないんですよね。

——そうですね。

湯山　原作物のテレビシリーズが劇場用になると、オリジナルでもキャラクターの説明いらないでしょ？「ご存知」で済まされるけど『レダ』の場合は全て初めてなんでね。見る方も当然全部初めて見るわけですから。

——全て説明して行って、なおかつ説明調になってはいけない。

湯山　ビデオとしての価値がなくなっちゃいますからね。

——一番最初の、プロモーション・ビデオ的な、眼で見て非常に美しいという、そういう要素はかなり残されていますよね。

湯山　かなり残っていると思いますね。

——拝見して、非常に色調が柔かいという印象を受けたんですが、あれはかなり意識されて？

湯山　今までの宇宙や近未来、メカとかは、わりと冷たい感じがあるんですよね。形も直線的ですし。だから『レダ』のカラーとしては、土の匂いといいますかね。伝説とか、古代のちょっとオドロオドロしい部分も含めてね。何かそういうもので、新しいものができないかな、というものも方法としてはありましたね。
　だから、その辺で例えば、デザインなんかにしても、わりと全体が曲線を主体にしたデザインなんですね。

——そうですね。メカは浮遊城も含めて、全部そうですね。

湯山　その辺が画面に出てきたと思うんですけれども。

——キャラクターもそうなんですけど、全体的に色使いそのものも全部含めて、品がいいという感じが非常にするんですね。描写にしても、刺激的などぎついところがないですね。

湯山　やっぱり中心になったのが、絵を描ける人間がスタッフにいたんで、絵的な部分でかなり気を使ったんだと思いますね。メインキャラクターの色なんかも、影山君とかいのまたさんで決めているしね。絵的なものを相当重視して使っているんですね。その辺もあるのかな、と思います。
　それと、ある程度ビデオ作品みたいなものを意識して。見る側がわりとイメージをふくらませて行けるようなところもかなりあると思うんですよね。

——オリジナル・アニメ・ビデオの水準が『レダ』で確立されたように思います。

湯山　ええ。ようするに、ビデオでしか見れない、アニメならではの世界みたいなのを作りたかったですね。それと、原作物には負けたくなかった、という気持ちがスタッフの中にはあったと思いますよ。

★リンガムはニュートラルなキャラクターにしたかった

——ご自分の満足度としては、完成された作品をごらんになっていかがですか。

湯山　かなりこぼれたものもありますね。

——例えば、どんなものが？

湯山　シナリオの武上君とも話したんですけど、キャラクターの遊びの部分がもうちょっとほしかったな、と思ったんですね。時間的なことがあって苦しかったんですけど。
　本当は、リンガムとヨニとのかけ合いみたいなのを、もっとやりたかったんですよ。

——キャラクター的には、完全にそういうパターンですね。

湯山　例えば、ヨニなんかもね。ヨニは恋愛は全然知らなくて、みたいな。それと陽子との対比みたいなものを、もっと出したかったんですね。

——それだけでもあと10分ぐらい必要ですね。

湯山　あと10分ぐらいあるとね。またずいぶん違ってくると思いますけどね。

——だから、攻撃ポッドが発進するあたりから、かなり駆け足の感じが…。

湯山　そうですね。

——あれまでは、かなり劇場用みたいなペースの進み方だったんですけど。

湯山　それでもかなり、はしょっているんですよね。

——しかし、あと5分か10分あるといいなあ、と思ったんですけど。

湯山　コンテの第1稿は80分ぐらいあったんです(笑)。だから、3シーンぐらいはまるまる切っているんですね、実は。

——それは、時間的な問題で。

湯山　まったく入らない。具体的には、レダのハートというものがどういうものか、みたいな部分がもうちょっとあった。そこで陽子とヨニの対比とか、リンガムとヨニとのかけ合いみたいなものをちょっと入れてたんですけどね。その辺も、全部切っちゃいましたね。

——その辺で、唐突に向うが攻撃して来た、みたいな印象が出てたんでしょうか。神殿に入ったあと、陽子たちが何をしていたのか、わからないような部分もありますから。

湯山　実は、あそこでご飯を食べたり、いろんなキャラクターの遊びの部分を入れたかったんですけどね。

——脚本の方では、リンガムがアシャンティ最高の神学者ということでしたが、それは抜けていますね。

湯山　あれは、僕と武上くんとの激しい争いがありましてね(笑)。それは武上くんの第1稿がそうだったんですよ。神官のリンガムと巫女のヨニが一緒にいて、そこに陽子がやってくるという、そのイメージがずっと残っていたんだと思いますね。ただ、僕としては、野良犬にしたかったんですね。というのは、それぞ

れのキャラクターがわりと世界の中で役割がキチッと決まっちゃっているんですね。誰か一人、ニュートラルといいますか、自由なキャラクターを入れといた方が広がりが出るんじゃないか、と思ったんです。リンガムもその関係にしちゃうと、全員が…。

——レダの関係者に…。

湯山　入ってきちゃうからね。

——やっぱり、ジョーカーみたいなものがないとだめだと？

湯山　そうですね。ニュートラルの部分がほしかったということですね。

——これも脚本との違いなんですが、肉食植物に陽子がのみ込まれて、そのあと…。

湯山　ピアノ曲に守られてですね。

——半裸になって出てきて、延々・と戦って神殿にたどり着いて、やっと鎧を着るようになるというのが脚本ですが。あれは、絵的にかわいそうだということでもないわけですか？　あそこで変身してもいいとは思うんですけど……。

湯山　結局段取りが多すぎちゃうということですね。というのは、戦士になって更にレダの鎧が出てきますね。で、あそこで固まっちゃうんですね。あそこは確かにものすごく悩んだ部分なんですよ。

　演出サイドとしては、ある程度女の子の夢なんだ、という風にわり切って作ったんで。だったら、わけもなく戦士になっちゃうと(笑)。それで、戦士になった証といいますかね。それを陽子が納得するキッカケを、「レダの鎧」にしたかったんですよ。

——戦士になってなおかつ鎧というとちょっと……。

湯山　ということだと思うんですね。

——段取り芝居みたいだと？

湯山　段取りというか、つながっちゃうんだね。いわゆる普通の異世界物だと、だいたい「剣」なんですけど。戦士の証の剣を取ってきますよね。そうすると時間かかりますね。その「剣」に相当するのが「レダの翼」である、という風にしたかったんですね。行ってみたら剣が——この場合ロボットですけど——があって、だったらやってみようみたいなことに持って行けるんじゃないかと思ったんですね。

　だから、心理的なキッカケとしてあれを使いたかったんで。それと、戦士になったあとのリアクションというか、間がほしいんですよね。

——それと、テレビでいうところの、シャワーシーンとかパンチラに相当するシーンがほとんどなかったですね。普通、アニメ・ファンが期待するところなんですが(笑)。それは、かなり意識されてやったというわけではないんですか？

湯山　ないですね(笑)。話にそって…。

——やっているうちにそうなったという…。

湯山　ええ。

——やはり、女の子の夢だから、ということでそうなるような気はするんですけど。作品の解釈としては、夢落ちでよろしいんですか。二重構造とおっしゃいましたけど。

湯山　全体が二重構造になっているんで、言ってみれば夢落ちになるんですかね。

★陽子とゼルは光と影

——ゼルのキャラクターが、非常にもったいないという気がしますが。

湯山　ゼルに関して言うと、陽子とゼルは光と影なんですね。二人は同じことをしようとしてるんです。作品全体のテーマとして、一歩踏み出す勇気みたいなものが出れば、と思ってたんですよ。

　女の子にしてみれば、思い切って告白しちゃうということですよね。それが、ある意味で次元を超えるという、そのイメージと全体をダブらせたかったんですね。

　だから、ゼルにしてみれば、ノアへの想いを告白するというのが逆に、ノアの方へ進攻してくることなんですね。そんなわけで、ゼルと陽子は、ある意味では同じタイプの人間…。

——トランプの裏表みたいな…。

湯山　と考えていたんですね。その方法の問題なんですね。それが、陽子とゼルがどこかで分かれたのか、その辺の喰い違いみたいのが、最後の幻夢シーンのわけです。

　ゼルに与えられた夢の中というのは、結果だけ与えられているんですね。でも、それではしようがないわけです。全ては陽子が、好きだと想いを持ったことから始まるんだ、みたいなことが大事で、結果だけでは意味がないんですね。

——男の子と仲よくなって、つき合っていると……。

湯山　ええ。肝心のそうなるための、陽子の想いみたいなのがスッポリ抜け落ちているんですね。それで、陽子は拒否すると。ゼルのやろうとしているのはようするに…。

——過程を抜いて、結果だけを…。

湯山　結果だけつかまえようとしていると。その辺の喰い違いみたいなところで…。

——「なぜ夢から逃げる!?」というセリフがありましたけど、その辺がそうなんですね。

湯山　だから、全体のテーマというんですか、大きいテーマはその辺に持ってったんですけどね。

——ゼルは、アシャンティを自分では救おうとしていると思うんですが、住民というのは、まだどこかに…。

湯山　いるんです。

——いるんですか。ヒューマノイドとか動物達だけじゃなくて(笑)。

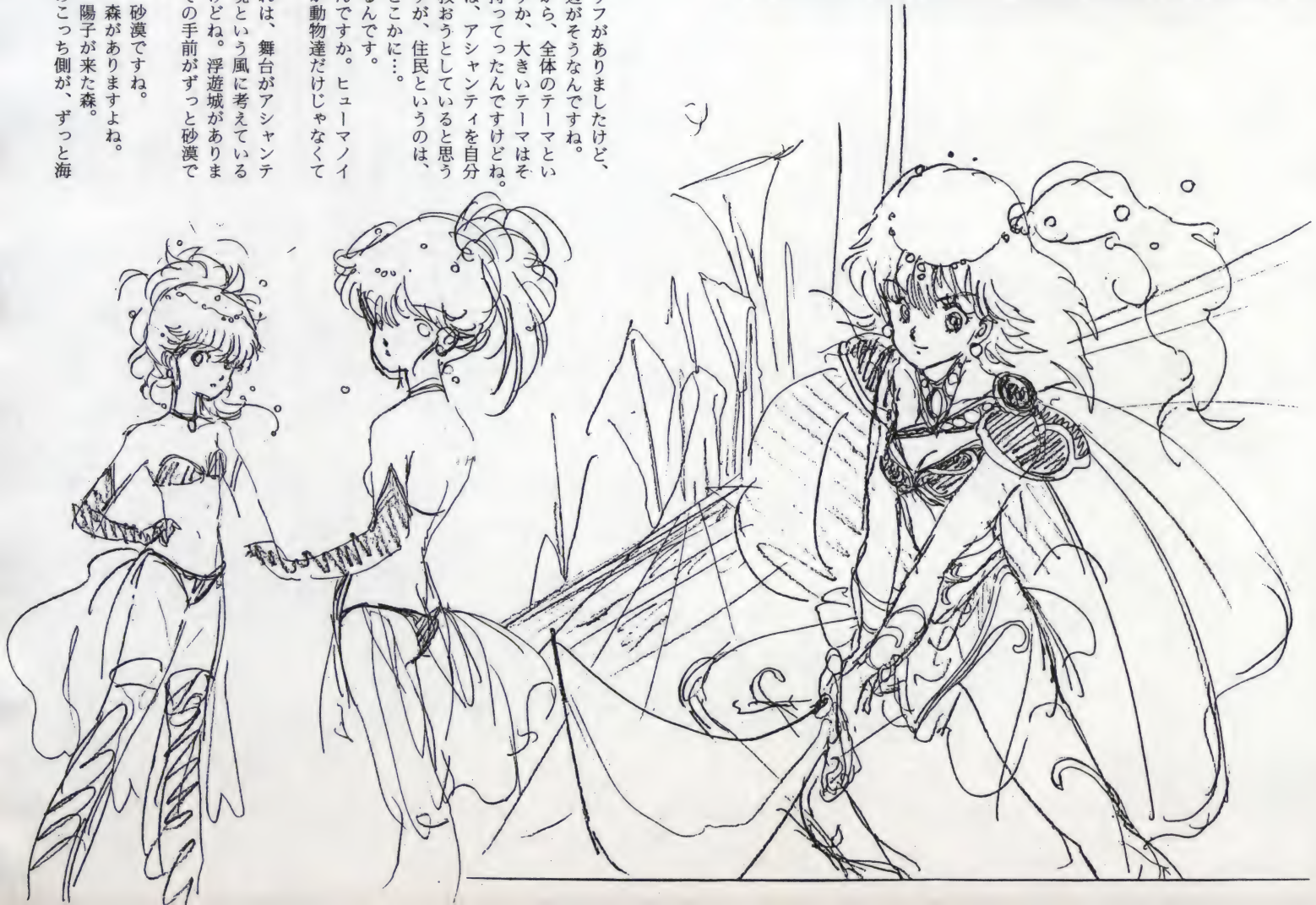
湯山　あれは、舞台がアシャンティの辺境という風に考えているんですけどね。浮遊城がありまして、その手前がずっと砂漠ですよね。

——ええ。砂漠ですね。

湯山　で、森がありますよね。

——ええ。陽子が来た森。

湯山　森のこっち側が、ずっと海

初期設定　陽子&ゼル

岸になっているんですよ。そこに村が点在していると。
——都市じゃなくて、村単位。
湯山　そうですね。
——設定的にはかなりふくらむ話なんで、もっと見たかったという部分はあると思いますよ。
湯山　その辺は「レダII」で(笑)。
——民衆が出て来ないと、ゼルの言ってることは空念仏になるみたいな気もするんですけど。
湯山　そこがさっき言った、女の子の内宇宙としてまとめるか…。
——異世界物として、ヒロイックファンタジーとしてまとめるのか。
湯山　結局、最終的には時間の問題もあるんですよね。だから、レダ教徒という、一つの枠の中の争いという風にまとめたんですね。それが、村人とか出すとそれでおさまらずに、世界全体の戦いになってきますね。
——レダの女神のことも、もっと描かなければならないと。
湯山　そうすると、すんなり終われないんですよ。戦いが終わったあと、村人達がどうなったとか、そこまで描写しないと。たぶん、出したら出したで喰い足りなくなると思うんですね。
——テーマ的なことでは『魔法のプリンセス ミンキーモモ』でも最後の方で、夢に対する意識と現実に対する意識が非常に…。
湯山　夢が夢で終わっちゃうんじゃつまらないみたいな。最終的に現実に帰って、現実の中で夢を追って行くという、そういうのはテーマとしてありましたね。『ミンキーモモ』は首藤剛志さんの世界なんですが、僕と首藤さんはわりと似たところがあるんです。で、首藤さんが「レダ」を見て「僕と似たような世界だなあ」とか(笑)。

★「レダのハート」のネーミングで全てできた!

——そのテーマの最高の小道具が、ヘッドフォーンステレオですね。最後に陽子が、テープを聴きながら向うへ行こうとするけれど、首を振ってヘッドフォーンをはずしてから行くという、あそこで、完全に女の子が成長したということだと思うんですが。今の若い人がヘッドフォーンつけて、周囲を断絶しちゃいますね。自閉症とかよく言われますけど、そういう部分に対する批判みたいな考えもちょっと入っているんですか。
湯山　陽子は明らかに自閉症です(笑)。最初のシーンは、現実の描写がほとんどないんですね。で、背景をもうちょっとイメージっぽくしたかったんですけども。イメージ的な、かすんだような……。
　ようするに、陽子の一人称になっているんですね。全ては陽子の「見た目」なんですよ。
——陽子の主観の世界というか…。
湯山　そうそう、主観の世界で入っているんですね。
——何か、非常にソフトトーンの。
湯山　多分、ああいう子の見た目というのはああなんじゃないかと。全体がかすんでて、逆に内面の内宇宙の異世界というのは、細かい部分までハッキリ見えている。
——ええ。外に比べて異様にくっきりしているというか。
湯山　意外と、頭の中の夢の世界の方がくっきりとしているんじゃないか、という気がしたんですね。だから、ラストで並木道に戻ってくるとこは、並木道はくっきり描いていますよね。世界がハッキリ見えてきたということなんです。
　「ウォークマン」に関して言うと、アイディアとしては「ラ・ブーム」…。
——ええ。ありますね。ソフィ・マルソーが主演の。
湯山　あれで、ダンスシーンがありまして、みんなが踊っていて、男の子がヘッドフォーンを女の子にスッとかけると…。
——で、二人で踊りだすんですね。あのイメージですか。
湯山　あの瞬間に、女の子の視界にポーンと男の子が入っちゃうんですね。あれがすごい好きでね。それで、ヘッドフォーンというのは使えるんじゃないかと思ったんですね。
　あれ以来、まだ小道具として使っている作品は、あまりないんでね。これはイケるんじゃないかと思って使ってみたんですね。
——そこから逆算して「レダのハート」というのが出てきたんですか？　メロディを使うというのは。
湯山　いや、それは最初からありました。30分ということだったんで、これは音楽とシンクロさせてまとめるしかないと思った。ただ、困ったのはネームなんですよ。「ウォークマン」というのは…。
——商品名なんですね。
湯山　商品名なんです。名前使えないんですよね。ヘッドフォーンステレオと言ってたけど、ピンとこないんです。だから、「レダのハート」というネーミングができた瞬間、全てがバーッと通ったんですね「レダのハート」なんだと。あのネーミングで、全てできた!(笑)
——非常によくわかります。
湯山　これが、コンテの最終稿あたりでやっとできたんですよね。そうすると、あれが浮遊城を動かすというイメージが出てきましたし。そこから逆に、陽子が玉の中で丸くなって音楽を聴きながら動かして行くという、そういうイメージがぐっとふくらんできたんでね。
——あれも完全にうずくまって胎児みたいな感じで、自閉症の行き詰まりですね。音楽の方は、聴かれていかがでしたか。
湯山　僕はイメージ通りだったんですよ。
——ジョン・ウイリアムス調という注文を出されたとか(笑)。
湯山　こういう異世界の話なんでね。シンセサイザーとかチャカポコしたのは合わないだろうと。で、ちょっと厚みのあるハデなのがほしかったんですね。
——枯れ葉が陽子の足元に落ちるシーンなんかは、絵が音楽に同調しているように見えるんですね。それで、鷺巣詩郎さんに「音を先に作られたんですか」とお聞きしたら、「いや、そういう風に見えるように作ってもらっただけです」と(笑)。
湯山　あれはプレスコでもないのにピッタリ合いましたね。枯れ葉のところは、うまくシンクロしたんですよ。

――プレスコではないんですか。

湯山　いや、大きくは合わしてもらったんですよ。枯れ葉が落ちるところでピアノ曲が乱れるというのは作ったんですけど。別にスポッティングしたわけじゃなかったのね。あれはビックリしましたけど(笑)。編集で、ある程度細かいところはやったんですが。

――どの辺のシーンの音楽が気に入られてますか。

湯山　レダの翼の発進のシーンとかが気持ち良かったですね、『スター・ウォーズ』風の。景気良く盛り上げるのと、ちょっと変調して不安感を、というのはわりと交互に出てきますね。変型するところで盛り上がって、敵が来るところで変調して不安な感じになったりとか。気持ち良く合っていたね。

――枚数はたくさん使ってました？

湯山　そんなんでもないと思う。普通なんじゃないですかね。ただ、作画の人がかなりうまかったですね、あそこは。

――あれはどなたが？

湯山　大阪の毛利和昭さんという人なんですよ。そんなに名前の知られた人じゃないけど、かなりあの人で『レダ』のグレードが上がったんじゃないかと思いますね。20歳から25歳ぐらいの、若手のパワーみたいのが画面に出たんじゃないですかね。

★池田秀一さんの声には思わず背筋がゾクゾク！

――声のキャスティングの方なんですが、決められたのはどんな形で？

湯山　音響監督の松浦典良さんが、候補何人かにオーディションテープ録ってもらって、それをみんなで聞きながら決めたんですね。

――陽子役を、鶴ひろみさんに決定したのはどういうことで？

湯山　陽子はかなり幅のある役なんですね。やりづらかったろうな、と思うのは、最初ああいう風に始まるでしょ？　そして、途中から「エイ！」なんてやっちゃうわけでね。その辺の落差がわりと大きかったんですよ、オーディションテープでは。しっとりとしたところは、わりとしっとりとして、弾むところはわりと明るくポーンと抜けてたんですね。それで鶴さんが。

――ヨニ役の坂本千夏さんは、絵を見てすぐ決まるような感じですね(笑)。

湯山　いや、結構難行したんですよ。初め、千夏さんは『らんぽう』とかあっちのイメージしかなくて、ちょっとやりすぎるんじゃないだろうかと(笑)。キャラクターが少ないんで、陽子との対比をかなり強く打ち出さないとまずいんでね。あまりカワイ子ちゃんぽい声だと、陽子とダブっちゃうんですね。

――そうですね。

湯山　だから、かなりパンチのある人がいいんじゃないか、ということで。ピッタリでしたね。非常にいい感じで上がってました。

――リンガム役の富山敬さんが非常に意外な。

湯山　逆にすんなり決まったんですよ(笑)。というか、リンガムに関しては、うまい方なら誰がやってもそれなりのリンガムになって行くだろう、と思って。ただ、富山さんには本当に申し訳なかったのは、アフレコで絵がついてなかったんですよ。絵がかなり入ってなくて。セルって重ねてありますね。線撮りだと陽子とかヨニは写るでしょ？　リンガムはたまに写らなかったりするんですね(笑)。

――しかも犬の口だから、絵がハッキリしてないと非常にタイミングがむずかしい。

湯山　ましてああいうキャラクターですからね。だから、アドリブとかなんとかは絵がついてないと非常にやりにくかったと思うんですね。その辺で、もうちょっと芝居が強くてもよかったかな、という気はしてたんですけどね。ゴチャゴチャとリンガムが動いているところで、富山さんの方から聞いてきて、「じゃあ、こういう風にやります」みたいな。自分から進んでやっていただいたんでね。大変申し訳なかったんですね。「実はこうなりますから」と一生懸命、説明してね(笑)。

――録音の時に…。

湯山　ええ。見ただけではわかんないから、中に入ってスクリーンの前でタイミングを身振り手振りで(笑)。

リンガムに関しては、しかも唯一遊びのできるキャラクターということで設定してたんで、絵が入っていればアドリブとかもっと入れられたはずなんですけどね。その辺がちょっともったいなかったなあという……。

――ゼルの池田秀一さんは、すんなり？　そうでもなかったんですか。

湯山　わりとすんなり、でしたね。画面と向って立ち向ってくるような太い感じの声でないと持たないということで、池田さんに決まったんですね。

――画面拝見してまして、非常にそらぞらしいセリフをいうところが、実にうまい。心にもないセリフを言うところが(笑)。

湯山　聞きながら思わず、背筋がゾクゾクしました(笑)。

――絵と声が非常に合ってましたね。

湯山　松浦さんは、キャスティングが非常にうまい人で『戦国魔神ゴーショーグン』なんかもそうだったんだけど。

――『プラレス3四郎』もそうでしたね。

湯山　そうですね。ええ。

――松浦さんとのおつき合いは『ゴーショーグン』からですか。

湯山　『ゴーショーグン』からですね。かなり古くからですね。あと、音楽にかなり神経使って、声をつける方なんですね。

――選曲みたいなものは、録音監督の担当になるわけですか。

湯山　メニューは松浦さんが出します。それを僕が見て、一緒に……。

――そういう形になっているんですか。

湯山　ええ。ただ、ピアノ曲の部分と、歌の部分なんか先に決まってますけどね。

――歌はいかがでした？　私はシングルカットしてない『行方不明のハートたち』が、一番好きなんですが。

湯山　僕もそうなんです(笑)。一番覚えやすいですよね。

――ええ。だから、あれがちょっとテーマソングみたいな感じですよね。位置的にもタイトルのあとに出ますから。

湯山　というかテーマですね。他の2曲は、シングル用ということがあったんで、多少そっち向けに。1曲目は逆にBGM寄りに作ってもらったんですよね。それで、ちょっとメロディとか編曲が、異世界風の前流行った「異邦人」ですか…。

――ええ。あのムードですね。

湯山　あのムードでやってもらったんです。

★『レダ』は仲間の何年間かの集大成！

――演出をなさっていらして、影響を受けられたのは、どんなものがありますか。

湯山　やっぱり、アニメーションというものを始めたのが20歳過ぎですからね。演出的には、その頃観てた映画とかの影響が強いですね。

――実写では、どういうのがお好きで、印象に残っていますか。

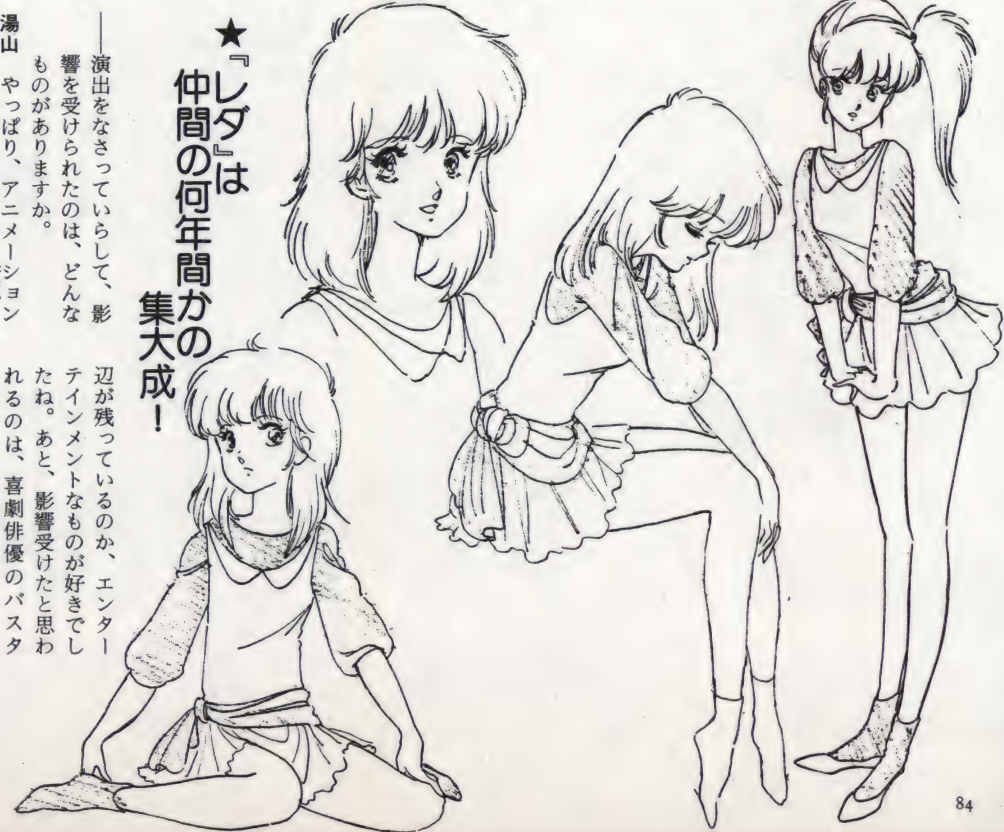
湯山　わりと何でも見る方なんですけどね。B級映画っぽいものが好きなんですよね。ヒッチコックとかね。もちろんスピルバーグもね。結局20歳から23、24歳ぐらいまでわりと観てました。お金なかったけど、暇はありましたね(笑)。

僕にとって、映画がわりと暇つぶしだったんですよね。その辺が残っているのか、エンターテインメントなものが好きでしたね。あと、影響受けたと思われるのは、喜劇俳優のバスター・キートンですね。

――キートンのは、どれがお好きですか。

湯山　後期のものよりは、最初の頃のが全部好きですね。『レダ』のファーストシーンは実をいいますと、キートンの『セブンチャンス』から来てるんですよ。

――『セブンチャンス』というと、最後のシーンの大岩が落ちてくる中を走るというのを、車のCMでもちょっと使っていますね。

湯山　ええ。あの作品のファーストシーンのイメージがありましたね。無声映画だからBGMが

ピアノ曲だけなんですよね。そのイメージもちょっとあって……。

――ちょうどあの頃『ハロー！キートン』とか『ビバ！チャップリン』とか。

湯山 全部見ましたね、あれは。有楽町で。

――ハロルド・ロイドもやってましたね。

湯山 ロイドも面白いですね。わりと好きなのがね、日常的な、何でもないところから始まって、それが徐々に異物が入ってきて、とんでもないことになって行くという。あのパターンが一番好きですね。

――いわゆるシチュエーション・コメディなんかがだいぶ…。

湯山 好きですね。ニール・サイモンのとか、『フォロー・ミー』とか…。

――真面目にやろうとすればするほど、違う方に行っちゃうみたいな。テレビの方で30分ぐらいだと、シチュエーション・コメディみたいのは、やりやすいですか。

湯山 シチュエーション・コメディは、脚本(ホン)が大変なんですよ。だから、ライターに頼むんですけど、なかなかやってくれないですね。かなりむずかしいんですよ。今のテレビシリーズのペースだとね。

――ふくらますのが一番重要なんですね。

湯山 ふくらましと、組んで行くのがね。全部がからまって行かないと、どうしようもないでしょう。だから、非常にむずかしいんですね。

――『レダ』はカナメプロで作られたわけですが、どんな感じのプロダクションか、お聞かせ下さい。

湯山 文化祭の延長みたいなところがありますね。わりと和気あいあいというか、上下の分け隔てはほとんどないですね。全員若いスタッフの会社なんで、逆に進行の意見を取り入れたりとか。

――この前伺ったんですけど、わりとみなさん年齢が近いみたいですね。

湯山 だから『レダ』やっていると、僕なんかが一番年齢が上になっちゃうんですね。こっちは、まだ新人のつもりでいるとね、だめなんですね(笑)。

――例の『うる星やつら2ビューティフル・ドリーマー』のあの文化祭前夜の感じ？(笑)

湯山 そうですね。あんな感じですね。それと、クリエーターというか、物作りをする人間がわりと集まっているということですね。

――わりと自由な…。

湯山 ええ。梁山泊(りょうざんぱく)みたいなものですね(笑)。『レダ』をおやりになって、テレビシリーズをやる上でも、また何かオリジナルをやる上でも、自信ができたみたいな…。

湯山 それはありますね。企画の段階で、かなりとことん詰めることができたんでね。やる時、とにかくわからなかったのが70分って、どういう時間かということでした。

――感覚的に？

湯山 感覚的にわかんなかったですね。単純計算で言うと、テレビシリーズの3本分なんですけど、違うんですね。話が、20分物の10分と70分物の10分では、全然比率が違うのね。その辺の長編のノウハウみたいなのが、かなり『レダ』でつかめたんじゃないかと思いますね。

――製作のノウハウにしてもテレビと違うということは、大げさかも知れませんが、オリジナルビデオは作家性を試されるようなところもあると思いますが。

湯山 だから、やってて最初は、これはいいな、と思ってたんですけど。だんだん恐ろしくなって来たのは、言い訳の持って行きようがないんですね(笑)。最終的に全ての責任は、作り手達が負うということなんです。それだけにやりがいはあるんですけれど…。

――何か試されているという感じが。

湯山 そうですね。ありましたね、最初は。それを痛感したのが、テレビのノウハウがまったく使えないということですね。特に全体の構成においては、まったく……。

――テレビとビデオの、見る側の反応の違いみたいなものは感じられますか。

湯山 テレビももちろん見て楽しんでもらって、受けたりすると嬉しいですよ。その辺は、ビデオはもっとダイレクトなんですね。それだけの人がやっぱり買ってくれたんだな、というのがピンとくるんだね。

――それこそ視聴率よりよっぽどシビアな…。

湯山 シビアですね。

――『レダ』への思い入れみたいなものはいかがですか。

湯山 『レダ』というのは、わりと僕自身とか、いのまたさんとか葦プロ時代からの何年間のつきあいのひとつの集大成の気持ちで作ったんですね。

――このあと『ゴーショーグン』『ミンキーモモ』とオリジナル・ビデオが続きますが…。

湯山 どんどんやって行きたいですね。

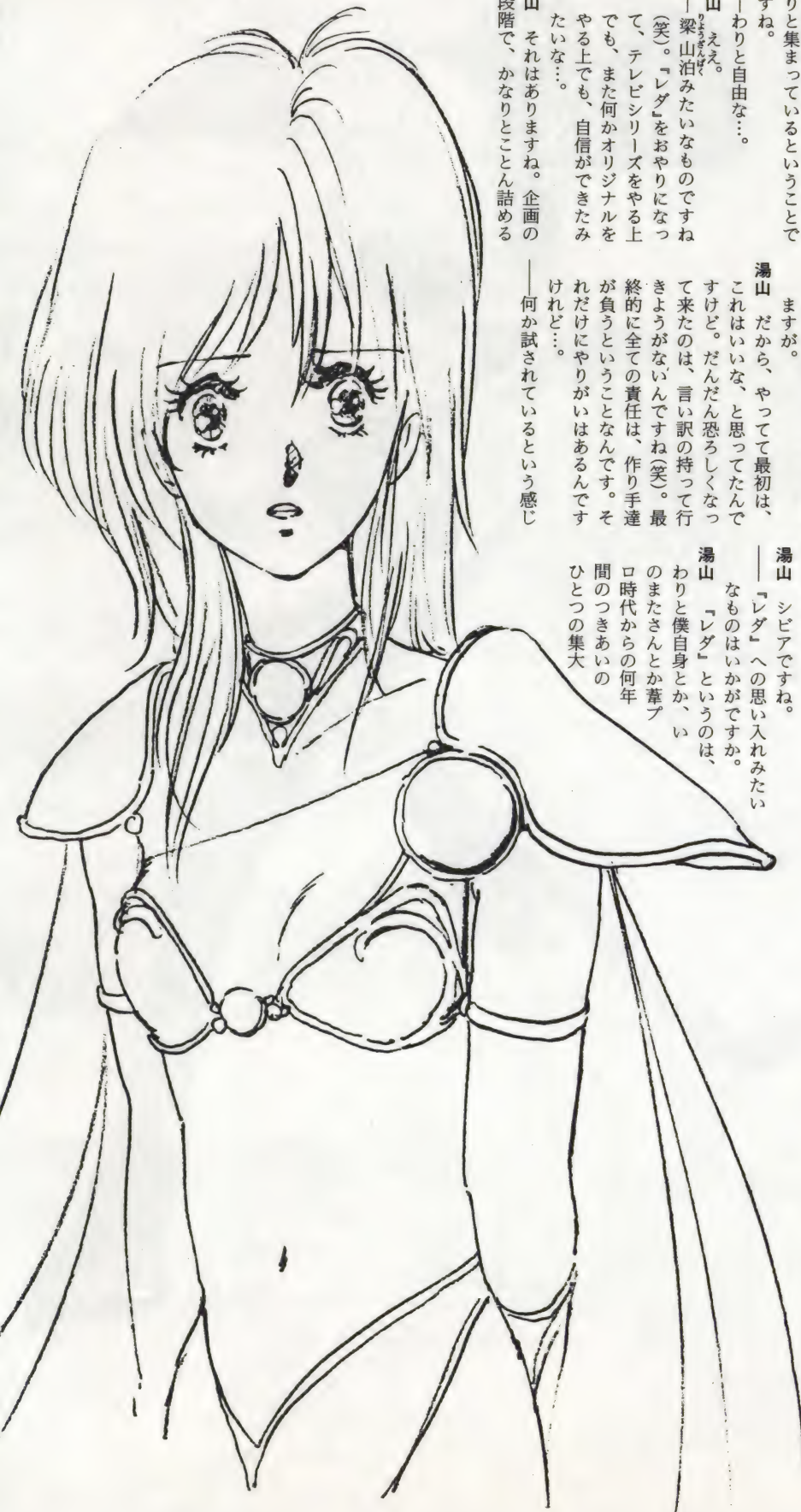
――企画的にはどんなものを？

湯山 今はちょっと白紙なんですが。ただ、主役がずっと女の子が続くので、単純に言うと、男の子の主役で(笑)冒険物でもやりたいという気持ちはあるんですけどね。

――実現されるのを期待しています。本日はお忙しい中ありがとうございました。

■プロフィール■

10月15日，東京生まれ。『鉄腕アトム』『あしたのジョー』『ムーミン』などを見て育ち，石森章太郎に傾倒して，一時期はマンガ家を志した。知人の誘いでアニメ業界に入り，「1万円稼ぐのに，普通の仕事を2時間やるより，アニメを4時間やった方がいい」と，以後，この道ひと筋。アニメーターとして初めてタイトルが出たのは『一発貫太くん』。『宇宙戦艦ヤマト』第1シリーズのほとんどに参加した後，葦プロに入社。初演出は『銀河鉄道999』の第3話『ガラスのクレア』。このあと，『くじらのホセフィーノ』『ずっこけナイト ドンデラマンチャ』『戦国魔神ゴーショーグン』などを演出。劇場版『戦国魔神ゴーショーグン』の監督，『魔法のプリンセス ミンキーモモ』『プラレス3四郎』のチーフ・ディレクターをつとめる。オリジナル・ビデオは『幻夢戦記レダ』が初めてで，続けて『戦国魔神ゴーショーグン 時の異邦人』『魔法のプリンセス ミンキーモモ 夢の中の輪舞』を演出する。

妻子有り。現在，フリー。

“陽子と似てる私は、暗かったのかしら？”

as Yohko 朝霧陽子／鶴ひろみ

♥池田さんのゼルに惚れてしまいそう……

——陽子役のオーディションがあったそうですが、いつ頃、どういう形式だったのですか。

鶴　去年の6月11日ですね。冒頭のナレーションの部分を読みました。

——一番難しいところですね。

鶴　そうなんですよ。私、「イチネン、ゴカゲツ……」というところが言えなくて(笑)。かなり苦労したんですけど。本番の時も、「一年五ヶ月」でひっかかりましたね。何度もやったんですが、モノローグからというのが、かなり難しかったですねえ。

——本番はいつだったんですか。

鶴　12月の23日と24日です。一日目には全員がそろって、二日目は坂本千夏ちゃんが「抜き」で、私と富山敬さん、池田秀一さん、辻村真人さんの4人だけで、普通だと15人ぐらいで、ワイワイ言いながらなんですけど。何かヒッソリと淋しく4人でね(笑)。

——どこが一番、難しかったですか。

鶴　ええと……全部(笑)。私、無器用だから、普通の女の子ってやりにくいんですよね。何かこう、メチャメチャな特徴があれば、やりやすいんですけど。陽子というのは全く普通の女子高生だから……ウーン、わかんない。

——録音監督の松浦典良さんからは、厳しい注文が？

鶴　かなり、ありましたよ(笑)。やはり、冒頭のところで注意されました。

——冒頭でつまづくというのは、かなりのプレッシャーになるんじゃないですか。

鶴　そうです、もう……私、A型だから、そのうち開き直っちゃうんですけどね、「しょうがない！」と(笑)。

——完成した作品を拝見しますと、戦士に変身してからあとの声がパワフルな感じになってますが、おとなしい時よりも、やりやすかったですか。

鶴　うーん、今回、やりやすいところってなかったんですけど(笑)。かなり自分でも力が入ってたんで、どこかで抜かなきゃいけないなって思ったんですが……。何か、変に肩に力が入ってたと思うんですよね。

——力が入ると、演技的にはどうなるんでしょう？

鶴　一本調子になっちゃうんです。

——それは自分でコントロールするしかないわけですね？

鶴　そうですねえ。だからアテレコが終ってから、「ああ、もう一度やりたいなあ」と思ったし、イベントの時に色んな所をまわって、フィルムをその度に見ていて、反省点ばかりでね……。あと、アテレコの時にかなり絵が入ってなくて、戦闘シーンだとかにアドリブが入れられないんですよね。さっきも言いましたけど、私、無器用だから、絵コンテを見せていただいて、ここのシロミはこうだとか説明されても、その場に立ってね、スクリーン見て白いとね、声が出てこないんです、私(笑)。

——やはり、絵がないと、アドリブをするにも、その振幅みたいなのが……。

鶴　そうですね、やっぱり、それが一番残念でしたね。

——逆に、御自分で一番、上手く出来たと思われるところは？

鶴　クフフフフ(とカワイイ笑い)、無いんじゃないですか。でも、がんばりましたから。全部(笑)。

——陽子の、ああいう「言いたいけど口に出せない」という初恋の心理はいかがですか。湯山邦彦監督は「自閉症だ」と、おっしゃってますけど。

鶴　んー、そうですかあ。暗いとは思いませんでしたね。普通、明るい子でも、あれくらいの年令の時って、ああいう部分がありますから……。

——その意味では陽子に感情移入できる？

鶴　そうですね。わりと、自分の高校時代の時に似ているかな、という感じはありますから。その回想のところで、男の子を見るとか……ああいうほのかな想いなんか、一応、私にもありましたから……(笑)。

——その辺を、もっと詳しく。

鶴　(笑)。

——千夏さんとは、初めてではないですね。

鶴　ええ、『忍者マン一平』で私がアゲハをやった時に、千夏ちゃんが根来という役で。あの頃は、私も青二に入ったばかりで、千夏ちゃんも初めての

陽子初期設定

■プロフィール■

3月29日、北海道に生まれる。横浜育ち。小学2年生の時に「劇団ひまわり」に入団。『ケンちゃんトコちゃん』『コメットさん』『右門捕物帳』『美しきチャレンジャー』『黒木太郎の愛と冒険』などに出演し，『ペリーヌ物語』からアニメのアテレコを始める。主な出演作は『おはよう！　スパンク』(キャット)『超時空要塞マクロス』(キム)『みゆき』(鹿島みゆき)『ザ・かぼちゃワイン』(神崎)『森のトントたち』(エリサ)『ストップ!!　ひばりくん！』(理絵)『光速電神アルベガス』(水木ほたる)『愛の戦士レインボーマン』(大宮陽子)『タッチ』(左知子)など。『ラジオ・アニメック』『ラジオ・マクロス』でＤＪを担当。「メロッチックな恋だから」(『ひばりくん』)「ネコに恋した変な犬」(『スパンク』・つかせのりことデュエット)など歌でも活躍。現在，青二プロ所属。

HIROMI TSURU

レギュラーじゃないかな? 年も同じですし、当時は二人とも横浜に住んでましたから、仲良くなって。

——富山さんとは?

鶴 敬さんも、私が青二に入ってすぐにやらしていただいた映画の『わが青春のアルカディア』というので御一緒しまして。私がミラという役で……。

——富山さんが大山トチローですね。

鶴 ええ、その時にイベントなんかで回ったりしましたから。『みゆき』の時も、富山さん、私のお父さん役だったんです。

——あ、「二枚刃の安次郎」ですね。ちょっとエッチな刑事の(笑)。

鶴 そうです(笑)。池田さんも『アルカディア』で、ゾルという役をおやりになってましたから。

——すると、わりと家族的な雰囲気で、ただ役柄だけが難しかった、と?

鶴 はい、かなりのプレッシャーで(笑)。

——千夏さんとの掛け合いは、どうでした?

鶴 女性のキャラが私と千夏ちゃんの二人だけで、お互いに相手を食っちゃいけないと思いました。

——池田さんのゼルは?

鶴 ステキですねえ!

——湯山監督は「背筋が寒くなった」と言われますけど。

鶴 そうなんですよ、もうホント、最高! 惚れてしまいそうな……(笑)。

——完成した作品をご覧になっていかがでした?

鶴 アテレコの時は「あらー、絵が止まってる!?」とかね(笑)。すごく心配になっちゃったんですけど、まだ作業中というので、「完成したら楽しみだなあ」と思ってたんです。結局、最後の福岡のイベントの時に見て、カンドーしました。隣りに豊増隆寛さんがいらしたものですから、「キレイですねえ、ウワァーッ!」って(笑)。私、他のアニメと比較することってわからないし出来ないんですけど、やっぱり『レダ』は丁寧だなと思うし、好きですね。

——声優歴としておうかがいしたいんですが、デビューが『ペリーヌ物語』ですね。

鶴 そうです。

——デビュー作で主役というと、プレッシャーが……。

鶴 ええ、アテレコのことも知りませんでしたから、どういう風にやっていいか、わからなくて。

——一年の長丁場ですからね。お母さん役の池田昌子さんとは、前半はずっと掛け合いがあって……。

鶴 そうです、もう憧れの方でね。私、主役が決まった時に池田さんがお母さんと聞いて、とてもうれしくて。池田さんがやってらっしゃるのを見て、

私、声の世界に興味を持ったんです。

——どんな作品をご覧になったんですか。

鶴 オードリー・ヘップバーンの吹き替えですね。

——『ローマの休日』や『麗しのサブリナ』などですね。で、一年間通されて終了した時の感想は?

鶴 ……(ため息と苦笑)。

——当時のお名前は「鶴ひろみ」になってましたね。

鶴 雨カンムリが付くのが本名なんです。私は当時、「劇団ひまわり」にいたんですけど、フジテレビさんから「ひまわり」の方に電話がありましてね。「活字がないから名前を変えてくれ」って言われて(笑)。それで仕方ないから、簡単な「鶴」にしよう、と。

——ペリーヌも『みゆき』の鹿島みゆきも、すごい優等生の役ですよね。反対に、『光速電神アルベガス』の水木ほたるとか『超時空要塞マクロス』のキムの方は、ちょっと元気な女の子。単純に分けると二通りの役柄がありますが、どちらがやりやすいですか。

鶴 元気のいい方!

——優等生の方のイメージが強いような気がするんですけど……。

鶴 あー、ダメなんですよ、ああいう風のって。何か性格的に合ってないんじゃないか、と思うんですけど(笑)。やっていても、なんか欲求不満になっちゃうんですよね、発散できないというか。いい子ちゃんの役でしょ、自分にそういうところがないですから(笑)。やっぱり、こう「ワッ!」と出せる部分があった方が好き。

——すると『GU-GU ガンモ』の紀子先生みたいな方が?

鶴 そうですね。でも、今までやった中で、一番やりやすかったのは、『アルベガス』のほたるですね。

——男の子をアテたのは『プラレス3四郎』のマシュ・ミスティだけですか。

鶴 あとは『パーマン』のマジメくんっていう、準レギュラー。他には、ないですね。

——男の子の声は難しい?

鶴 難しいことはないですけど、あんまり得意ではないです(笑)。

——池田昌子さんを目指すとなると、方向的には鹿島みゆきになってしまいますね。

鶴 そうですね。池田さんは普段から、話し方も口調も、とてもやさしい方だし。普段からそういうものが身についていないと、ああいう演技は出来ないと思うんですね。

——演技力だけじゃない、と?

鶴 ウーン……だから私はかなり無理してましたし。

ペリーヌの時は子供でしたから、それほどでもないですけど、みゆきは一番難しかったですね。

♥最近はほとんどコメディアンです!

——長女ですか。

鶴 いいえ、次女です。三才年上の姉と二人姉妹です。姉も一緒に「ひまわり」に入りまして。姉は美人なものですから、モデルとかそういう仕事をしてたんですけど、肌があわないっていうので、すぐ辞めました。今はフツーの主婦してます。

——鶴さんは主婦なさる御予定は?

鶴 ええ、したいですね、エヘヘヘ(笑)。夢見てります、ハイ。

——芸能界入りは、反対はなかったんですか。

鶴 ええ、父が昔、役者になりたかったみたいで、その夢を娘に託したのではないでしょうか(笑)。

——実写の方で印象に残っている作品は?

鶴 大場久美子さんではなく、九重祐三子さんの方の『コメットさん』に、単発で二本ほどゲスト出演で出させていただきました。妖怪の森にいる、もう死んでる女の子をやったんです(笑)。

——他には?

鶴 『ケンちゃん』シリーズの『ケンちゃんトコちゃん』とか新藤恵美さんの『美しきチャレンジャー』とか……。それと、玉川砂記子ちゃんとは、NHKの少年ドラマシリーズを一緒にやってたんです。

——どの作品ですか。

鶴 えーと、『ぼくがぼくであること』で主役の子の姉の役を。あと、『巣立つ日まで』は、私は大きい役じゃなかったんですけど、砂記子ちゃんは、わりと重要な役でした。

——すると『ペリーヌ』をやるまでは、アテレコの経験は?

鶴 いえ、全然。CMのナレーションを、ちょっとやったくらいです。

——『ペリーヌ』の頃に、洋画の『ダウンタウン物語』で、ジョディ・フォスターをアテられましたね。

鶴 あの時も、オーディションがありまして、ヒロインの役と両方、受けたんです。そしたら、ヒロインの方は砂記子ちゃんに決まって。

——アテてみたい外国の女優さんは?

鶴 ダイアン・レインとか、ブルック・シールズとかをやりたいなあ、と思いますけど。

——日本のスターでは誰がお好きですか。

鶴 大原麗子さんと藤竜也さん。

——実写の方は、最近は出てらっしゃらないんですか。

鶴 ええ、一切。昔ね、うちの母に「あんた、顔を出さない方がいいわよ」って言われて(笑)。で、まあ、自分でもそう思っていたんで「うーん、そうだね」(笑)。ちょうど、声の世界に興味を持ち出した頃なんで、納得してしまって。

——舞台の方は?

鶴 「アクターズ スリル&チャンス№6」という劇団を仲間と作っていまして、4月の11日から14日まで「シアター代官山」で「MARINE」というお芝居をやります。

——さて、いよいよ核心の質問ですが、初恋のお話しをお願いします。

鶴 ウーン、小学校のそれが初恋とすれば……5年生の時ですか。名前もわからないんですけど、1級上の6年生で。とても面食いなんですよね、私。とってもねえ、カワイイ人だったんですよ、その人が。それで、教室の窓から、彼がグランドで遊んでいるのをジーッと(笑)。暗いですね、何か(笑)。

——陽子そのものですね。

鶴 その程度でしたね。別に打ち明けるとか……まだ小学生ですからね。

——チョコレートをあげるとか。

鶴 何もないです。遠くから見てるだけですから。

——すると彼が卒業してからは、全然お会いになってない?

鶴 そうです、ウフ♡(笑)。

——それ以降では? 成功したケースは?

鶴 いえっ、ありますヨ(笑)。中学でバレー部に入ったんですけど、その時の先輩に憧れたりとか……。何か、しょっちゅう、好きになっちゃうんですよね。

——告白の方は?

鶴 してません。日記に書いたりとか、詩を書いたりとか、その程度で。

——陽子と非常に共通性があるような……。

鶴 やっぱり、暗かったんでしょうかね(笑)。

——そんなことはないと思いますけど。今回、こういうキャラをアテられたんですが、今後、アニメで挑戦したい役柄は?

鶴 そうですねえ……いい子ちゃんいい子ちゃんしたんじゃなくて、大人の女性もやりたいですけど。悪女じゃなくて、つっぱってるような……。

——戸田恵子さんがおやりになるような?

鶴 あ、そうですね。

——すると、清純派を脱皮したい、と(笑)。

鶴 いえ、もう、脱皮してますよ。もう、ほとんどコメディアンですよ、最近は(笑)。

——どうも有難うございました。

"三行以上のせりふはトチッちゃう!?"

as Yoni ヨニ/坂本千夏

■プロフィール■

8月17日，東京都生まれ。昭和57年「フクちゃん」の主役に抜擢され，以後，「イタダキマン」竜子，「キャッツ・アイ」来生愛，「ナイン」安田雪美，「らんぽう」らんぽう，「キャプテン翼」あねご(並木ミユキ)などの人気アニメに，次々と重要なキャクターで出演。その小柄な体からほとばしるパワフル・ヴォイスには定評がある。ラジオ「アニメトピア」では高橋美紀と共にパーソナリティーを担当。講談社文庫，フルーツマカロニ，丸井のCMのナレーションなどでも活躍している。アーツビジョン所属。

♥私がいないと録音が早く終わるの!?

——陽子役の鶴ひろみさんとお友達だそうですね。

坂本　同い年でしょ。それに、私が初めてレギュラーをやったのが『フクちゃん』で、ほとんど同じ時期に『忍者マン一平』という番組にも出てたんですけど、鶴ちゃんはその時のマドンナのアゲハちゃんという役だったんです。それで、家も同じ横浜だったから、いつも一緒に帰ってたりとか。それ以後は出る番組の傾向が違うし、仕事で会うことってなかったんです。だから、よく「今一番会いたい人だぁれ?——鶴ひろみちゃん!」なんて冗談言ったりしてて。最初は同じハマッ子同士っていうこともあったんだけど、私は彼女みたいな人好きだし……。

——性格は似てらっしゃるんですか?

坂本　違いますよ(笑)。彼女はけっこう可愛らしく見えるけど、しっかりしてるしね。私みたいにヘラヘラしてませんもん。

——でも、鶴さんにお話を伺った時には、「私は、最近はほとんどコメディアンです」っておっしゃってましたよ(笑)。

坂本　役の上ではそうみたいね。もうそろそろ、鶴ちゃんや私たちよりも若い人たちがどんどん活躍し始めてますから。私だってまだ新人みたいなものなのに、年下の子から「千夏さん」なんて言われると「私だって、若いんだからね」って対抗意識燃やしたりしてね。「可愛くないよ」なんか言われちゃいますけど(笑)。

——最近の声優さんには、現役の高校生という人もいますからね。

坂本　でも、鶴ちゃんも『ペリーヌ物語』をやってた時はそうでしたよ。「鶴ちゃんも芸歴長いねえ」なんて言っちゃうものね。彼女がドラマで桜田淳子さんの友達の役で出てて、再放送でやるから見て見てって言うと、私もミーハーだからどれどれって見ちゃうんですけど、まあ、そういうお仕事もやってた方ですから、なんて(笑)。足向けて寝られないの、私なんか。

——『キャッツ・アイ』の『さらば冬のカモメ』のゲストで鶴さんが出てらっしゃいましたけど。

坂本　ええ、でもカラミの芝居じゃなかったから。実は『レダ』のアフレコも、私一人だけ、皆さんと別の日に録ったんです。寂しくてね。皆さんとご一緒したかったなあ、なんて思いました。

——池田秀一さんのゼルは良かったですね。

坂本　私、池田さんとは初めてなんですよ。お噂はね、『キャッツ・アイ』で共演している奥さまのグリコ(戸田恵子)さんからよくお聞きしてたんですけど、お会いするのは初めてで、「あ、いつもお世話になってます」みたいなノリで始まったりして。ゼルは悪の美しさみたいなのが出ていて、ピッタリでしたね。

——鶴さんはどうでした?

坂本　主役だから大変だなあって思いましたね。ヨニはけっこう振幅があるし、パーッと発散できる役なんだけど、陽子みたいなおとなしい部分もあるっていうのは、役柄として難しいんですよね。

——録音は順調に行ったみたいですね。

坂本　私が行かなかったから、早く終ったみたい。鶴ちゃんにあとで電話したら「いやあ、早く終っちゃったんで、打ち上げ行きましたよ」なんて言われて(笑)。

——坂本さんはNGが多い方なんですか。

坂本　『レダ』の時はそうでもなかったですけど、『キャッツ・アイ』では有名な話なんですよ。3行以上のセリフが出ると、トチるというんじゃなくて、わけの判らないこと言っちゃうんです。「お待ちどうさまでした」と言うところが「お待ちさまどうでした」みたいな(笑)。だから、ゲストの方が皆さん、大笑いして帰っちゃうという……。鶴ちゃんが『レダ』のイベントで、私が3行以上のセリフが言えなくてスタジオの隅でうずくまってしまったなんていう話をして笑いをとっているらしくて、ファンの子から手紙が来ましたよ。「3行以上のセリフで四苦八苦しているようでは、立派な声優になれませんよ」って……。悪かったヨ、なんてね(笑)。

——声優になるというのは小さい頃からの希望だったんですか。

坂本　特別そういうわけじゃなかったんですね。私、お芝居をやる前は歌をやってたんですよ。高校の時に、女の子四人で〝ピーピング・メリー〟っていうバンドを作ってたんです。

——どの楽器を?

坂本　エレキベースです。あとヴォーカルと。それにピアノと生ギターが2本という編成で。で、その頃は〝横浜ふぉーく村〟というアマチュアばかりの集まりがあって、そのコンサートとかに出てました。シュガーっていうグループがあるでしょ? 彼女たちがまだ〝かりんとう〟っていう名前でやってた時からのお友達で、高3くらいからはバンドを解散して一人で歌ってたんですけど、その時のバックをやってもらったりしてました。今でも、私、歌をやりたいんだけどって相談したりしてるんです。そう言えば、確かクミとモーリは県立鶴見高校の出身で、鶴ちゃんの後輩に当るはずですよ。

——ヤマハのポプコンに出られたと聞きましたけど。

坂本　私、高2の頃から「ヤマハ・ボーカル・スクール」に通ってたんですけど、そういう関係もあって、自作自演じゃなくて譜面だけで応募してくる人のために、その曲をコンテストの時に歌ったりしたんです。それで、神奈川・多摩・山梨地区の本選会で「ボクは作曲家」というのを歌って、優秀歌唱賞を貰ったことがありますね。でも、これは特に歌がうまかったとかいうんじゃなくて、この曲、アレンジャーの人とかがかなり乗っちゃって、途中で美空ひばりのモノマネを入れたりとか、コミックソング風にしたんですよね。それがたまたま受けたって感じなんです。

——でも、『らんぽう』の主題歌なんかお聞きしますと、声量もあるし、ギンギンのロックをあれほど歌いこなせるというのはすごい、と思いますよ。

坂本　歌はこれからもやっていきたいですね。

——それで、高校時代バンドをやっていて、お芝居をやり始めたのはいつ頃からですか。

坂本　あのね、私、歌やってる頃から「変な声だ、変な声だ」って言われてたんです。コーラスやっても浮いちゃったりして。それで、面白いから歌よりも芝居の方を勉強した方がいいんじゃないかって学校の先生にも言われてたんですよね。で、アニメっていうか、TVのマンガは好きだったから、何となくマンガの声をやりたいという気持ちはあったんです。じゃ、それにはどうしたらいいかって言った時に、友達に広川太一郎さんのファンがいて、当時、横浜のサテライトスタジオでラジオの番組をやってらして、そこで聞いてくれたんですね。そうしたら、広川さんが「まずお芝居をやりなさい。でも、他にやりたいことはないの?」っておっしゃって、「幼稚園の先生か、お嫁さんになりたい」って答えたら「じゃあ、幼稚園の先生か、お嫁さんになりなさい。僕は声優は勧めません」って言われてね、ああ、大変な仕事なんだなあって思いましたけど、やっぱりやりたかったから、高校を卒業してすぐ、劇団テアトル・エコーの養成所へ入ったんです。

——それはバイトをしながらですか。

坂本　最初の一年はね、親が短大へ行くかわりに、

一年間は好きなことをやってもいいって言ってくれて面倒見てくれたんですけど、二年目からはいろんなバイトやりました。バイトのくせに社員旅行も連れてってもらって、芸者さんたちにモテちゃったりしたこともあるし(笑)。だから、『フクちゃん』までの何年間かっていうのは、経済的には苦しかったですね。

──『フクちゃん』はオーディションを受けられたんですか。

坂本 そうです。ダメでもともとっていう気持ちで受けて、確か芝居のけいこ中に知らせが来たんですよね。思わず「ウソだァッ!」って叫んじゃった(笑)。ちょうど8月で、誕生日の近くだったから、すごく大きなバースディ・プレゼントを貰ったような気がして、嬉しかったですね。

──それ以後、アニメのお仕事は順調ですね。どなたか、目標にしてらっしゃる声優さんはいますか。

坂本 目標というのはないんですけど、やっぱり大人の役がやれるようになりたいですね。だからトコ(藤田淑子)さんみたいな方には憧れます。一休さんもやれて、泪ネエさんもやれて、ミームもすごいはずんでいるでしょう。すごいと思いますね。

──アニメで好きなタイプの作品というと?

坂本 私、メカものって余り良く判らないんですよね。『超時空世紀オーガス』くらいしかやったことなくて、でも、キリッとした女の悪役みたいなものはやってみたいと思いますね。好きなのは、『もーれつア太郎』とか『花のピュンピュン丸』みたいな、ちょっとシュールな感じのギャグの世界です。ビックリハウス感覚、みたいな。可愛いのでは『ひみつのアッコちゃん』ですね、再放送なんかいつも楽しみに見てますよ。

──舞台の方も続けていらっしゃるそうですね。

坂本 ええ。「KIRA THEATER」っていう劇団を仲間で作ってやってます。テアトル・エコーのメンバーとエコーの養成所の研究生、それに日大芸術学部の殺陣同志会の流れが一緒になって、八人くらいの集まりなんですけどね。これまでに7回、近々8回目の公演を行う予定になってるんです。

──どんな傾向のお芝居なんですか。

坂本 もう、ドタバタですよ。実際に起きた事件のパロディとかもやってるし。ここで宣伝しちゃいますけど、うちの芝居は本当に面白いですよ。"マンボNo.5"に合わせて立ち廻りをやったりするんですから(笑)。機会があったら、ぜひ観に来て下さい。

♥初恋は少女マンガみたいにいかない

──ところで、皆さんにもお聞きしているんですが、坂本さんの初恋は、いつ頃でした?

坂本 私の場合は、高校時代ですね。17才だから高2だったかな。夏休みに年をゴマ化してアルバイトしたんです。と言っても、いかがわしいものじゃないですよ。プールの監視員なんですけど、これは大学生以上じゃないとやらせてもらえないんです。それでサバ読んで20才くらいって言ってやってたんですけど、その時の同じ監視員をしてた男の人に憧れましたね。この人がとってもカッコイイんですよ。もう、『愛と誠』の誠さんみたいな、ね。私は面喰いじゃないんだけど、その時は「こんなにカッコイイ人が世の中にいたのか」というくらいで……。でも、声がちょっと変なんです。郷ひろみみたいで(郷さん、ごめんなさい)。それで、わりとヒョーキンな人でね。でも、私は中学・高校と女子高だったから、まわりにそういう男の人いなかったんです。捜真女学校っていう割と有名なお嬢さん学校で、山田栄子さんも同じ学校なんですよ。「千夏と栄子じゃ、お嬢さん学校なんて怪しいもんだ」ってみんなに言われるんですけど(笑)。それはともかく、その人はクールでかっこよくて、それでいて、変な声でひょうきんな一面もあるという感じで、もう盛り上がっちゃったんです。ところが、相手は20才くらいの本物の大学生で、私はその時、青学の学生っていう風に言ってたんですけど、彼に「上智はソフィアって言うけど、青学は何って言うの?」って聞かれて、「ブルーマウンテン」なんて答えたりして(笑)。大学のクラスのことなんか話題に出ても「教えないもん」とか言いながら内心ドキドキしたね。

──デートとかはなさいました?

坂本 いやあ、全然(笑)。だって、私もシャイだから…。

──告白もしなかった?

坂本 そうですねえ。セーター編んでプレゼントしたりとか、そういう可愛いことも全然しなかったなァ。電話すると「何?」とか言うでしょ。それでカチンときて「別に何も、用なんかないよ。じゃあね」って言って切っちゃう。マンガなんかだと「うん、ちょっと声が聞きたくて」なんて気のきいたことも言えるんだけど(笑)。別の話題に持っていって話せばいいのにって思うけど、それくらい屈折してるんですよね。

──『キャッツ・アイ』の愛ちゃんに似てますね。

坂本 あそこまで可愛くないけどね(笑)。ヨニとかも、そういう感じなんじゃないかなって思いますけど……。

──陽子の気持ちなんか判ります?

坂本 あ、だから、あれはホントにおいしい役だと思いますよね。もうけ役。こういう女の子が中心になってメカの中で戦うっていう作品で今までなかったと思うし、うらやましいなっていう気持ちで私はずっと見てましたから。

──でも、ベースをお弾きになると、曲を作って贈れば良かったのでは?

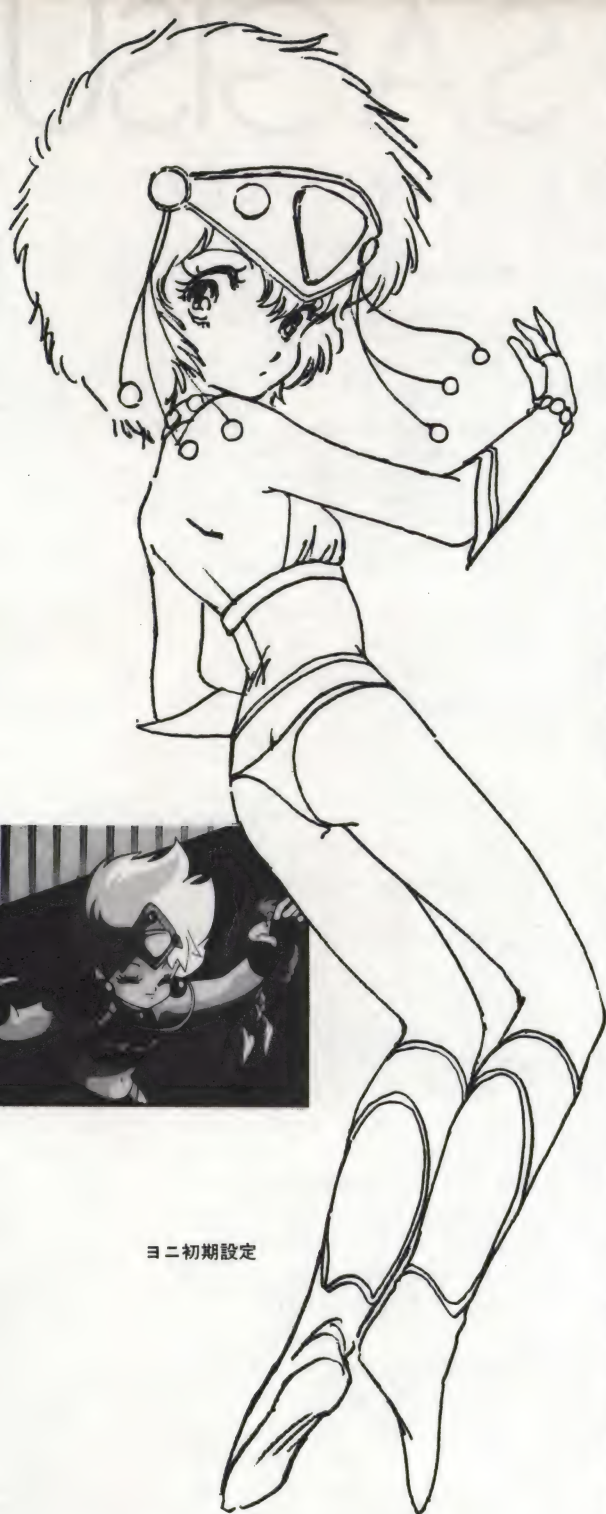
坂本 うーん、昔は作ってたんですけどね。詞は人に作ってもらって、というのが多かったけど、作曲はずい分やりましたから……。

──それで、結局どうなりました。その人とは?

坂本 ずい分後になってから、一、二年たってたかなあ。駅で偶然、見かけたことがあるんです。それまで、会えないかなぁってずっと思ってたんですけど、通学時間も違うから……。それで、ある時遠くから見かけたら、その時はあまりカッコよくなかった(笑)。やっぱり、夏だったし、太陽の下で顔が日焼けして真っ黒だったりすると、みんなかっこよく見えるんですよね。いつも短パン姿で、普通の服着てるところを見たことなかったから、その時は「ああ、私の好きな服着てないや、顔も黒くないとあまりかっこよくないや、チャンチャン!」みたいな(笑)。それまではね、修学旅行の時なんかでも、女の子だけのヒソヒソ話でその人のことを自慢そうにしゃべっていたりしたんですよ。あの時はこう言ったとか、それでお互いに目が合って、みたいな話をね。もう、友だちがうんざりするくらい。それが、久しぶりに見たら、「なんだぁ」って感じだったんですね。それで、その頃、時期は少しズレてたかも知れないけど、くらもちふさこさんのマンガで『赤いガラス窓』っていうのがあって、それがプールで女の子と男の子が出会う話なんです。シチュエーションが似てたから、それをとても印象的に憶えてますね。

──やっぱり、現実はマンガほどうまくいかないということですね(笑)。

坂本 でもね、そのせいかどうか知らないけど、今でも好きなタイプの男の人って、一見クールで、実はヒョーキン──という感じなんですよ。イメージとしては荒木大輔くんとか中井貴一さんみたいな感じですね。

──なるほど、いのまたさんと鶴さんも坂本さんも、『レダ』関係の女性は皆さん面食いだということが、非常によくわかりました(笑)。どうも、お忙しいところ、有難うございました。

ヨニ初期設定

CHIKA SAKAMOTO

音楽 鷺巣詩郎 SHIRO SAGISU

〝映像に奥行きを与えるような音楽にしました〟

■プロフィール■

8月29日，東京・世田谷生まれ。父はPプロダクション社長の鷺巣富雄。エイケンの鷺巣政安の甥にあたる。松本伊代，河合奈保子などのアイドル歌手のアレンジを数多く手掛け，アニメに関係したのは，『機動戦士ガンダムⅢめぐりあい宇宙篇』の主題歌「めぐりあい」の編曲から。他には，『牧場の少女カトリ』の「Love with You～愛のプレゼント」，「風の子守歌」の編曲，「アタッカーYOU」の音楽などや，『ガラスの仮面』イメージレコード(キング)の編曲も担当。Pプロの未放映作品『シルバージャガー』の音楽も手掛けている。

――今回，ほぼ同時期に発売になる『幻夢戦記レダ』と『メガゾーン』の二つのオリジナル・アニメ・ビデオの音楽を手掛けられたわけですが，これはどのように色分けして作曲なさったんでしょうか。

鷺巣　『レダ』の方はディズニー・アニメ調の壮大さを，『メガゾーン』の方はロック的なドライブ感覚でやりました。「大丈夫ですか，似てしまいませんか？」とスタッフに聞かれたこともありますが(笑)。そこは完全に分けて作曲しました。

――たしかに非常に壮大な音楽ですが，あれはフル・オーケストラなんですか。

鷺巣　フルオケじゃないけど，フルオケっぽく音を作ったのは事実です(笑)。本当にフルオケでやろうとすると，音楽堂みたいなところで録音しなきゃならないし，それは今回は不可能ですね。そのかわり，ピアノ1台，シンセサイザー1台，リズム・セクション7～8台，弦10名，その他で総勢40名以上の編成で，これは録音スタジオに入れられる最高の人数なんです。この編成で録音に一週間かかりました。テレビアニメの2クール分のBGMを録るのに普通で2～3日ですから，今回は相当手間がかかってますね。

――録音はいつ頃？

鷺巣　作曲の依頼が9月下旬から10月の初めで，主題歌の録音が12月初めだから，12月の末ぐらいですね。

――冒頭の並木道にピアノ曲が流れて木の葉が落ちるところは，プレスコですか。

鷺巣　いえ，あれは絵と音は別です。「シンクロしてるように見せてください」とはお願いしましたけど(笑)。あのピアノ曲は何曲か用意したうちのひとつなんですが，難しくて，最初はピアニストが弾けなかったんです。

――ラッシュ・フィルムとかをご覧になってから作曲されたんですか。

鷺巣　いえ，脚本と絵コンテにザーッと目を通しましたが，詳しくは見ていません。全体のイメージだけつかまえて，あまりにも絵にベッタリの曲はつけませんでした。画面の奥行きを表現するような音楽をつけたかったんです。さきほど言った主題歌録音の時には，プロモーション用のフィルムがあがっていたんで，これは何回も見て，絵のイメージをつかみました。

――『牧場の少女カトリ』の主題歌もシンセサイザーが大胆に使用されていましたが，『レダ』ではどの辺に使われたのでしょう。

鷺巣　「アシャンティの伝説」がそうですね。3つのパターンがあって，①シンセ，②シンセ＋(プラス)オーケストラ，③オーケストラで，「恋戦士・誕生!!」なんかは③です。

――「アシャンティ」は中近東風という感じですね。

鷺巣　まあ，中近東でもトルコでも中国でも，聞く人によって違うでしょうが，とにかく異世界風の感じが出したかったんです。曲としては「恋戦士」に対応するものですね。この作品では，シンセでも，なるべく生の楽器に近い音を出すように気をつけました。

――初めてのオリジナル・ビデオ作品ですが，テレビのアニメなどと比べて，いかがですか。

鷺巣　テレビの場合は，BGMをそれぞれ単体として扱って，場面にはめこんでいくわけですけど，ビデオの方はひとつのモチーフをいくつにも発展させていけるので良かったですね。

――作品自体の感想は？

鷺巣　あれは後(あと)に続くでしょう。あの後もずっと話が続いて行くという期待感が持てる終り方ですよね。そういうところにすごく魅力を感じましたね。

――アニメーションはかなり見てらっしゃるんですか。

鷺巣　実は僕の父親(鷺巣富雄(さぎすとみお)氏)がPプロという特撮やアニメを作る会社の社長なもので，すごく小さい時から，そういうのに裏から触れて育ったんで，量的にはすごく見てると思うんですよね。

――Pプロの製作のアニメというと『0戦はやと』や『ハリスの旋風(かぜ)』，『ドンキッコ』や，実写と合成した『ちびっこ怪獣ヤダモン』などですね。実写でも『マグマ大使』や『怪獣王子』，『怪傑ライオン丸』などユニークな作品が多数ありますね。

鷺巣　ああいう昔のは，好きですねえ。昔，父が手塚治虫(てづかおさむ)さんと親しくさせていただいていたので，手塚さんのお宅によく連れて行かれたんですよ。手塚さんのアニメは，すごく好きでしたね。『リボンの騎士』とか『ジャングル大帝』とか。その前の白黒のものも好きなんですよ。『鉄腕アトム』とか，『エイトマン』『鉄人28号』とかね。昔のやつはセル起こしを手描きでやってましたよね。僕なんかが見ても「あ，これは人間が描いたものだな」っていう一種のあたたかさみたいな，味わい深いものがあって，勿論今のほとんど実写に近いようなアニメも好きなんだけど，昔のもすごく好き。動きもギクシャクしてて，そういうのが逆に捨てがたいものがあると思うんです。

――『ジャングル大帝』は，冨田勲(とみたいさお)さんの素晴らしい音楽が評判になりましたね。

鷺巣　あれはすごい。革命的なものじゃなかったですかね。あれも音と映像のマッチングの仕方が，ディズニーのタッチに近いですよね。あれはひとつの完成された形で，誰でも一度は，ああいうのを目指すんじゃないですか。どちらサイドからのアプローチにしても。

――実写の方で，お好きな作曲家は？

鷺巣　ジョン・ウイリアムスですね。『スター・ウォーズ』はそんなでもないですが，『未知との遭遇』や『E.T.』のサントラは，すり切れるほど聞きました。あと，ジェリー・ゴールドスミスの『トワイライト・ゾーン』の音楽は素晴らしいですね。それから，天才というのか，とにかく普通の人じゃないと思うのはニーノ・ロータ。

――『太陽がいっぱい』，『ゴッドファーザー』，『ロミオとジュリエット』とか……。

鷺巣　あの辺は常識じゃ考えられない。普通じゃないと思いますね。

――そうしますと，わりとメロディ・ラインのしっかりしたものが，お好きなんですね。

鷺巣　うん，きわだったものが好き――というか，それが映画音楽，映像音楽のあるべき姿じゃないか，と思います。

――ところで，初恋はいつ頃でしょう？

鷺巣　僕ですか。幼稚園の時かな，やっぱり。同じ組の子でね。正直言って，顔なんか思い出せないんですけど，すごいカワイイ子だったと自分では思っているんだけど(笑)。

――それは，どういう展開に？

鷺巣　(笑)えーと，最終的には，橋のたもとで折り紙を渡したような……(笑)。それぐらいしか，想い出は残ってないですけど，すごく好きだったというのを覚えてる。

――メルヘンですねえ。陽子みたいに，好きな人のために作曲するとか，おやりになったことないですか(笑)。

鷺巣　「そこまでやるかな」ってところですね(笑)。これは専門的なとらえ方なのかもしれないけど，作曲するぐらいの女の子っていうと，誰のために作るとかいうんじゃなくて，自分のために作っちゃうんじゃないかな……と。現実におきかえるのは，やっぱり不可能ですね。

――これからのアニメに対する抱負を聞かせていただけませんか。

鷺巣　音に関して言うと，普通はこれだけ自由なことをやらせてもらえないんですよね。やはり制約が多いんです，色々と。でも，僕らは世代的には若いから，ドンドン昔の形をひとつひとつ崩して行くところから始めないと，面白いことができないでしょう。今回は『レダ』も『メガゾーン』も，すごく自由に出来たから，とても気に入っています。そういう面で，自由にやれる面白い話があれば，ドンドンやって行きたいと思います。

RIO AKIMOTO

──『幻夢戦記レダ』の主題歌はオーディションで選ばれたと聞いてますが？

理央 そうです。一度にたくさんの人を集めてという形じゃないんですけど，一種のオーディションですね。キングレコードの方で歌手を探しているというので，私がスタジオへ行って，中森明菜（なかもりあきな）さんの曲を３曲くらい歌いました。

──自信はありました？

理央 ないですよ，もちろん(笑)。でも，私は何故か，自信がない時の方が物事に受かるんです。ドラマのオーディションとか，「あ，ダメだ」と思ったら大丈夫なんです。今度もそうだったんですよ。

──今回，アニメの主題歌でデビューされたわけですが，アニメはお好きでした？

理央 小さい頃はよく見てきたしたから，親近感みたいなものはありますね。でも，アニメファンという感じで作品に没頭したり，本を買ったりというところまではいかないです。

──印象に残っている作品というと？

理央 私は『アルプスの少女ハイジ』とか『キャンディ・キャンデイ』で育ったんですよ。ちょっと古いのでは『アタックNo.1』とか。でも，それを言うと年令（とし）がわかるって言われてしまいました。だから，最近は『キン肉マン』と言うようにしています(笑)。あ，そうそう，『エースをねらえ！』も好きだったんですよ。それで，この間，北海道のラジオの番組，録音は東京でやってるんですけど，それに出たんですよね。そのパーソナリティの方がなんと，10年前の藤堂さんの声をやってらっしゃった方だったんです！

──森功至（もりかつじ）さんですね。

理央 それで私，番組の中で舞い上っちゃって，その番組はけっこう大人の方が聞いているらしいんですけど，それがハチャメチャになっちゃったんです。

──なるほど(笑)。そうすると，スポーツ物が多いみたいですね。

理央 そうですね。だから『エースをねらえ！』に影響されてテニスをやろうと思ったりしてました。でも，どこでどう間違えたのか，うちの姉の助言でバレーボールに転向しちゃったんです。

──『転校少女Ｙ』はバレー部員の役でしたね。それは『アタックNo.1』の影響じゃなかったんですか？

理央 実は，私の人生の転機には必ず姉が関わってるんです。タレント・スカウト・キャラバンの時も，姉がうるさく出ろ出ろと言って(笑)。中学生の時に「受けてみなさいよォ」って言われて，私はいいって言ったんですけど，「じゃ，高校生になったら受けて」みたいなことで，結局，受けることになっちゃったんです。

──歌手になられて，どなたか目標にしてる方はいますか。

理央 目標は誰々という風には挙げられないんです。やっぱり，自分が自分であればいいなって思いますから。でも，山口百恵（やまぐちももえ）さんみたいに，皆さんに親まれるようなタレントになれたらいいなっていうことは考えています。目標というより，希望ですね。

──女優さんとしても『高校聖夫婦』『転校少女Ｙ』のレギュラー，それに『気分は名探偵』のゲスト出演などがありますね。

理央 そうです。『転校少女Ｙ』では，途中でキャプテンの座を乗っとってしまうという役で，最後までツッぱっていて，ラストでようやく和解するんですよね。

──いじめ役ということで，いろいろあったんじゃないですか。

理央 初めはイヤでしたね，やっぱり。実家に電話するたびに「何でお前があゝいう役をやるんだ」とか家族からクレームがついたり……。後の方になるにつれて，だんだんうっぷんがたまってくるんです。年頃の女の子ですから(笑)。そうすると，今度は逆にそれが快感になってきて，役も何となく面白くなってきましたけど。

──『気分は名探偵』の方は，確かに17才の花嫁の役でしたね。

理央 ええ，17才のゆれ動く乙女心という感じの……。性格としては軽薄だけど，ちゃんと重みもあるっていう面白い役でした。

──『レダ』のヒロイン，陽子と同じですね。

理央 あそこまで重くないです。もっと軽い。かなり軽いです(笑)。

──その軽さは地なんですか。

理央 よく言われるんです，自分ではそう思ってないんですけど。小さい頃は私，ホント，目立つ子じゃなかったんですよ。泣き虫だったし。で，中学に入って，姉にバレーボールをやりなさいって言われて，バスケットをやりたかったんだけど，しつこいくらい勧められて，で，それから私の人生は変っちゃったんです。

──性格も変わりました？

理央 すごくなっちゃった(笑)。外向的になったし，それまで父親ともあまり話さなかったのが，とたんに話するようになって……。

──じゃあ，陽子みたいに初恋の相手に告白できなくて悩むとかは，なかった？

理央 私にはあんな可愛いこと出来ませんよ，曲を作ってなんて(笑)。それに，あれほど深刻には考えませんでしたね，「ああ，恋しちゃった♡」みたいな感じで，中学一年の時の同級生だったんですけど，ウワサだけ拡まっちゃって，結局，全く口きかないままで終ったんです。ああいうのって，誰かに「私，あの子好きだヨ」って言うと，それが学校中に拡まって冷やかされたりするでしょ？ だからウワサだけ先行した感じでしたね。で，この間，熊谷へ帰った時にその男の子とバッタリ会ったんです。久しぶりに口をきいて，「元気だった？」って……。

──それだけ？

理央 それだけ。ロマンチックな盛り上がりも何もなくて，ああカッコ悪いなぁ，なんて(笑)。

──好きな男性のタイプはどんな感じですか。

理央 タイプというわけじゃないですけど，今は『気分は名探偵』で共演させて頂いた水谷豊（みずたにゆたか）さんにすごく影響されてます。とっても優しい方なんですよ。私みたいに無名の新人で，ドラマも慣れてない相手に，リハーサルの時以外にも横についていてくれて，台本読んでいると，「じゃ，ちょっとそこやってあげよう」って相手して下さるんです。とても嬉しかったですね。

──役者としての憧れみたいなものですね。

理央 そうですね。それは，今まで中年の方，30半ば以上ですか？ そういう年令の方って私，あまり好きじゃなかったんですけど，ちょっと見方が変りました(笑)。

──今まで，『レダ』のキャンペーンで各地を回って来られたそうですけど，どこが印象的でした？

理央 どこもみんな印象に残ってますよ。北海道では吹雪の中で徹夜で待って下さってる方もいらしたし，それはどこでも同じでしたね。小さい女の子が，「２人で350円ずつお金を出し合ってレコード買ったの」とか，「これで７枚目です」とか「サンデーズ時代からずっと応援していて，この日をずっと待ってました」とか(笑)皆さん言って下さって，嬉しかったですね。アニメファンて一般に暗いって言われてるみたいですけど，普通のアイドルのファンみたいには軽くないんですよね。芸能人だからワーと騒ぐんじゃなくて，自分が思ったらとことん応援してくれる。ひたむきだし，素直だしね。最初はいろんなことを言っても反応があまりないんで，戸惑いましたけど。

──いわゆるノリが違うんですね。

理央 ええ。でも，皆さんもそれなりに応えてくれるっていうのがだんだん判ってきましたし，レコードが売れて，アニメファンのパワーってすごいなって思いましたね。だから，今は『レダ』の人気に頼ってる部分がありますけど，秋本理央だけでも皆さんが来てくれるように早くなりたいなって思います。実際，『レダ』のファンだった人が，『レダ』と理央の両方のファンになって，それで理央のイベント会場に来てくれてるわけですから，もっともっとそういう人たちを増やしたいですね。

"『レダ』といっしょに理央もヨロシク♡ね！"

唄 秋本理央

■プロフィール

本名・橋本清美（はしもときよみ） ８月７日生まれ。埼玉県熊谷市出身。血液型・Ａ型。身長＝164センチ，体重＝45キロ，スリーサイズ＝Ｂ80・Ｗ58・Ｈ88。趣味は詩を書くこと，編み物。好きな食べ物はラーメン，アイスクリーム，ヨーグルトなど。スポーツではバレーボール，テニス，バスケットが得意。昭和59年３月，堀越学園高校卒業。ＮＨＫ『レッツゴー！ ヤング』サンデーズ『転校少女Ｙ』田代百合子役で活躍。昭和60年１月21日，『幻夢戦記レダ』の主題歌"風とブーケのセレナーデ"(キングレコード)で歌手デビュー。

SCENARIO ETC.

シナリオ(第一稿)

※物語の大筋は変わっていないが、せりふのニュアンスで陽子やヨミの性格が大分違ってみえる。リンガムがレダ教の神官だったり、陽子が戦士の姿になるのが遅くなるなど、相違点も多い。なお、完成したビデオのせりふは、すべてフィルム・ストーリーに収録した。

●白い部屋

ピアノにむかう少女——陽子。

やさしく、ときに激しく、流れるメロディー。

陽子(M)「一年五ヶ月という時が、人を想うのに長すぎるのか短かすぎるのかはわかりません——」

ピアノの横にステレオセット。

録音レベルが点滅している。

陽子(M)「でも、その想いをこめ、この曲を作りました」

回転するテープ

陽子(M)「この曲ができたとき、あたしは決心しました——彼に告白しようって——」

●並木道

明るくさし込む陽光。

陽子、ウォークマンを耳にあて歩いてくる。

陽子(M)「このメロディーが、あたしに勇気を与えてくれたのかも……」

と陽子、ハッとおどろき。

むこうから歩いてくる少年。

表情は見えないが、陽子の態度から、恋愛の相手だと分かる。

陽　子「(ドキマギ)どうしよう……」

近づいてくる少年。

陽子、深呼吸——決意して歩を進める。

すれちがう二人。

陽　子「(声にならない)あ、あの——」

通りすぎる少年。

陽子、呆然として歩み去る。

陽　子「だって……もしこの思いが通じなかったら」

舞い散る木の葉——乱れるメロディー。

陽　子「——いや——もうこんな想い——」

男の声(off)「——おいで——」

どこからとも響くやさしい男の声。

男の声(off)「そんなつらい想いのない世界に——」

陽　子「だれ!?」

陽子、ハッと足元を見る。

泡立つ地面——陽子ズブズブと沈んでいく。

遙かに歩き去る少年が見える。

陽子、声をあげようとする。が、声にならない。

地面の中に、完全に姿を没する少女。

●次元の境

不定形の光の泡の中を沈んでいく陽子。

フッと目をあける陽子。

と光に包まれた、中世の占い師の姿の青年ゼル、やさしく手まねきをする。

ゼル(男の声)「待っていたよ……さァこっちだよ、君の望む世界は」

陽　子「あたしの望む——?」

ゼ　ル「わずらわしい想いのない世界さ」

陽子に迫るゼルの手。

陽子、おびえて——

陽　子「そんなのいや!!」

陽子、光に包まれ、ふっと消える。

●アシャンティ世界・ガルバ城王室

ゼル、ハッと顔を上げる。

ゼ　ル「——レダのハートが……」

スックと立ち上がる。

広間にひかえる兵士たちに——

ゼ　ル「レダのハートは我々の世界にひきこんだ!!　捜せ、捜すんだ!!」

兵士たち、ザザザッと駆け出す。

ゼル、くやしげに唇をかむ。

●メインタイトル

T「幻夢戦記　レダ」

●アシャンティ世界・異形の森

奇妙な植物、繁茂し、珍妙な動物たち駆けぬける。

草ムラに倒れている陽子。

その手元に落ちているウォークマン。

陽子のまぶたにポツンと落ちる露。

フッと気がつく陽子。

柔らかい陽光が森を包んでいる。

陽子、半覚醒状況でフラフラと起き上がる。

草ムラの中にポツンとウォークマン。

×　×　×

陽子、フラフラと歩いてくる。

陽　子「あたし、いったい——」

極彩色の蝶の群れ、陽子を包む。

陽　子「だれか!!　だれかぁー!!」

"レダ"構成表(第2案)

"レダはスパルタの王妃でありながら、美しい白鳥に変身したゼウスに、身をゆだねてしまった悲劇の美女です"

場所	内容	備考
遊園地	真美と晃 楽しいはずのデート——だが晃がペンダント失したため、沈みこんでしまい、真美とまどう	ペンダント 幼いとき別れた母の思い出
同・鏡の間	異次元の王ゼル——ペンダントを囮に晃をつれこもうとする。 真美、それを阻止しようとする。	ゼル——晃のような少年を集めている。 何故か?
	真美と晃、異次元の世界へおちていく。	
異次元 廃墟	状況を把握できない2人。 真美——危険から晃を護ったと自負。 晃——ペンダントをとり戻し損った。	真美(O型)と晃(A型)ケンカしながら——
森	騎馬兵たちの出現 晃と真美、騎馬を奪い、逃げる。 二人、共通の敵に仲なおりムード、が即またケンカ	ゼルの追手
浮遊城	王ゼル、晃の誘拐を命ずる。 忍び込んだレジスタンスの女の子ヨミとヤミ 「また少年が心を奪われてしまう!!」 ヨミとヤミ、脱出行。	ゼルが守護する氷に包まれた女神像"レダ" "レダ"に魂が戻ったとき、異世界に春が戻ると信じ込んでいる。 "レダ"を呼び戻すためには、母をもとめる少年の心のエネルギーが必要
リンガム教授研究所	リンガム、ヨミとヤミの報告をうけて、異世界の2人を、自分たちに協力させられたらと考える。	占星術、犬面の博士 ゼルと異なり、レダの女神像を壊すことにより、異世界は救われると考えている。
森	オンボロロボットでやってくるリンガムたち。 真美と晃、感違いしてひともんちゃく。 そのためゼルの騎馬兵に発見される。 真美とリンガムたち逃げのびるが、晃つれさられる。	リンガム、真美、晃出会い。
浮遊城 幻覚の世界	王ゼルは晃の心から「母を求める心」を抽出しようとする。 幼い日、晃と母の別れ 「母さん、いかないでぇー」	ゼル、幻覚の世界にひきずりこむ魔法をつかえる。
リンガム 研究所	真美、ゼルの目的を知る。 真美の激情、研究所のエネルギーの針ふきとぶ。 「真美なら伝説の翼を復活させることができる」 騎馬兵たち、急襲する。	真美の隠れたエネルギーに気づく リンガム
伝説の洞穴 戦士の泉	エネルギーバリヤーに包まれる洞穴 真美の強力な精神力、バリヤーを破る。 レダの戦士の鎧を身につける真美。	レダの戦士になるためのテストシステムが古代からまだ生きつづけているためリンガムたち、中へ近づけなかった。 レダの翼——プラスのエネルギー レダの女神像——マイナスのエネ

× × ×
立木の間をヨロヨロと来る陽子。
木の陰を近づいてくる黒い影。
ガサガサッ　ハッとふりむく陽子。
立木の陰で光る目。
オヤ!?　と立ちすくむ陽子。
すーっと近づいてくる影　偵察ポットだ。
陽　子「あっ……」
逃げ出す陽子――
× × ×（最初の場所）
草ムラのウォークマン。
それを覗く何者かの影。
陽　子(off)「キャー!!」
影、ハッと顔を上げる。
× × ×
木々の間を陽子が、必死の形相で駆けてくる。
奇妙に凸凹な地面に足をとられる陽子。
陽子、バタッと倒れる。
立ち上がろうとすると、大地、大きく揺らぐ。
陽　子「キャーッ!!」
陽子、巨大な亀の背中に乗っている。
ゆっくりと歩き出す亀。
陽子、とっさに目の前の木の枝につかまる。
が枝折れ、草の上に落ちる陽子。
陽　子「痛い――もういや!!　ここはどこなの!!」
木洩れ日――誰も答えてくれない。
陽子、あきらめ、涙をふきハッと気付く。
陽　子「やだーないわ、あたしのウォークマン」
陽子、あわててあたりをあさる。
陽　子「ない、ない、ない――もう、あたし、どーすればいいのぉ」
と頭を抱える陽子。
と、すぐ傍の草ムラが揺れる。
陽子、ハッと飛びのいて、
陽　子「キャアー!!」
が、顔を出したのはトボケた顔の犬（リンガム）、ウォークマンをくわえている。
陽子、ホッとする。
陽　子「ありがと――もってきてくれたのね」
すりよってくるリンガムを抱きしめて、
陽　子「（涙）どこにもいかないで――あたしなんにもわからなくなっちゃって――あなただけがお友だちなの――」
ポカンとして見つめるリンガム。
そのやさしい目に、陽子、少しおちついて。
陽　子「犬にあなたなんて――あたし変ですね　君なんていう名？あたし朝霧陽子ふつうの女子高校生――」
リンガム、じっと耳を傾けているが、
リンガム「わしの名はリンガム」
陽子の顔、ハッと氷りつく
リンガム「さすらいの旅人じゃよ」
陽子、汗タラリ
陽　子「キャーッ!!」
陽子、二mも飛びのき、
陽　子「キャーッ、犬がしゃべったぁー」
リンガム「うるさいぞ、ジョシコオセ」
陽　子「キャーッ、キャーッ!!」
リンガム「犬がしゃべって悪いか!!」
陽　子「キャーッ!!」
憮然たる表情のリンガム。

●森のはずれ
岩の上に佇んでいる陽子とリンガム。
陽子すでにおちついている。
遥か地平に、陽子の街の姿がさかさに浮かんでいる。
リンガム「数日前からあれが見えとる」
陽　子「（呆然として）あ、あれは……」
リンガム「やはりお前の街か――」
陽子、涙ぐみコクリとうなずく。
リンガム「我々の世界アシャンティと対をなす。ノアという世界があるときく」
陽　子「あたし、ノアから――?」
リンガム「うむ、迷いこんできたんじゃろ」
陽子、顔を赤くして、
陽　子「あたし恥ずかしい――ごめんなさいさっきすっかりとり乱しちゃって――」
リンガム「しかたないさ、次元を越えるなんてめったにあるもんじゃないて」
陽　子「でもなぜ……」
リンガム、ふと、ウォークマンに目をおとす。
リンガム「気になっとったんだが、そりゃなんだ、ジョシコオセ」
陽　子「あ、コレ知らないんだ。ウォークマンって音楽をきくものなのよ」
リンガム「音楽。――ふむ、どうやるんじゃ」
陽　子「ちょっとまって」
とスイッチを押す。
流れてくるピアノ曲――
驚くリンガム。
リンガム「不思議な音のつらなり――」
じっと聴きいる陽子。
陽子(M)「どうしてこんなところに――帰りたい」
と、メロディー、光の渦となって二人を包む。
リンガム「うわーっなんじゃや!!」
あたり、光に包まれる。

●並木道（現実世界）
陽子、ハッとして目を開ける。
何事もなかったように並木道つづく。
陽　子「（ニコッ）夢だったのね!!」
と、その足元で、
リンガム「な、なんとかしちくれぇー」
陽子、ハッとして見おろすと、リンガムの首だけが宙に浮いている。
陽　子「きゃー!!」
とたんに光、ほとばしる。

●森のはずれ（アシャンティ）
光、おさまると、リンガムと陽子、岩の上に佇んでいる。

※湯山監督の話にある第２案。マザコン少年を少女が助けにいくという，まるで「雪の女王」みたいな話になっている。リンガムは犬面の教授，ヨミとはヨニの前身？

	「レダの翼」の復活――飛行ロボット 真美とリンガム、浮遊城攻撃を決意	ルギーの固まり ○女神像破壊――外的目的 ○晃救出――内的目的
地下水路	リンガムたちの先導で、浮遊城侵入 ゼル、待ちぶせしている。 ゼルの軍隊との闘い。 {ヨミとヤミコンビ / リンガム} リタイヤ 真美と「レダの翼」浮遊城に突入	
浮遊城 鏡の間 ゼルの幻覚 遊園地	真美、突入してくるが、そこは鏡の間 真美の精神エネルギーVSゼルの魔法 鏡の門からとび出すと、そこは遊園地。 真美と晃との楽しいデート。 しかし、ペンダントのこと気にしないのをへんに思う。 と、のら犬(実はリンガム)真美に本当のことをつげ、目ざめさせようとする。 真美、幻覚からめざめる。	超能力戦 真美は現実世界では、超能力者ではないが、この異世界では、精神エネルギーが増幅される。 リンガム、ヨミとヤミ戦線復帰
女神の間	氷に包まれた女神の間 心をぬきとられ氷りついている少年たち 真美その中に晃の姿を見つけて大ショック 悲しみと怒りが噴出!! ゼルの魔法で動き出す氷のレダ像とレダの翼になった真美、さいごの対決。 浮遊城崩れる。 真美、晃を助け出そうとするが無理。 ヨミとヤミ、真美を元の世界への扉につれていく。	悲しみのクライマックス
遊園地・夜	ただひとり戻る真美 ペンダント拾う――その中、レダの像そっくりの写真 そのとき、リンガムの鳴き声 リンガムに救われ、晃戻ってくる。 捨てられるペンダント フィナーレ	復活の喜び

ヨニ初期設定

リンガム「い、いったい、何がおこったんじゃ」
陽　子「こっちがききたいわ!!」
　リンガム、ウーンと考えこむ。
リンガム「わしの経験と知性と教養からこの事態を考えると」
　リンガム、サッとウォークマンを指し、
リンガム「そのウォクマが何らかの力をもっとるんじゃないか」
陽　子「まさか――只のテープレコーダーよ」
リンガム「とにかく、もう一度、動かしてみるんじゃ」
陽　子「でも、そんな力なんて――」
リンガム「ひょっとしたら帰れるかもしれんぞ!!」
陽　子「まさか――でも」
　陽子、スイッチに手を伸ばす。
　と、シュン!! 奇妙な触手、のびてきてウォークマンをとりあげる。
　ハッとふりむく陽子とリンガム。
　ハッシとウォークマンをうけとる、ロボット兵――ウォリア。
陽　子「ああーっ」
　騎馬のようなステードに乗ったウォリア、ズラリ並ぶ。
　その前に、さきほどの偵察ポット。
陽　子「(汗タラリ) どーしよー」
リンガム「わしの経験と知性と教養から言わせてもらうが――逃げろっ!!」
　ダッと逃げ出すリンガム。
　陽子、あわてて後を追って、
陽　子「やん、待って!! アレがないと帰れないかも!!」
リンガム「生きてなくちゃ帰れんぞ!!」
　ダダッと逃げていく二人。
ウォリアA「ニガスナ!!」
　ダッと宙に飛ぶステード!!
　必死で逃げるリンガムと陽子。
　が、その前にズズン!! と着地するウォリアたちを乗せたステード。
　キキーッと停まるリンガムと陽子。
リンガム「エヘヘ、な、なにか御用で?」
　ウォリア、無言で武器をかまえる。
陽　子「キャアーッ!!」
リンガム「グルルルル――」
　リンガム、うなり身がまえる。
　ダッ!! と武器をふりおろすウォリア。
　リンガム、飛びつく!!
　ウォリア、ステードから転げおちた途端に、ウォークマン転がり、スイッチが入る。
　陽子の足元、ヘッドホーンから洩れるピアノ曲。
　陽子にジリジリと迫るウォリアたち。
陽　子「誰か、誰か助けて――」
　ビュン!! ウォリア、武器をふるう。
　陽子、はずみで、地上に花開く巨大な花ビラの中に倒れ込む。
　と花ビラ、ザザッと陽子を包む。
陽　子「キャー……」
　すぐ静かになる。
リンガム「ジョシコォセ!!」
　ウォリアA、リンガムの尻っぽをつかみ、もち上げ。
ウォリアA「食肉植物ノエサカ」
リンガム「エエッ!!」
ウォリアA「フフフ、次ハオ前ダ」
　ウォリアB、おちているウォークマンをひろい上げる。
　はずみでヴォリュームを上げる。
　流れるピアノ曲――
　と、花、光に包まれる。
　ウォリアB、あわてていじっているうちに、スイッチきれる。
　花、輝きつづける。
ウォリアA「何ダ、コノ反応ハ?」
ウォリアB「解読してみます」
　解読器に反応!!
ウォリアB「コ、コレハ、強力なレダパワー」
ウォリアA「ナニッ!!」
　と、花肉、バッと四方に飛び、粘液のようなものに包まれた陽子、はい出してくる。
　服、とけて、半裸の陽子。
陽　子「もう、ひどいんだから、ベッベッ」
　ハッと顔をあげる。
陽　子「キャッ、まだいたっ!!」
ウォリアA「(他の兵士に) ヤレッ!!」
陽　子「キャーッ、リンガム助けて!!」
リンガム「ジョシコォセ!!」
　が、リンガム、尻っぽをおさえられ、身動きできない。
　陽子に次々と襲いかかるウォリアたち。
陽　子「キャー、キャー!!」
　陽子、さっきまでとは見ちがえる身のこなしで逃げまわる。
リンガム「(目をみはる) オ!?」
　ウォリア、陽子をはがいじめにする。
陽　子「キャーッ、やめてぇ!!」
　陽子のするどいひじてつが、ウォリアの首をえぐる。
　「(自分の力に) キャーッ!!」
　タジタジとなるウォリアたち。
陽　子「やめて!! やめて!! こないでぇー」
　陽子、手をふり、足をけり、ムチャクチャな攻撃!!
　が、ウォリアたち、次々と叩き潰される。
　あわてるウォリアA、B、リンガムを投げすてると、あわてて踵をかえし逃げ出す。
リンガム「すごいぞ!! ジョシコォセ!!」
陽　子「えーっ!! うそーっ!!」
　まわり、叩き壊されたメカの山。
　陽子、呆然として見つめる。
陽　子「これ、みんな……」
リンガム「おまえがやったんじゃ」
陽　子「……」
　と偵察ポット、ビデオアイで二人を見つめている。
リンガム「まずい、逃がすな!!」
　陽子、反射的に飛び上がりポットを蹴る。
　ポット、まっ二つに割れ――頭部、空へ上っていく。
　空中で光の玉になるポット。
　唖然として見上げるリンガムと陽子。

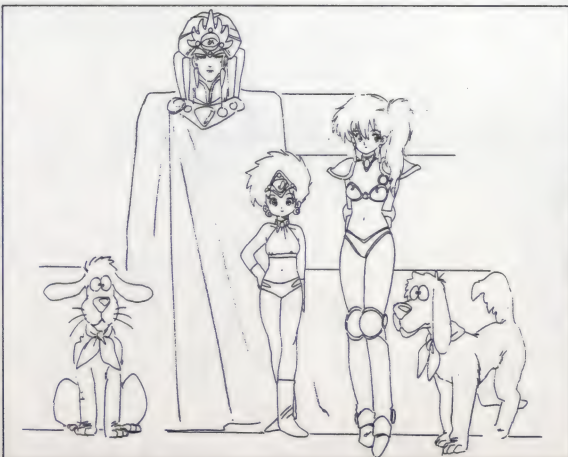
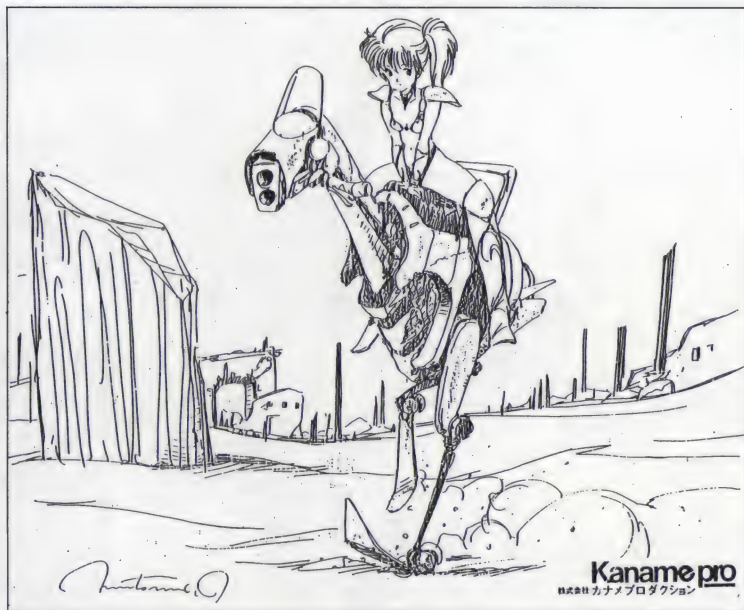
陽子初期設定

▲設定表決定稿扉絵

▶メイン・キャラクター対比表

●高　台

遥かに見える光球。
少女の巫女――ヨニ、光を見つけ、
ヨ　ニ　「あれは!!」

●王室（ガルバ城）

あわただしく入ってくる側近チザム。
チザム　「ゼル様、ただ今、救難をつげる信号があり、ただちに救援機をさしむけました」
ゼ　ル　「なにものが我らに逆う、教徒たちにその力は残ってはおるまい」
チザム　「は――おそれながら、教徒たちの伝説をご存知かと」
ゼ　ル　「たわけっ!!　教徒の伝説など根拠のないつくり話だ――レダのハートを手にいれることに全力をつくせ!!」
チザム　「はは――」
すごすごと退出するチザム。
ゼ　ル　「伝説――まさか……レダの戦士が……」

●森林地帯

陽子、ステードを見事に操り疾走する。
陽　子　「レダの戦士!?」
リンガム「突然の変身を見とって、レダの伝説を思いだしたんじゃ!!」
陽　子　「レダって……？」
リンガム「宇宙全体を支配する女神じゃ。かつてこのアシャンティにもお寄りになったが、争いの絶えぬのに嫌気がさして去ってしまわれたそうだ」
陽　子　「ふーん――似たような話はあたしたちの世界にもあるわ」
リンガム「そのとき残された言葉がレダの伝説じゃ」
陽　子　「……」
リンガム「アシャンティの悪が他の世界に及ぼうとするとき、わたしは戦士の姿を借り再び現われる――とな」
陽　子　「だけどあたしは普通の女の子よ」
リンガム「普通の女の子は兵士をやっつけたりはできんもんじゃ」
陽　子　「でも、レダさんとあたしを結びつけるものってなにもない筈よ!!」
リンガム「わしの経験と知性と教養からいわせて貰えば、あのウォクマじゃよ!!　あれが不思議な音を発するとき何かがおこる」
陽　子　「(ハッとして) 急ぐわよ!!つかまって」
ステード、ジェットエンジン風に噴射。
ドキューンと突っ走る。

●岩　場

遥かに見える土煙。
陽子、ハッとして、
陽　子　「みつけたわ!!」
キーン!!　高速でつっ走る陽子たち。
ウォリアＡＢＣのステードに、あっという間においつく。
陽　子　「かえしてよ!!　あたしのウォークマンなんだからぁ」
リンガム「(呟く) 急に強気になりおって」
陽　子　「!!」
陽子のステードの背後をとる。
ウォリアＣ、岩壁ぞいに方向転換、
ダダダッ!!　ステード頭部の機銃で狙い撃つウォリアＣ。
陽子、ステードの足部でガンと蹴る。
ドガーン!!　岩壁に激突するウォリアＣ。
リンガム「おみごと、ジョシコオセ!!」
陽　子　「ようこって呼んで」
リンガム「ん!?　いろんな名があるんじゃな」
ウォリアＢ、Ｃ、洞穴に逃げ込む。
後を追う陽子のステード。
×　　×　　×（洞穴内）
遥かに洞穴の出口のあかり――
あっという間に迫る。
並んで飛び出す三騎のステード!!
×　　×　　×（同・外）
ダアッ!!　と飛び出してくる三騎!!
なんと一万ｍの大絶壁!!
陽　子　「!!」
眼下を飛行する巨大な救援機。
ウォリアＡＢ、巧みにステードを操り機内に消える。
陽子、無理矢理、ステードを操る。
陽　子　「どぉ、どぉー!!」
ドスーン!!　と救援機の翼に着陸する陽子のステード。
しかし、ものすごい風圧にびゅん!!
陽子のステード、あっという間に吹きとばされる。

●谷

まっさかさまに落ちてくる陽子たちのステード。
陽　子　「やーっ!!　夢なら痛い目をみる前に醒めて!!」
リンガム「何いうとんじゃ レダの戦士なら何とかせー!!」
地上スレスレでステード、やっと逆噴射!!
急坂を滑り落ちていくステード。
救援機から次々と射ち出される攻撃タイプポット!!
ポットはステードの後を追う。
坂、途中でとぎれている。
ビューン!!
空中に投げ出される陽子とリンガム。
陽子・リンガム「ウヒャーッ!!」
とその目の前、教会の三角屋根のようなものがつき出す。
二人、必死でとびつく。
ホッとする間もなく飛来する攻撃用ポット。
ゴゴゴ――と動き出す三角屋根。
陽子とリンガム、下を見て唖然
陽　子　「こ、これは!?」
リンガム「巨人じゃあ」
三角屋根――実は巨大なロボット（ラバスター）の頭部。
ラバスターに襲いかかるポット。
グシャッ、ドドーン!!
ラバスター、次々とポットを握り潰す。

ヨニ・リンガム設定（決定稿）

RINGAM

リンガムくちパク

陽子とリンガム、ラバスターの頭部にしがみつく。
激しい動きにブンブンふりまわされる二人。
が、たえきれず、
陽　子「もうだめぇ!!」
リンガム「ワシにつかまれ!!」
陽子、リンガムにしがみつく。
リンガム、パッと耳をひろげて軟着陸。
陽　子「福耳でよかったね!?」
攻撃ポットが迎撃機に向かって逃げかえる。
見送るラバスターとリンガムと陽子。
崖のむこうへ消えていく迎撃機。
ラバスター、その方向へむけて歩いていく。
リンガム「わしらも行くか」
陽　子「こうなったらとことんつきあうわ」
二人、岩場を風のように走る。
陽　子「三好に見せてやりたいわ」
リンガム「なんじゃそれ」
陽　子「体育の成績ひどかったんだ」
リンガム「!?」
崖をのぼっていくラバスター。
後につづくリンガムと陽子。
崖の上に立った陽子とリンガム。
陽子・リンガム「ああっ!!」
×　　×　　×
無数に浮く見張り塔——その間を飛んでいく迎撃機。
巨大なカタパルトにすいこまれていく。
雲がきれその全貌がみえる。
ウォオーン、不気味に吠える——浮遊城「ガルバ」。
陽　子「あれは？」
リンガム「ついによみがえらせてしもたか」
陽　子「え!?」
とラバスターから梯子スルスリと降り——カパッとドアが開き、さっきの少女ヨニー、顔を出す。
ヨ　ニ「ポケッと口あけてると爆弾ほうり込まれちゃうわよ」
陽　子「(唖然として)あなたは？」
ヨ　ニ「ヨニー、これでもレダの巫女よ」
リンガム「!!」
ヨ　ニ「仲間捜して歩いてるんだけど、うす汚ない女の子ひとりじゃしようがないわ」
陽　子「よけいなお世話よ!!」
ヨ　ニ「その格好でお嬢様とでも呼んでほしいわけ」
陽　子「(ハッと自らの格好にきづく)」
陽子もうしわけ程度のボロキレをつけただけの格好に赤くなる。
リンガム「みなりはボロでも、レダの戦士かもしれんぞ」
ヨ　ニ「(ハッとして)しゃべる犬、ひょっとしてあなたはプロフェッサーリンガム、レダ教最高の神学者!!」
リンガム「とうくに引退した身じゃがの」
ヨ　ニ「やはり!!　千人の味方を得た心強さです、プロフェッサー!!」
陽　子「(唖然)犬はみかけによらないわ」
ヨ　ニ「で、本当にレダの戦士なのですか、こいつが」
ヨニー、チラと陽子を横目で見て、
リンガム「こいつとは失礼じゃぞ、ジョシコォセという名がある」
陽　子「(たまらん)ヨウコです」
ヨ　ニ「(二人の会話無視して)どうなのです」
リンガム「戦士か否かは儀式をまたねばならん——しかしワシは奇跡をみた」
ヨ　ニ「では神殿へ——」
リンガム「なに神殿は壊されたはずじゃあ？」
ヨ　ニ「いや、ゼルにこわされたのはほんの一部、巫女だけしかしらない本物の神殿があります!!　急ぎましょう!!　ゼルの奴がガルバを動かす前に儀式を!!」
陽　子「ゼルとかガルバとか、なんのこと」
ヨ　ニ「総統をなのるゼルも元々はレダ教の神学者のひとりだったの——その研究中に得た知識を使い、遺跡ガルバを復活させた」
リンガム「ガルバはアシャンティの心臓のようなもんじゃ、凄まじいエネルギーをもつ」
ヨ　ニ「その力でノアの世界をも侵略し潰そうとしてるわ」
陽　子「たいへーん」
ヨ　ニ「でもゼルがレダのハートの謎をとくまでは大丈夫——ガルバは完璧じゃないわ」
陽　子「レダのハート!!」
ヨ　ニ「ガルバを動かすレダパワーの源よ——でも誰もその正体をしらない」
リンガム「いや!!　それがあのウォクマだとしたら——こりゃ急いだほうがいいぞい」
陽子とリンガム、あわてて梯子にのぼる。
ヨニー、キョトンとして、
ヨ　ニ「なによ!!　なにか知ってるのね、レダのハートについて!!」

●ガルバ・王室

ウォークマン、光の柱に支えられ、空間に浮いている。
満足そうに見つめるゼルの傍で、側近のチザムが解説する。
チザム「この磁性体の中に記憶された音声パターンが、大気中のレダのパワーと共鳴するようです」
ゼ　ル「やはり音声パターンがレダのパワーをひき出す鍵か!!　気づかぬわけだ!!」
チザム「音を組みあわせて楽しむ習慣はノア独得のもの」
ゼ　ル「コントロールの方法は」
チザム「この音声パターンと感応する力をもつ者なら可能でしょう」
ゼ　ル「よし　ワシがやる」
チザム「し、しかし、前人未踏の行為危険もともないますぞ」
ゼ　ル「フフフ、ワシ以上の力をもつ者がいるか？」
チザム「そ、それは」
ゼ　ル「さっそく準備をせい　レダ教徒の生きのこりが妙な動きをみせん

陽子設定（決定稿）

うちにな」
チザム「は、はァー!!」

●遺　跡

ラバスター、ドスドスとやってくる。

×　×　×（同コクピット）

陽　子「レダのハートっていっても、ただのテープの入ったウォークマンよ」
ヨ　ニ「テープっていうのには何が刻まれていたわけ」
陽　子「（言いよどむ）それは――」
リンガム「大事なことなんじゃよ」
陽子、フッと顔を上げる。

●回想（イメージ的に）

学校――放課後の人気のない廊下。
窓から西日がさし込んでいる。
教室――机の上にポツンと陽子の鞄。
窓から表を見つめている陽子。
その陽子の瞳、ひとりの少年を追いかけている。
サッカーボールを追う少年の姿――
陽子、ニッコリ笑う。

●遺　跡

ラバスター、コクピット。

陽　子「なんか、バカみたいだったわ……一人でいい気になってて。それがイヤで思いきって告白しちゃえと思ったの。で、そのキッカケになったのが、ウォークマンの中の音楽――わたしの作曲した愛の音楽よ」
陽子、なにかをふっきるようにニコと笑い。
陽　子「うん、そう。だから、アレがレダのハートだなんてなにかのまちがいよ」
ヨ　ニ「まちがいじゃないわ!!」
エッとヨニの顔を覗きこむ、陽子とリンガム。
ヨ　ニ「レダのハートってきっと音の組みあわせなのよ!!」
リンガム「なるほど!!　それでか、音楽を楽しむという習慣のないこの世界で、レダのハートが発見できんかったわけじゃ!!」
陽　子「ええ?　じゃあ、私のつくった曲が偶然……」
モ　ニ「きっとレダはノアに助けを求めてレダのハートを意味する信号をおくったのよ」
リンガム「それを陽子が感応して曲を作ったちゅうわけか　大変じゃ、ゼルはそのことに気がついとったんじゃ!!」
ヨ　ニ「つまりガルバはいまや完璧ってわけね」
リンガム「儀式を急げ!!　アシャンティを救うのはもう、レダの戦士しかおらん!!」
不安げな陽子の顔。

●ガルバ・エネルギー室

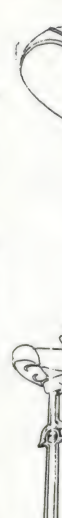
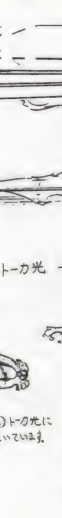
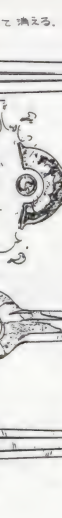
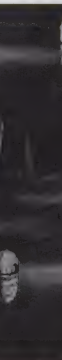
巨大なパイプオルガンを思わせる室内。
中央にゼル――光ファイバーで計器とつながられている。

クリスタルケースの中で輝くウォークマン。
ゼ　ル「レダのハートよ美しき鼓動よわたしをノアの世界に連れていってくれ!!」
ゼル、スイッチを入れる。
美しいピアノ曲が流れ出す。

●遺　跡

ラバスター、ドンドンと中へ入っていく。
陽　子「ほんとうにあたしがレダの戦士なの?」
ヨ　ニ「神殿ですべてはあきらかになります」
陽　子「……」
ラバスターの前に崩れ去った古代の神殿が現われる。
その一角の柱をおすラバスター。
と、池が割れ、その下に階段が現われる。
ラバスター、地下に降りていく。
湖底再び閉じて、なにごともなかったように再び、水が満ちる。
二連の太陽が地平線に沈む。

●地下神殿（夜）

奇妙な壁画に囲まれた巨大な空間に出るラバスター。
ラバスターから降りる三人。
陽　子「すごいしかけね――こうちきてから驚きっぱなし……」
ヨ　ニ「あなたがレダの戦士なら、力を与えてくれるはず」
陽子、不安げにあたりを見廻す。
ヨ　ニ「さア、祭壇へ!!」
陽　子「……」
リンガム「大丈夫じゃ」
陽子、奇妙な巨大壁画の下にしつらえられた祭壇に歩を進める。
陽子（M）「断わりきれない性格なのよね……」
心配そうに見る、ヨニとリンガム。
シュイーン!!　壁画の宝石が光り、突如、陽子を襲う緑色の光線
ヨニ・リンガム「ああっ!!」
陽子、緑色の炎に包まれる。
が、その表情かわらず、平穏なまま、きたない布きれだけが燃えさり、美しい鎧がその身をつつむ。
ハッとして顔を見あわせるヨニとリンガム。
緑色の炎、消えると、陽子　レダの戦士に変身している。
玉座にすわる陽子。
ヨ　ニ「レダの戦士来たりてここに座すとき――」
リンガム「力の門は開かれ、レダの翼は天空へはばたく!!」
ズゴゴゴ　轟音と供に巨大な壁画が左右に割れる。
その背後から出現する美しい飛行メカ――ウィング。
玉座はそのコクピットだったのだ。
言葉を失い只見つめる、ヨニとリンガム。
陽子、キッと操縦桿をにぎる。
と、ウイング、美しい光に包まれ、変形していく。

ウィングから鎧武者（アーマー）へ——
ヨ　ニ　ヨニ、興奮して、
「レ、レダのヨロイよぉ！」
コックピットの陽子、おちついて再び操縦桿を操作する。
再び、ウィングに戻る。
ヨ　ニ　「感激!! カンゲキだわ!! いったえが目の前で本当になるなんて!!」
陽子、コックピットから降りてヨニとリンガムに歩みよる。
陽　子　「レダがどうして私を選んだのか判らないけど……私、レダのハートを取り戻す。そして必ず、自分の世界へ戻るわ!!」

●浮遊城「ガルバ」

●エネルギー室（夜）

光に包まれ廻るウォークマン。光、パイプの中を走り、広大な部屋を美しい音楽が包む。が、ゼル、なぜか、苦しげに油汗を流す。
ゼ　ル　「ウ、ウ、ウ——」
ゼルにつながれたファイバーから光が放出する。
ゼ　ル　「ダメだ!!」
巨大なエネルギーシステムのあちこちで小爆発がおきる。
ゼル、ファイバーをひきちぎり、
ゼ　ル　「やめろぉ——!!」
音楽、ブツッととぎれ、光きえる。あわててかけつけるチザム、耳栓を外し、
チザム　「いかがなさいました」
ゼ　ル　「耐えられん——ただの音のつらなりが平穏な心をかき乱す力をもつとは!!」
チザム　「音楽の力がそれほどまでに——」
ゼ　ル　「想いが……ノアへの想いが足りないのか……」
チザム　「ゼル様、やはり人間の力では次元を越える事はできないのでは……」
キッ！　とチザムを見るゼル。
チザム　「(ビクッ)いや、ゼル様の力を疑うわけではありません。ただ伝説が心にひっかかっているのです」
ゼ　ル　「レダの戦士か——」
チザム　「人間が神の力を利用しようなどとはやはり大それた行いなのかも……」
ゼ　ル　「どうしたおじけづいたか!!」
ゼルの額、宝石の中におびえきったチザムの姿が映る。
宝石、不気味に赤く光る。

●イメージ（昼）

荒れ果てたアシャンティーの大地の上に浮かぶ、ゼルとチザム。
ゼ　ル　「見るがいい、レダに見捨てられたアシャンティの大地を!! 老いさらばえ活力を失い、かつての栄光は見るかげもない!!」
恐怖の表情のチザム。
ゼ　ル　「今さら何を恐れる!! 我々のなすべき事は一ツ。美しいノアの世界をこの手におさめるのだ！」
ゼルの表情、冷たく氷る——
ゼル　「それがわからぬというなら、アシャンティの大地と供に朽ち果てるがよい!!」
大地へヒューッ!!　と落ちていくチザム。

●同・エネルギー室（夜）

チザム　「ウワーッ!!」
ハッと顔をあげるチザム。
チザム、あわててあたりを見廻してホッとする。
ゼ　ル　「そうだ、レダパワーをマインドコントロールできるものがひとりいる」
チザム　「は!?」
ゼ　ル　「レダの戦士だ——ノアの娘を捜し出して連れてこい!!」

●浮遊城ガルバ（夜）

偵察機、次々と発進していく。

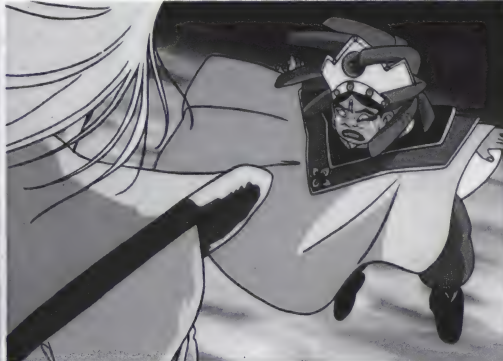
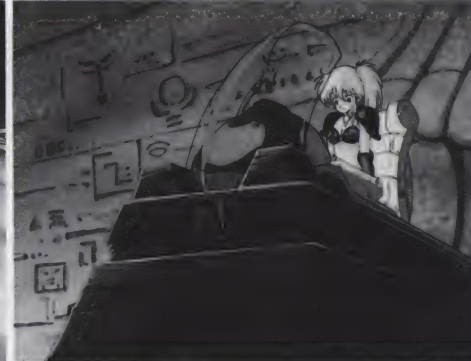
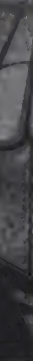
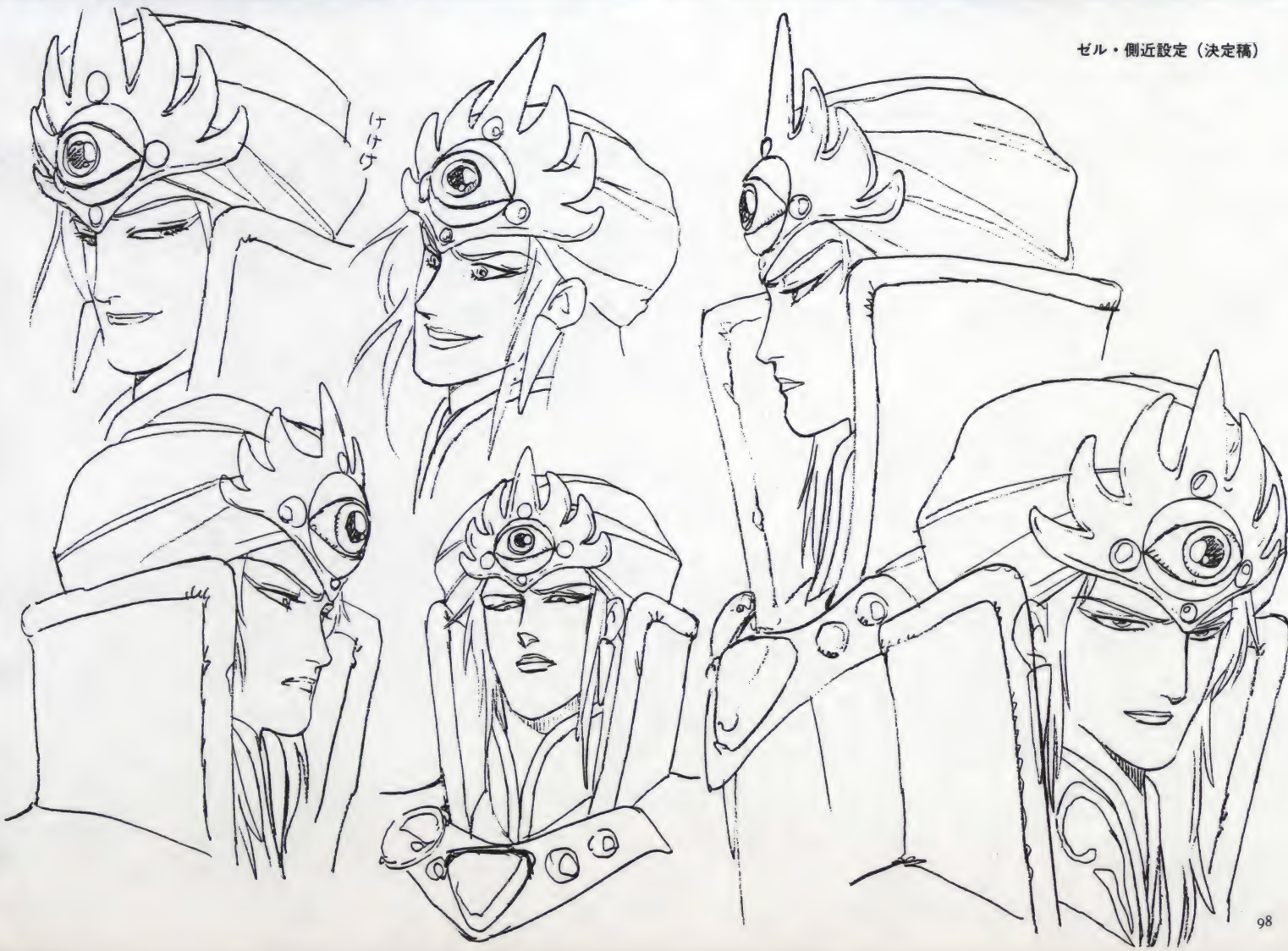
●遺跡（夜）

偵察ポット、無数、飛来する。
サーチライト、あたりをくまなく照らす。
池、水面を照らす、サーチライト。
小型ミサイル、水面にうちこまれる。
ズボッ!!　ズボッ!!
次々と水柱があがる。

●地下神殿（夜）

ザザアーッ!!
天井に穴があき、水がほとばしり出る。
キッと顔を見あわす、ヨニと陽子。
陽　子　「なにっ!!」
ヨ　ニ　「ゼルよ!!　みつかったのよ!!」
ヨニはラバスターに、陽子とリンガムはウィングにそれぞれに乗り込む。

●遺跡（夜明け）

東の空に太陽が顔を出す。
攻撃ポット、来襲し、池を集中攻撃!!
と、そのときドバーン!!
ラバスターとウィング、同時に大空に飛び立つ。
朝日、二体のメカに反射して輝く!!
急襲する攻撃ポット!!
ラバスター、あたるを幸いにポットを握り潰す。
ウィング、すばやい操縦で機銃乱射!!
次々と破壊される攻撃ポット。
が、続々とおしよせるポット。
ラバスターのボディーにひびが入る。
リンガム「ヨニが危ない!!」
陽　子　「まっててヨニ!!」
ウィング、ラバスターにかけつけようとするが、攻撃ポットがじゃまする。
あせるウィング——
ラバスター、グラリと傾く、

ゼル・側近設定（決定稿）

体内の部品がボロボロとこぼれおちる。

リンガム「あかんそこりゃ」

陽　子「むこうが多すぎるわ!!」

巨人、グラーと倒れてくる。そのとき、グワッシャン!! とコックピットくだけて、小型飛行体（バッグ）になり飛び出す。ヨニ、バッグを巧みに操り、次々と攻撃ポットをうち砕く。

平行して飛ぶウィングとバッグ。

陽　子「ヨニ！ そういう仕かけにかってたの……私もうどうしようかと思っちゃった」

ヨ　ニ「うまいことできてんだから！」

ウィングとバッグの連系プレー、攻撃ポットを全滅させる。

●ガルバ・王室

チザム「まちがいありません、レダの翼です、やはりあの娘、レダの戦士だったようです」

ゼ　ル「よし、出むかえの準備だ」

チザム「はっ、しかし、レダの戦士を利用するといっても……どのようにして……」

ゼ　ル「盗むのだ……。レダの戦士の心をな」

ゼル、ニヤリと笑う。

額の宝石がキラリ光る——

●ガルバ・廃墟

ガルバの下に拡がる廃墟——その間を超低空で飛来する、ウィングとバッグ。

上空には、無数の見張り塔が、不気味に浮かんでいる。

リンガム「ん？ 攻撃してこんぞ……」

ヨ　ニ「レダの翼を見ておじけづいたんじゃない？」

ウィングとバッグ、見張り塔をかすめ浮遊城へむけ上昇していく。浮遊城の巨大な裂け目、グングン近づいてくる。

●同・浮遊城内

その内部巨大な中空都市になっている。

降下していく、ウィングとバッグ

リンガム「こりゃあ、地面にひっぱられるカが、城の中心に集まってるんじゃな——」

ヨ　ニ「城を浮かせる装置のせいね」

はるか下に、巨大な洞穴のような地下通路入口が見える。

陽　子「ヨニ、あそこ、入口じゃないかしら」

ヨ　ニ「らしいわね——行くヨウコ!!」

陽　子「ここまで来てひき返す手はないわ」

ウィングとバッグ、つっこんでいく。

●地下カタパルト

ウィングはアーマーに変身して着地。

その横に着地するバッグ。

リンガム「簡単にいきすぎてかえって不気味じゃなァ」

陽　子「エエ……」

三人、ハッとする。

小型のメカ、三人の前までできてピタリ止まる。

メ　カ「ようこそガルバ城へ——お待ち申しておりました」

エ!? となる三人。

メ　カ「食卓の用意も整っております。さ、こちらへどうぞ」

キョトンとして顔を見あわす三人。

陽　子「どうする、ヨニ……？」

ヨ　ニ「罠かもしれないわよ！」

リンガム「それでもあてもなくウロついているよりは、ましなんじゃないか、いざとなればこっちには、レダのよろいもある事だし」

メ　カ「どうしました？ 御料理が冷えてしまいますよ」

ヨ　ニ「ようし、行ってみるか——でもヨウコ、油断しちゃダメよ」

陽　子「わかってる！」

メカの後についていく、アーマーとバッグ。

●大広間

天井すら見届けられぬ程の巨大空間。

美しい光に包まれ、食卓には山海の珍味があふれている。

ゼル、すでにテーブルに控えている。

ゼ　ル「（ごく紳士的に）ようこそ、レダの戦士よ」

三人、用心してコックピットから降りる。

陽　子「あなたがゼルね」

ゼ　ル「光栄だね……私の名を知っていていただけたとは。さぁ、どうぞ掛けて下さい」

キッとにらむ陽子。

ゼル、スッと立ち上がり、陽子たちに近づいていく。

ゼ　ル「そんなに恐い顔はやめてほしいな、これでもずい分と手加減してきたつもりなのに……」

陽子、慎重に一歩、あとずさる。

ゼ　ル「それとも、もっとやさしくして欲しかったの？こんな風に——」

とキスしようとするゼル。

陽子、とっさに平手でうつ。

ゼル、ニヤリと笑う。

陽子、キッと表情を固くして、

陽　子「あたしのウォークマン——いや、レダのハートを返して!!」

ゼ　ル「——もちろんお返しするよ」

ヨ　ニ「フン!! 調子のいい事いったってダメよ。あんたのたくらみはみーんな判ってんだから!!」

リンガム「そういうこと!!」

ゼル、フッと笑い。

ゼ　ル「ほんとうに疑り深いメンバーがそろったもんだね」

ゼル、懐からウォークマンをとり出す。

ゼ　ル「レダのハートはちゃんとここにある」

陽子、ハッとしてゼルの元に歩みよる。

ヨ　ニ「あっヨウコ待って!!」

ヨニ、陽子の後を追おうとして、目に見えないバリヤーにぶつかる。
ヨニ、ダッとはねとばされる。
リンガム「何じゃ？　空気の壁か!!」
ヨ　ニ「やること、せこいよ!!」
ヨニ、ヨロヨロッと起き上がり、
モ　ニ「ヨウコ!!　ヨウコ!!」
リンガム「ジョシコォセ!!」
× × ×(バリヤー外側)
ヨニ、リンガムの声、きこえない。
ゼ　ル「レダ教のうるさ方には静かにしておいてもらおう」
陽子、サッとふりむくと、キラリ剣をぬく。
ゼ　ル「多くの神学者がレダのハートを捜した。しかし、元々アシャンティにそんなものはなかったんだ――ところがある日、わたしは異世界ノアから強いエネルギー波をとらえた。それこそ我々がさがし求めていたレダのハート」
陽　子「やはり、あなたがわたしを引きこんだのね」
ゼ　ル「いや、呼びかけただけだ」
陽　子「呼びかけただけ!?」
ゼ　ル「わたしは手助けをしただけだ――あなたは自らの意志でアシャンティにきたのだ」
陽　子「うそ!!　わたしはアシャンティなんて知らなかったわ!!」
ゼ　ル「君はあのとき望んでいた――心が――自分が傷つくことのない世界にいきたいと」
陽子、うっとつまる。
ゼ　ル「この世界で会った人物を思いだして見るがいい」
バリヤーのむこう、機銃を乱射しているヨニとリンガム。
ゼ　ル「子供――動物――そしてメカ。互いの心を本当に傷つけあうのは、大人の男と女」
陽子、ハッとしてゼルを見つめる。
ゼ　ル「もう分かったね。あなたは来るべくしてアシャンティに来たんだよ」
陽　子「あの時はそーだったかもしれない。でも今はちがう。たとえ心が傷ついても、なんにもおこんない世界なんかよりずっとすてきよ!!」
ゼ　ル「……」
陽　子「ノアにかえるの!!　あの世界で生きていくのよ!!」
ゼ　ル「だったら我々と一緒にノアへ行きましょう。もうすぐこの城は動きだす。ノアにむかってね」
陽　子「そんな事、させないわ!!」
ゼ　ル「レダの戦士はレダそのものではない……その肉体はわたしと変わらぬ生身の女性」
ゼルの額の宝石――キラリ、光る。
ゼ　ル「愛しあう事だってできる筈だよ――愛しあう事だって」
宝石の中に映る陽子の姿。
陽子の瞳、生気を失っていく。
ダラリと下がる腕から剣がおち、ガクッとひざをつく。
陽子、完全に気を失う。
× × ×(バリヤー内)
リンガム「どうしたんじゃ、ジョシコォセ」
ヨ　ニ「ヨウコ!!」
ガチャガチャ!!　という音にハッとふりむく二人。
いつのまにか無数のウォリアにグルリとり囲まれている。

●エネルギー室

気を失っている陽子。
陽子、光ファイバーでがんじがらめになり、宙に浮いている。
椅子にしばりつけられているヨニとリンガム。
ヨ　ニ「やい！　ゼル、いったいおまえ陽子に何をしたんだよ」
リンガム「まさか、殺したんじゃないだろうな……」
一段高いコントロール室から三人を見おろす、ゼルとチザム。
チザム「我々にはレダのハートのエネルギーを使いこなせなかった。だから代りにレダの戦士に操ってもらっているのだ」
リンガム「なんじゃと……!?」
ヨ　ニ「ど……どういう事よ！」
と、ガルバに響くスピーカー音。
アナウンス「次元移動エネルギー発動レダパワー全開!!」
アナウンス「次元座標軸、確認！　誤差修正！」

●ガルバ城周辺

ノアの蜃気楼とガルバの間に七色の虹が渦をまく。

●エネルギー室

ゼ　ル「もうすぐ、次元の扉が開く、新世界への旅立ちのときがきたのだ。――そうだ、約束どおりレダのハートはお返ししとこう」
ウォリア、ウォークマンをリンガムの首にかける。
ヨ　ニ「じゃいま、このレダパワーは!?」
ゼ　ル「レダのハートの音声パターンはすでに解読した。その音声パターンから生まれるエネルギーを、レダの戦士がコントロールしてくれているのだ」

●ガルバ・機関部

まるで有機体のようにうごめく内部メカ。
血のように赤く輝くレダパワー流れて、
ゼル(off)「彼女は文字通り、このガルバのハートになったのだよ。ノアへの想いをこめてな」

●ガルバ城周辺

上昇していくガルバ。
重力異常で、まわりの廃墟、くずれおちていく。

●ガルバ・エネルギー室

ヨニとリンガムのまわり、ボール状の浮遊メカが乱舞し始める。
リンガム「なにをする気じゃ」
ゼ　ル「ノアへのいけにえになってもらう」
ボールからノコギリ状の歯がとび

レダの鎧　2（飛行形態）

レダの鎧　1

○コクピット ハイライトあり
○目の部分BLヌリ 穴だと思って下さい
○タッチじゃまにならない程度に入れて下さい

レダの翼・よろい設定（決定稿）

レダのよろい初期設定

タイプⒶ 戦闘形態

レダの鎧《コクピット》

出す。
ヨニとリンガムのまわりを乱舞
少しずつ傷ついていく二人。

ゼル　「次元の道は長い――ゆっくり
と楽しませてもらうぞ」

ヨニ　「陽子！起きて！目を覚まして
!!」

リンガム　「ねとるばあいじゃないぞぉ
!!」

ゼル、余裕の微笑をうかべ――

ゼル　「ムダだよ……彼女は今、夢の
中だ。ノアへの想いをこめた、甘い夢
の中だ……」

光ファイバーに包まれ、眠る陽子。

ゼル　「誰にもじゃまされず、幸福な
夢にひたっているはずだ……」

●夢・プールサイド

ビーチパラソルの下、眠っている
陽子。

ヨニ(off)「ヨウコ……ヨウコ……」

ハッと目をあける陽子。
と少年A、缶コーラをさし出す。

少年A　「はい、陽子」

陽子　「あ、ありがとう……」

少年A　「何、ぼんやりしてるんだよ」

陽子　「ううん、別に――」

少年A、陽子の横のサンチェアー
に並んで寝そべる。

少年A　「ねエ、覚えてるかい、あの並
木道を」

陽子、ハッとする。
少年とすれ違った並木道（フラッ
シュ的に見える）。

少年A　「あの時は少し驚いたけどね―
君が急にはなしかけてきて―」

陽子　「そう――そうだったわよね―
もちろん覚えてるわ」

陽子、ハッとして――

陽子　「ねエ、あの時のテープ、どこ
にいっちゃったのかしら――」

少年A　「え？　どのテープ？」

陽子　「あたしがウォークマンできい
てた」

少年A　「ハハハ、何言ってるんだよ、
君はそんなもんつけてなかったよ」

陽子　「そうだったかしら……」

ホッとため息をつき目をとじる陽
子。

ザワザワと人の声が耳につく。

陽子　「だめだわ、思いだせないわ―
人が多すぎるせいね……」

●夢・海辺

人々のザワメキ、バタリと消える。
遠くカモメの声――
陽子、ハッと目覚めて唖然とする。
人けのない海辺で体をやく陽子と
少年A。

陽子　「……海、海だわ」

少年A　「おかしいよ、今日の陽子は…
…。君が来たいって言ったんだよ」

陽子　「ねエ、確かにあったわ！」

少年A　「何が？」

陽子　「テープよ!!　あの曲を入れた
テープよ」

少年A　「又その話かい……でもボクは
覚えてないよ」

陽子　「ウソ……あなたにも聞かせた
事があるはずよ……ホラ、あのメロデ
ィ……」

陽子、愕然とした表情――

陽子　「想い出せない！」

少年A　「陽子……そんな事、どうでも
いいじゃないか、今ここにこうして僕
たちはいるんだ……それ以上、君は何
を望むんだい？」

●シーサイドホテル・一室

佇む男と女――陽子と少年Aだ。

少年A　「愛しているよ陽子――」

ユラリ、揺れるカーテン。
と、エイ、空中を泳ぐように入っ
てくる。
二人、まるでそれを気づかぬよう
に――

陽子　「ねエ……あの曲」

少年A　「愛しているよ」

陽子　「あの曲は確かにあったわ」

少年A　「愛してるよ……」

陽子　「あなただって聞いたはずよ」

少年A　「君が好きだ」

陽子　「想い出して――お願い……」

少年A、まるで感情のないテープ
のように。

少年A　「愛してる、君が好きだ……愛
してる、君が好きだ……」

陽子　「あの曲はあったもの、本当に
あったもの!!　そうでなきゃ、あなた
とここにこうしているはずないわ!!」

陽子、ハッと見上げる。
天井近くをゆうゆうと泳ぐエイ。

陽子　「ウソよ!!　こんなのデタラメ
よ!!」

●ガルバ・エネルギー室

ゼルの額の宝石、激しく点滅する。
ゼル、ううっと頭をおさえる。

ゼル　「な、なんだ!?」

陽子を包むファイバーから、激し
く光がほとばしり出る。

陽子、意識下の抵抗で汗がにじむ
――

陽子　「(眩く)ウソよ……ウソだわ…
…」

ヨニとリンガム、ボールに襲われ
ながら、

ヨニ　「陽子……目を覚まして、お願
い……」

●ガルバ周辺

ガルバと蜃気楼を包む七色の虹、
歪む。

すさまじい放電現象がおこる。

アナウンス「次元座標軸、混乱!!」

●ガルバ・エネルギー室

陽子、意識下での闘いにゆがむ表
情。

陽子　「う、う……」

●同ガルバ内・整備工場

アーマー、奇妙なつるにからまれ、
宙に浮いている。
ビィーン!!
アーマーの目に光、入る。
その腕にグクッと力が入る。
ブチン!!　ブチン!!

エア・バイク設定（決定稿）

陽子の乗るエア・バイク

（着陸姿勢）

○風防・実線 ハイライトさトし

○首引き上げる

（滑走時）

ノズル×2

スタビライザー

（2足歩行時）

○脚の引き込み方

☆離着陸時は、脚り足で。（その他必要におうじて足も作う。）

○ヨニの脱出カプセル

○脱出時・ヨニのメカが切り離されると同時に床が閉ざる。

○陽子・適当につかまる部分を作って下さい。

昇降口（ハッチ）

○巨大ロボット時
２本のレバー操作でアクションするものとして下さい。
○天井からのスイッチ類もてきとーに使って下さい。

巨大ロボットのコクピット C49

巨人ロボット設定（決定稿）

ヨニの乗る脱出カプセル

○飛行時は機体が少し前かがみになります。

○ノズル・加速時以外内側にブラジ

○機銃・この１本だけ長く！あとゴチャゴチャとフンイキで。

○ここのファン回転！（回転時はタッチを迷る）

エア・バイク初期設定

○炸裂弾発射口×2

○グリップ位置

○エアインテーク

○ステップ位置

背当ハンガー

○反重力エンジン？

○推進器

○スタビライザー

☆滑翔手をはなしても地上との高さとスピードは、維持される。

陽子の乗る エアカーの検討もの

巨大なつる、ひきちぎられる。
ドドーッ!!
飛びおりるアーマー。
警備していたウォリアたち、あわてて逃げ迷う。

●ガルバ周辺

いよいよ激しくなる放電。

●ガルバ・エネルギー室

エネルギー炉、放電がおこる。

×　×　×

陽子のまわりのファイバーにも放電がはしる。

ヨ　ニ「ヨウコ!! 起きて、早く目を覚まして」
リンガム「ジョシコォセ、おきんしゃい」
ゼル、キッと睨みつけて、
ゼ　ル「黙れ!!――なぜ夢から逃げようとする――そこには望むものはすべてあり――お前が傷つくこともない」
目を閉じて念ずるゼル――額の宝石、赤く光る。
放電に包まれ苦しげな陽子――

●夢（教室）

ふっと目をあける陽子。
人けのない夕暮れの教室。
エイがゆっくりと空間に漂う。
教室に入ってくる少年A。
少年A「陽子、迎えにきたよ。一緒に帰ろうよ」
陽子、机の上で指を運ぶ。
陽　子「だめ――」
少年A「どうして――」
陽　子「思いだしているの」
陽子、懸命に指を運ぶ。
少年A「何をしてるんだい」
陽　子「メロディーよ――あたしがあなたに声をかけたときもってたテープの、あの曲よ」
陽子、指を動かしながら、メロディーを口ずさみはじめる。
少年A「う……う……」
苦しみはじめる少年A、その体が赤い光に包まれる。
少年A、ハッと顔をあげるとゼルに化身している。
ゼ　ル「忘れられないのか!!」
陽　子「ゼル!?」
黒板にメキメキッとひびが入り、ドカーンと巨大なエイが出現する。
陽子、あわてて飛び出す。

●階　段

無限につづくように見える階段。
そのあとを追う巨大なエイ。
陽　子「屋上のドアはどこ!!」
突然、目の前にドアが現われる。
陽子、バッとドアを開く。
ザアー、光みちあふれ、陽子のセーラー服が四散する。

×　×　×（同屋上）

レダの戦士の服装に戻った陽子、スラリと剣をぬいてかまえる。
ドカーンと床をつき破り、出現する巨大エイ。
陽　子「!!」
陽子、ダッと飛び上がり、エイの背中に剣をつき立てる。

●ガルバ・エネルギー室

ゼ　ル「うぉっ!!」
ゼル、身もだえる。
ビビッ!!
エネルギー室の床にひびが走る。
火を吹くエネルギー炉。
バチバチ!! とちぎれるファイバー。
陽子、ハッと目覚める。
ヨ　ニ「陽子!!」
リンガム「助けてくれ!!」
陽　子「ヨニ!! リンガム!!」
スラリ、腰の剣をぬく陽子。
ボール、いっせいに陽子に襲いかかる。
次々となぎはらう陽子。
襲いかかるウォリアたち――
とそのとき、壁面が崩れ、アーマー、姿を現わす。
ウォリアたち、次々となぎ倒される。
ヨ　ニ「陽子!!」
陽　子「大丈夫!? ヨニ、リンガム」
リンガム、陽子にウォークマンを渡し、
リンガム「ホレ、おまえさんのウォクマじゃ」
陽子、ハッと明るい表情。
とそのとき、エネルギー炉から次々と火柱。
ゴゴゴゴ――
ヨ　ニ「さ、早く逃げましょう!! くずれるわ」
呆然と見つめているゼルとチザム。
チザム、ガクッとひざをつき、
チザム「やはり伝説のとうりだ――」
ゼ　ル「ククク……」
ゼル、怒りとくやしさがわきあがってくる。
ギラリ!! 剣をぬき、ダダッと陽子に襲いかかる。
陽子、キッと剣をふる。
ビシッ!!
陽子の切っ先が、ゼルの宝石につきささる。
砕ける宝石。
ズゴォーン!!
ゼル、エネルギー炉の火柱にまきこまれる。
陽　子「!!」

●ガルバ周辺

ガルバ内部で次々とおこる連鎖爆発!!
巨大な火球と化していく。
と、飛び出してくる、ウィング。
ズゴゴゴォ――
ガルバ、大地へ堕ちていく。
ウィングのコックピットで――
ヨ　ニ「レダパワーを復活するのもこれでふりだしか」
陽　子「ゼルはどうしてあれだけの力をアシャンティのために使わなかったのかしら」
リンガム「まったくじゃて――アシャンティもまだまだ捨てたもんじゃないぞい」

▲中空都市入口　▲動力炉　▲コントロール室

▲アシャンティ地図

▲レダの神殿

陽　子「そしてノアもね」
リンガム「おおーっと急がんと、見てみい、ジョシコオセ」
　うすれていくノアの蜃気楼。
ヨ　ニ「ノアとアシャンティが離れていくわ」
陽　子「ゆっくりおわかれしているひまもないわね」
リンガム「まーそのうちあえるさ、会いたいと思えばね」
ヨ　ニ「そのときはわたしもヨウコみたいに恋人をつくっとく」
リンガム「それはどうかな!!」
ヨ　ニ「なにっ!!」
陽　子「大人になって……きっとすばらしい恋をするわ――」
ヨ　ニ「うん」
陽　子「ありがとうヨニ――ありがとうリンガム」
　見つめあう陽子とヨニとリンガム

●並木道

陽子、ウォークマンのヘッドホーンをかけて、スイッチをいれる。
輝く虹、陽子を包む。
虹の中を陽子の体、飛んでいく。
ふっと目をあける陽子。
何ひとつかわらない、陽光あふれる並木道。
陽　子「!!」
ハッとふりむく陽子。
少年A、歩いていくのが見える。
陽子、ヘッドホーンをはずし、少年にむけて駆けていく。
少年A、ふと立ちどまりふり向く。
二人、近づいていく。
並木道のむこう、現実の街が美しく、息づいている。
（F・O）

▲初期設定レダの生物風景

企画　藤原正道
　　　カナメ企画
プロデューサー　長尾聡浩
原案　カナメ企画
脚本　武上純希
　　　湯山邦彦
キャラクターデザイン 作画監督　いのまたむつみ
監督　湯山邦彦
アニメーションコーディネーター　影山楙倫
　　　小原渉平
メカニックデザイン イメージ設定　豊増隆寛
美術監督　下川忠海
音楽　鷺巣詩郎
音響監督　松浦典良
撮影監督　杉村重郎
メインアニメーター　いのまたむつみ
　　　影山楙倫
　　　林　隆文
　　　毛利和昭
　　　土器手　司
　　　田村英樹
　　　上妻晋作
　　　伊藤コウジ
　　　合田浩章
　　　村中博美
　　　豊増隆寛
　　　小原渉平

キャスト
朝霧陽子　鶴　ひろみ
ゼル　池田秀一
リンガム　富山　敬
ヨニ　坂本千夏
側近　辻村直人
兵士A　戸谷公次
兵士B　塩屋浩三
オムカ　渡辺菜生子

編集　掛須秀一
　　　松村正宏
　　　石田　悟
効果　伊藤克己
録音　大塚晴寿
　　　小原吉男
制作デスク　池田昭浩
進行主任　尾形浩三
進行　稲荷昭彦
文芸担当　政木伸一
制作事務　山下陽子
アニメーター　渡辺真由美
　　　山内英子
　　　福島喜晴
　　　増尾昭一
　　　和田卓也
　　　高橋義則
　　　中村　清
　　　西井正典
　　　南　全子
　　　石田敦子
　　　中野深雪
　　　茂木エリ子
　　　橋本利彦
　　　藤田浩史
　　　薄　正昭
　　　大山順央
　　　嶋田　豊
　　　讃岐　平
　　　やぶもとえりこ
　　　菅澤摩美佳
　　　福江光恵
　　　大島康弘
　　　尾林幸男
　　　片岡康治
　　　鷲尾千広
　　　稲田　浩
　　　只野秀樹
　　　菊地　淳
　　　高木美喜子
　　　蛭田広良
　　　児玉俊二
　　　斉藤真美
動画チェック　山内英子
　　　渡辺真由美
動画協力　スタジオダブ
　　　みゆきプロダクション
　　　アニメアール
　　　サーカスプロダクション
　　　スタジオライブ
　　　スタジオピグモン8
　　　スタジオホイホイ
　　　キティフィルム

色指定　布本由紀子
仕上検査　池上恵子
　　　大河原良江
仕上　鵜飼美樹
　　　山脇智子
　　　増田奈緒子
　　　篠田十紀子
　　　平賀恵子
　　　細野明美
　　　くろいわ優
　　　飯塚知久
　　　永井留美子
　　　小松崎悦子
　　　高羽真理子
　　　今田和幸
仕上協力　STUDIO OZ
　　　スタジオファンタジア
　　　スタジオアクト
　　　スタジオ九魔
　　　グループ Joy
特殊効果　菅原利香
背景　スタジオ POP
撮影　枝光弘明
　　　小堤勝哉
　　　羽山泰功
　　　坂田美保
　　　スタジオ ぎゃろっぷ
タイトル　マキ・プロダクション
　　　安倉光弘
録音スタジオ　整音企画
音響製作　現
現像　東京現像所

主題歌
「風とブーケのセレナーデ」
作詩　岩里祐穂
作曲　馬飼野康二
編曲　鷺巣詩郎
挿入歌
「一人ぼっちのドリーマー」
作詞　佐藤ありす
作曲　馬飼野康二
編曲　鷺巣詩郎
「行方不明のハートたち」
作詞　佐藤ありす
作曲 編曲　鷺巣詩郎
唄　秋本理央
オリジナル・サウンドトラック盤
キングレコード
レコーディングディレクター　高塚俊紀
レーディングミキサー　吉江一郎
ノベライズ　菊地秀行
（講談社刊X文庫）
協力　講談社
　　　コミックボンボン
宣伝協力　アウト（みのり書房）
　　　アニメージュ（徳間書店）
　　　アニメック（ラポート）
　　　アニメディア（学　研）
　　　ジ・アニメ（近代映画社）
　　　マイアニメ（秋田書店）
　　　アイウエオ順

製作
東宝株式会社
株式会社　カナメプロダクション

想い入れ……

プロデューサー　藤原正道

MESSAGE

「レダ」ファンの人（この本を買ってくれる人なら多かれ少なかれそうだと思いますが）なら、アニメ誌その他で製作スタッフのコメントなり製作プロセスなりをすでにいろいろとご存知だと思うので、私なりに製作過程を思い返して特に気がつく点について書いてみようと思います。

まず予定ではこの作品実は12月上旬の完成の予定だったんですが、実際は２月５日の初号試写となってしまい、約２ヶ月遅れてしまいました。（もし劇場公開等が決まっていたらと思うとゾォーとしますが）勿論それにはいろんな理由がありますし、ここに書けない様な政治的な理由もありました。

でも最大の理由は、やはりこの作品が完全なオリジナル作品であるという事ではないかと思うのです。

一本の作品を完成するのに多数の人々が関わりあうアニメの仕事の場合、そして特に「レダ」の様にオリジナルの場合その一人一人の持つ作品イメージがそれぞれ微妙に違う訳ですから、それを調整して一つのコンセプトのもとに仕上げていくという作業は、企画段階、設定、そして作画の初期においては想像以上の試行錯誤を伴うものであるという事が、この作品をやって初めてわかった次第です。

それと長尾氏（カナメプロ）によると、

「いのまたさんのキャラというのは実に微妙な部分でバランスを保っているキャラなので作画特に原画の人は大変なんですよ。だから原画マンは気心が知れてやる気のある人達をできるだけ人数を絞って統一性を保っていきたいんです」

という様に、初めてのいのまたオリジナルキャラの映像化（それが大きな狙いでもあったのですが）という点で、大変苦労したという事もできるでしょう。

ただ10月位から軌道にのりはじめてからは、比較的順調に進行したと思います。特に11月時点で海外用プロモーションフィルムを作りましたが、これでほとんど作品イメージは統一されましたし、作品の質的にもまず間違いないと確信を得ることができ、あとはこの調子を最後まで、どうやって持っていくかという一点に私の仕事はしぼられたといっても良いかも知れません。

ただひとつ会社に対し作品仕上りの遅れをどうやって説明するかを除けば――。

でもそんな事、湯山さん、いのまたさん、影山さん、長尾さんたちの苦労に比べればまだまだどうという苦労ではないのですが。

又今度の仕事でなんといっても一番嬉しかったのは湯山さんはじめスタッフの情熱を直接感ずる事ができた事です。

私自身、シナリオを書ける訳でもなく、絵を描ける訳でもありません、力のあるスタッフの人たちの情熱だけが頼りなのですが、この点に関しては頭が下がる程嬉しいチームワークでした。

「うる星やつら」の押井氏から始まったアニメ界の新勢力（それ以前の人を旧勢力という訳ではないのですが、年齢が若いという意味であえて云わせていただくと）はここ２～３年、めざましい力を発揮してきていますし、10年前には考えられなかった様な映像が作られ様としています。それにはビデオという新しいメディアがその機会を提供しているという理由も相当ある様に思います。

そしてすでに最近はビデオから映画という動きはよくありますし、近いうちにはビデオ用オリジナルアニメがＴＶシリーズになる事だってあり得るのではないでしょうか。

そして、そんな新勢力の先頭に立って引っ張っていく人の一人が湯山さんであり、いのまたさんであり、その他この作品にたずさわった人達であるのは間違いのない事の様に思えるのです。

SEE YOU AGAIN!!

今、何回か「レダ」を見直して感ずるのは、何回見ても完成度は相当高いと確信していますが、部分的に不十分な所があるという事と、長さをあと10分長くしてより密度の濃い作品にしたかったナァーという事です。

ビデオ用に作っておいて虫の良い話ですが、簡単に云えば、より映画的な作品にしたかったということです。

そして日がたつにつれ私の中ではこの想いが強くなってきていて、なんとかパートⅡでそれを実現したいと思っています。

一カットのムダもない完全な映像、そして劇場での上映、これを実現しないうちは完結した様な気がしないのです。

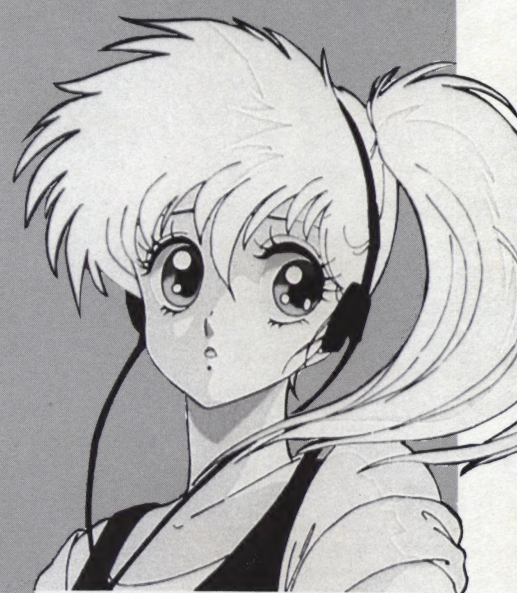
もちろん、オリジナルなのでどんな話になるのか不安もありますが、それはスタッフの情熱が吹きとばしてくれるでしょう。

そして、それが完成した時

「これは第二のカリオストロだ！」

（想いこみとしてはそれ以上の作品をめざしてますが）

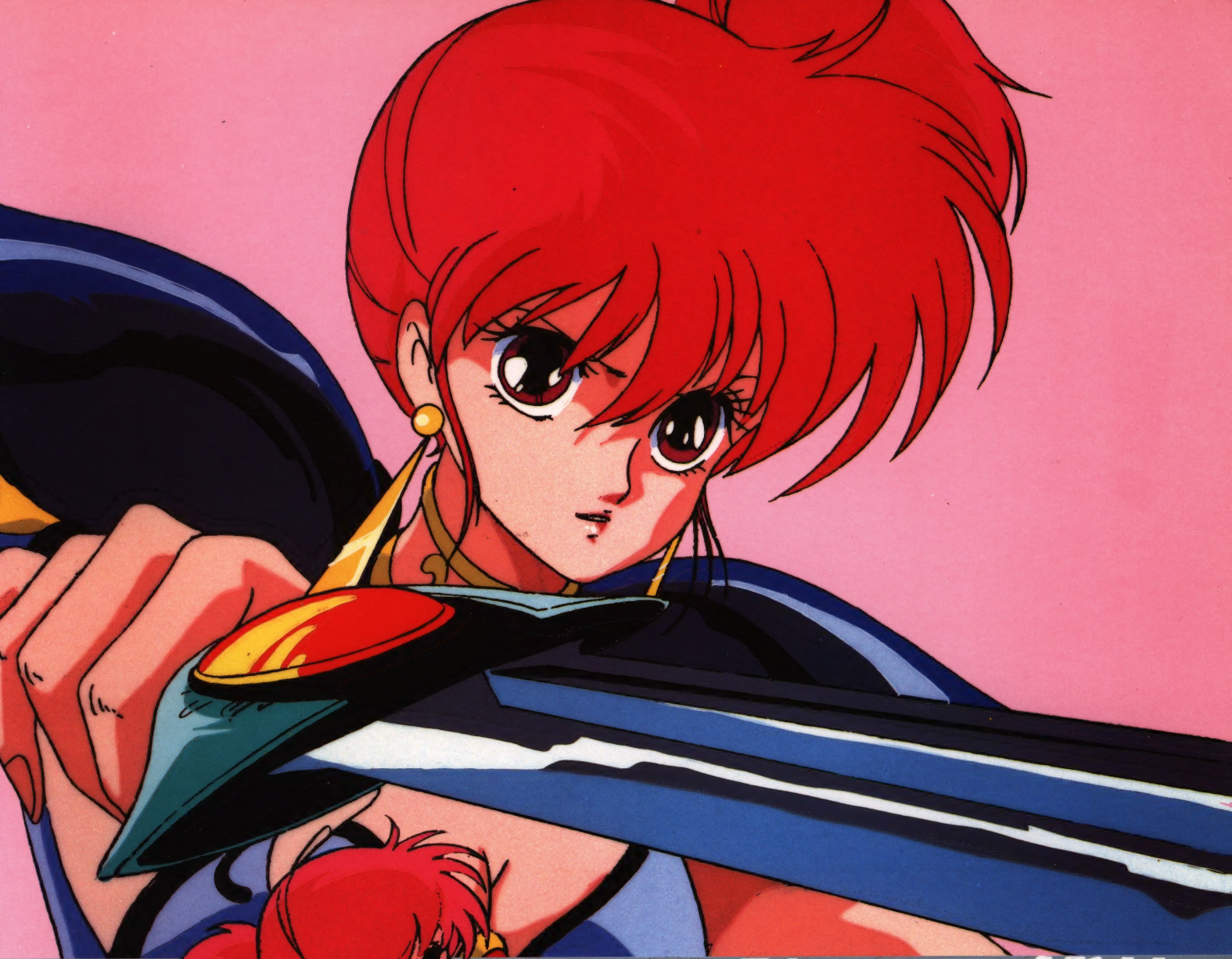
と云われるのを想いながら、近日中にパートⅡのシナリオ打合せに入る予定です。

STORY ALBUM

1985年５月31日初版発行

定価1200円

発行人／大橋雄吉
発行所／東宝株式会社事業部出版商品販促室
〒100 東京都千代田区有楽町１－２－１
編集人／遠藤積慶
編集協力／鳴海　丈（インタビュー構成）
印刷／成旺印刷株式会社

ISBN4-924609-09-9 C8779 ¥1200E

奪われたメロディーを求め、ヨーコはレダの戦士に!
オリジナル・ビデオ
幻夢戦記
レダ
Hi-Fiステレオ
▶TA1404◀カラー・72分(VHS・ベータII)
¥12,000
海外向けプロモーション・フィルム
(英語版)付き
絶賛発売中!
FANTASTIC ADVENTURE OF YOHKO
LEDA
TOHO VIDEO
好評発売中
うる星やつら2
★ビューティフル・ドリーマー★
▶TA1262◀カラー・98分 (VHS・ベータII) ¥14,000
ナイン
●完結編●
▶TA1292◀カラー・73分 Hi-Fiステレオ(VHS・ベータII) ¥12,800
ルパン三世
カリオストロの城
(完全版)
▶TA0100◀カラー・100分 (VHS・ベータII) ¥19,800
テクノポリス21C
▶TA1273◀カラー・88分 (VHS・ベータII) ¥14,000
■お問い合せ、カタログの請求は下記へ■お求めは、全国有名電気店、レコード店、及びビデオ専門店へどうぞ
TOHO VIDEO
東宝株式会社・ビデオ事業室
〒100 東京都千代田区有楽町1-2-1 ☎03(591)1017
関西支社ビデオ課 大阪市北区堂山町17-13 TEL 06(361)0256 〒530
中部支社 名古屋市中区栄1-2-6 TEL052(231)8086 〒460
九州支社 福岡市博多区中洲5-5-1 TEL092(291)2734 〒810
北海道東宝株式会社 札幌市中央区南一条西1-1 TEL011(231)2907 〒060

Fantastic Adventure of Yohko
Leda
STORY ALBUM
定価1200円
ISBN4-924609-09-9 C8779 ¥1200E